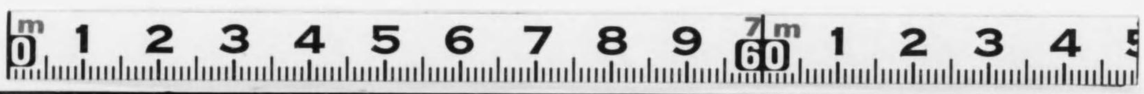


913.49-Sh467
1200500757445

J 13
41

23813

913.49
SH46
(1)

文學士島津久基編著

通俗新篆 初輯

東京 中興館藏版

はしがき

近古の草子物語の未刊書の蒐集に心掛け初めたのは、もう十數年以前、まだ私が帝大の當時文科大學といつた頃の國文科の學生だつた時からの事である。埋もれた古書を拾ひ出す樂しみと、普通には餘り顧みられないものにも却つて何かの意味を見出したい或心持からなのであらう。

けれども其後繁忙の校務と元來の淺學とが竟に成果を結ばせるに到らずして今日に及んだ。偶〻思ひよらなかつた大患の虜となり、幾度か死生の境に彷徨して身も心も壞れ傷いたが、何し等の恩寵か再び蘇つて天日を仰ぎ得んとするに嚮ひ、そして病閑が僥倖にも此の編纂の資料を整理する機會を與へてくれることになつた。回生を記念する爲にも素志を果したいと考へて取りかかつたのである。そして考說・頭註は勿論、本文の校訂から校正に到るまですべて自ら之に當つた。而も病弱の孤力と生來の駑鈍とは如何ともし難く、遲々として捗らず、漸く今此の最初の一輯の原稿を纏めるまでになつた。

近古の小說類で未刊の作品はかなりに有る。尤も大部分は曾て江戸時代初期に所謂假名草紙と混交して、或は其の名稱の下にも併せられて上梓せられ、それが傳存してゐるのも無論澤山あるが、それとても失はれたのも隨分多いやうである。寫本でしか傳はらぬのもあり、又上梓

國立圖書館
昭和24.2.5
寄贈

を看すして散佚したのも尠くないが、蒐集を心掛けてゐる間に、散佚書と目せられてゐて往々傳存の發見せられたのも二三にして止まらぬ。

新しく刊行せられた此の種の作品集も亦多くない。既刊のものの中では、特に纏まつて珍しい作を集めたといふ意味からは、僅に例言中に掲げた今泉・畠山兩氏共編の『御伽草子』以下の四書を算するのみである。本輯には、單に新しい活字に鏤られないが故にといふ見地からよりも、なるべく傳存の稀少なものを先づ輯めたい目的から著手することにした。もとより創作値は大抵高くないものばかりと言つてよいのであるが、稚蒙なるもののみに許された世界を窺ひ、大衆の僞らざる天眞の聲を聽くには、好箇の資料たるを失はぬ。近古文學の篤志研究家に、亦多少の寄與する所あらば、編者の本懐之に過ぐるはない。

本輯編纂について、祕庫を開いて珍書を貸與し、或は稀覯書披閲の便宜を計り、又斷えず激勵の辭を與へられた諸先生、先輩、畏友の方々に改めて感謝を捧げたい。又此の殆ど營利を離れた版行に對する書肆中興館主人の厚意を多とする。

唯、悔の八千度かへらぬ憾は、此の書冊を捧ぐべき方々の中に、恩師芳賀先生と家父とを數へることの出來ないことである。

校訂・註解の不備、考說の未熟過誤等、偏に識者の是正を仰ぐ次第である。

昭和三年三月

編著者

例言

一、本輯は近古小說新纂の初輯として編んだものである。

一、本輯に收めた作品は通計十五種、內四種は幸若舞の本で、他は普通の小說である。

一、近古小說は概して作者名と創作年時とが明確で無いのが其の一特色と言へるほどである。且性質上江戶時代の初期の作品中にも、此の名の下に一括して取扱はれてよいものが尠くない。本輯收むる所、亦必ずしも所謂鎌倉・室町時代の作品と明らかに推定し得られるもののみに局限してはない。

一、本輯には、今泉定介・畠山健兩氏校定『御伽草子』(前・後)、萩野由之博士輯『新編御伽草子』(上・下)、平出鏗二郎氏編校訂『室町時代小說集』、及び藤井乙男博士校訂『御伽草紙』(有朋堂文庫の內)の四書に載せないもののみを收めてある。

一、本輯所收の各篇にして 新古書目・解題等に名のみは知られてゐるものもあり、亦全く所見の無いものもあること左表の示す通りである。(詳細は考說に記す)

即ち十五篇の內、四篇(內、一種未見)を除けば、餘はすべて平出氏の『近古小說解題』に其の內容の紹介せられてゐないものである。

(本輯收載書目)	寛文版増補書籍目錄	元祿五年版廣益書籍目錄	正德五年版増益書籍目錄	新修日本小說年表	近古小說解題	國書解題	刊行年代	刊本傳存
1 朝顏の露の宮	二朝がほの露	二朝がほの露	二あさがほ	二(朝顏の露 朝顏露の宮	二ナシ	朝顏の露	寛永	存
2 ふせやの物語	ナシ	ナシ	ナシ	ふせや物語〔古〕	ナシ	二ナシ	—	—
3 かくれざと	二かくれさと	二かくれ里	二かくれ里	二かくれ里の物語	ナシ	ナシ	明暦二 (寛文以前?)	完本未見
4 ほうらい物語(ほうらい?)	二ナシ	二ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	—	—
5 おもかげ物語(辨才天)	二(辨才天の本地二)	二(辨才天の本地二)	二辨財天本地	二べざいてん本地 おもかげ物語	二ナシ	ナシ	萬治三	存
6 さよひめ	ナシ	ナシ	ナシ	一さよひめ	一さよひめ〔未見〕	ナシ	—	—
7 はもち中將	ナシ	はもち中將	ナシ	一ナシ	一ナシ	ナシ	寛文	存
8 まんじゆのまへ	二まんじゆのまへ	二まんじゆのまへ	二ナシ	二(萬壽の姫 まんじゆの前	二ナシ	ナシ	寛文一三	存
9 小式部	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	—	—
10 天狗の内裏	二天狗内裏	二天狗内裏	二天狗内裏	二(天狗の内裏 天狗のだいり	三天ぐの大り	ナシ	萬治二	存
11 判官みやこばなし	ナシ	ナシ	ナシ	五(鬼一法眼 鬼一法眼 判官都話	二鬼一法眼三 判官都ばなし	ナシ	寛文一〇	存
12 日本記	ナシ	ナシ	ナシ	義經都日記		ナシ	寛永以前?	存
13 九けつのかひ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	—	—
14 いづみが城	二いつみが城	二いつみが城	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	寛文以前?	—
15 笛の巻	一ふえの巻	一笛の巻	ナシ	二笛のまき	二笛之巻	ナシ	寛永?	存(眞本未刊)

例 —— 言 ——

(2

一、本輯編纂に際して編著者の採つた方針の大要を左に摘記する。

(い) 本文

一、原文のまゝ一字一句を改めず、假名遣・送假名等の明白な誤脫をも濫に改竄せぬのを原則としたこと。止むを得ずして改めた場合、及び疑はしきもの、或は補正すべきものは、なるべく上欄に註することとした。

二、唯、繙讀の便を計る爲に、

1、必要に應じて本文右側に振漢字を施したこと。但し、疑はしきは( )を附し、又は上欄に註した。

2、濁點と句讀のみは附することにしたこと。隨つて稀に原本の句讀と必ずしも一致せぬ箇處も生じたのは止むを得ない。但し、節付ある舞の本のみは、原本の句讀を留存した。

3、變體假名はすべて普通に改めたこと。ト・ネ・ム等も、こと・ころ・より と改めた。

4、各節改行は任意便宜に隨つたこと。

三、和歌は改行して上下句二行になつてゐる場合が多いが、今すべて一行にしたこと(地の文に書きつづけられてある場合は、隨時便宜に隨つた)

(ろ) 頭註

一、頭註は、考異と、特殊語の釋義、及び參照事項・書名等の揭出を主としたこと。

二、考異は、異本との一々の對校は煩に過ぎて却つて繙讀を妨げるので、底本を補正し、

例 —— 言 ——

又は異同甚だしき部分に止めた。

唯、舞曲『日本記』及び『九けつのかひ』のみは全部對校の結果を示してある。『笛の巻』も、假名遣・送假名の異同を除き、詞句のみに就ては全部對校してある。

(は) 考　說

一、各篇、梗概を掲げて讀者の便に資し、併せて考說の參考に具へたこと。

二、考說各項目は略、一定の形式に依つたが、順序・名稱等必ずしも一律でなく、便宜に隨つた場合もあること。且、項目に分類した爲に、相互の內容に多少の重複を來したところもあるが、なるべく避けるやうに努めた。

作者は不明であるから、特に必要がなければ、項目を設けなかつたこと。

(に) 挿　圖

原本の表紙・挿繪・本文(特に卷首・卷末)等をなるべく多數寫眞版又は凹版で挿んだこと。

以　上

近古小說新纂　目次

朝顏の露の宮……一頁
ふせやの物語……三九
かくれざと……六九
ほうらい物語……九一
おもかげ物語一名辨才天本地……一〇五
さよひめ……一二五
はもち中將……一五九
まんじゆのまへ……一九七
小式部……二三三
天狗の內裏……二五五
判官みやこばなし一名鬼一法眼……二八五

日本記……三四一
九けつのかひ……三五五
いづみが城 一名勝負分……三六七
笛の巻 附牛若笛のまき物語……三八三

考　説

朝顔の露の宮……四〇三
梗　概
〔性質及び素材〕――墨染櫻と本書――謡曲の植物精靈說話――小野頼風の妻の化生傳說（謡曲女郎花）――〔構想・表現〕――繼子物語――悲劇的終局――謡曲露――胡蝶物語――謡曲源氏供養――露の宮と光君――中將姫傳說・謡曲當麻――〔題號〕――朝顔の露――〔年代〕――墨染櫻との先後――謡曲露の宮――菊萱道心傳說――〔文體・用語〕――帝國圖書館本――岩崎文庫本――京大久原本――東北帝大本（本輯底本）――蓬東大本――〔原本並所在〕――賽市島本――〔系統・影響〕――謡曲露の宮――黄表紙露宮朝顔姫
ふせやの物語……四一六
梗　概
〔性質〕――繼子物型戀愛譚――住吉明神靈驗譚――如無僧都型傳說――本書と美人くらべ――〔素材〕――一、住吉明神――航海神と和歌神――老翁姿の現形――神詠と明神の戀――二、伏屋と帚木――伏屋と帚木傳說――謡曲木賊――三、龜の報恩說話――印度の放龜說話――孔愉（字敬康）の白龜――浦島傳說――朝鮮の浦島――毛寶と弘濟――地藏信仰――印度の寓話譚――如無（夢）僧都傳說――山陰中納言物語――宇治拾遺の魚養の傳說――如無僧都傳說の展開と本書及び秋月物語――龜に乘る人――四、同系題書との交渉――〔構想・表現〕――朝顔の露の宮との比較――住吉物語との關係――住吉の尼と伏屋の尼――異本と刊本との先後――近古小說としての本書――〔題號〕――〔年代及び文體・用語〕――風葉集・色葉集の所見――風葉集所載の歌――異本秋月物語の歌――〔原本並所在〕――前田家本――大野木氏のふせやの物語考追記――〔系統・影響〕――古淨瑠璃ふせや
かくれざと……四四五
梗　概
〔性質〕――擬軍記物（異類合戰記）――〔構想・表現〕――鼠神の戰爭――系圖競べ――宇津保物語吹上（上）卷――謡曲隱里――〔素材〕――一、惠比須と大黒――七福神――狂言蛭子大黒天――鼠と大黒天――印度神としての大黒天――夷三郎――二、隱れ里――武藏野の隱里――伽婢子の栗栖野隱里（木幡野隱里）――前燈新話の申陽洞記――述異記の鼠國――〔題號〕――かくれ里の物語――〔年代〕――太平記の影響――梅津長者物語との先後――藥師通夜物語と本書――〔原本並所在〕――東大國文研究室本（本輯底本）――本書の繪卷と鼠の草紙――早大本「惠比須大黒合戰」――〔參考〕――かくれ里一名舌切雀――かくれさと――りんき講とかくれ里物語――かくれ里の記
ほうらい物語……四六一
梗　概
〔性質〕――祝言文學――〔素材〕――一、仙鄉滝留說話――武陵桃源――劉阮天台――壺中の天地――王

貫の朽柯——菊慈童——徐福——臨叩の方士——謝自然——アイヌ浦島——王母と方朔——日本の仙郷說話——三、蓬萊仙境——山海經——史記封禪書——蓬萊——蓬壺——列子湯問篇——蓬萊の名義と其の解釋——日本と蓬萊——日本各地の蓬萊——富士と蓬萊——蓬萊と相似仙界との混錯——蓬萊と極樂——三、**不老不死の仙藥**——不老長生藥——不死の靈藥——四、**安彦灣流譚の本據**——下河邊入道の補陀山行——牛島某の補陀山行——鬼が島と蓬萊(漂流譚の童話味)——巡島說話——山海經と巡島說話——五、**紀伊蓬萊附徐福**——衣奈浦蓬萊——熊野蓬萊と徐福の墓——徐福傳說の進展——〔**構想・表現**〕——浦島と安彦——羽化登仙——〔**題號**〕——舞曲蓬萊山——〔**年代**〕——〔**原本並所在**〕——京大文學部藏本(本輯所收)

おもかげ物語一名辨才天本地……四八二

梗概

〔**性質**〕——本地物——戀愛遍歷說話——〔**素材**〕——一、**辨才天女の戀想**——辨才天——吉祥天との混視——賴家の天女戀想說話——朝鮮說話(天女の再生)——天人の降下歌舞——二、**天界棄行型說話**——天稚彦物語と毘沙門本地——朝鮮說話——張憲の天河探險譚——〔**構想・表現**〕——光堂——美男・美女ぞろへ——何々ぞろへと何々づくし——天稚彦物語及び毘沙門本地と本書——小野小町の戀髓歌物語——戀しくばの歌——葛の葉型怪婚說話と歌物語——〔**題號・年代**〕——〔**原本並所在**〕——帝國圖書館本(本輯所收)

さよひめ……四九六

梗概

〔**性質**〕——本地物——法力と孝德——〔**素材**〕——一、**竹生島の辨才天と姿坂の觀世音**——竹生島神社——日本三辨天——都貞香と辨才天との聯句——經正の祕曲と仙童の琵琶——壺坂寺——二、**女主人公の名**

義——松浦佐用比賣傳說の異傳——謠曲松浦物狂(籠太鼓)——謠曲松浦鏡——松浦鏡の素材——關曲松浦物狂——謠曲松浦姬と佐(小)用(夜)姬——三、**少女の生贄と邪神の歸伏**——謠曲逸賀と本書——謠曲現在七面と七面——英雄怪物退治說話——大蛇退治型說話の變形——生贄の身替——人蛇傳說——九十九傳說——四、**安積沼の大蛇緣說(さよひめ堂の由來)**——歌枕安積沼——蛇骨地藏緣起——さよ姬堂——湖沼退治傳說(地名說明說話)——製迹聞考志所載の**口碑**——人蛇傳說(湖沼傳說)——小夜女生贄譚——佐用姬の來臭說(美人漂泊型說話)——歌物語式說話——五、**猿澤池の龍王**——謠曲春日龍神——六、**孝行の身賣**——沙石集の孝行身賣物語——親の菩提の爲の身賣——本書挿話の人買說話並に人柱說話——七、**如意寶珠の奇特**——摩尼珠——如意珠の來由並に所在——日本の如意寶珠傳說——辨才天と如意寶珠——宇賀と如意——大辨才天如意珠王——八、**本據としての印度說話**——私案百因緣集の印度說話、堅陀羅國の孝子傳說(身賣、身替の生贄、念佛の奇特)——三國傳記の法華功力譚——專童子の孝行譚(再生と盲父の癒明、念佛の奇特)——**〔構想・表現〕**——おもかげ物語と本書——人買と道行——謠曲の狂女物及び親子の再會——本地の說明——こんがの太夫の性格——作者の意識の分裂——近古小說解題の平出氏の推測——法妙童子——法妙童子梗概——法妙童子と本書——法妙童子の物語の本據——百因緣集の寶明童子傳說——同書の善見童子傳說——同書の堅陀羅國の孝子傳說——同書の專童子傳說——作品としてのさよひめ——**〔題號〕**——竹生島の本地——**〔年代〕**——**〔原本並所在〕**——異本さよひめ(延齡涉獵書目所見)——京大文學部本(本輯所收)——舊霞亭文庫本——**〔影響〕**——古淨瑠璃いけにへ——說敎節三莊太夫——倭文庫の法名。

はもち中將……五三一

梗概

〔性　質〕——勧懲小説（敵討物）——子寶——〔素材並構想・表現〕——説話内容の年代——平新皇——説話中の地名（はもちとみくに）——安壽・對王傳説——曾我傳説乃至曾我物語の影響——八幡神と鷲鳩——作中の人物——類種の作品——〔題號〕——はもちの中將——はもち中納言——〔年代・用語〕——〔原本並所在〕——東北帝大本（本輯底本）——京大（國文）本「はもち中納言」——〔影響〕——古淨瑠璃よしうじ——小説のよし氏——〔參考〕——説教節の三荘太夫と小栗判官

まんじゆのまへ……五五〇

梗　概

〔性　質〕——申子立身譚——勧懲小説（御家騒動物）——はもち中將と本書——〔素材並構想・表現〕——申子の立願——動物傳育傳説——託宣の歌と其の本歌——直江次郎——義家と爲義——ともはろと鬼一丸——舞曲和泉が城と本書——類種の作品——〔題號〕——萬壽の前——まんじゆのまへとまんじゆのひめ——〔年代〕——〔文體・用語〕——〔原本並所在〕——東北帝大本（本輯所收）

小式部……五六〇

梗　概

〔性　質〕——歌物語系御伽草紙——近古小説の標本——〔素材〕——紫式部——一、紫式部と和泉式部——紫・泉兩女の關係——紫式部の女——二、石山參籠説——石山參籠のローマンス——河海抄と無名草子——紫女七論の快辯——傳説としての石山參籠——石山參籠と時代習俗——紫式部の清水參籠（伊勢大輔との贈答）——源氏物語の六十巻説——雲隱巻——雲隱の絶説——三、紫女の庭訓——雨夜の品定と式部日記——めのとのさうし・身のかたみ——和泉式部——四、「小鍋」の歌物語——俊綱抄所載の櫛子の歌物語——五、鬼神感動の歌徳説話（大唐の平癒）——小式部内侍の詠歌逸話——僧正行意の奇談（歌徳傳説）——續詞花集所載の歌——六、保昌への婚姻と大江山傳説——保昌と式部（丹後下り）——本書と御伽本及び香取本の酒呑童子——一人武者——平井保昌——保昌と保輔——七、道命阿闍梨との情話——高僧としての道命阿闍梨——和泉式部との關係——歌人としての道命——赤染集の歌——八、赤染の諷諫——和泉と赤染——信太の森——千枝の楠木と裏見葛の葉——尾張のしのだの森とあはでの森——九、巫女の徴愛の祭——沙石集所載の説話——貴布禰明神の神詠説話——一〇、「山里」の詠歌問答——西行と人麿の詠歌説話（三國傳記の所載）——小式部内侍——小式部の情事——二、大江山の秀歌——定頼の敗亡——三、鳥邊の歌と小松の歌——初五だけで批判すまじき戒——和泉式部の連歌——伊勢物語と和泉式部日記——枯木の蘇生と三十一文字の德——〔構想・表現〕——紫式部の理想化——和泉式部の可憐化——顯著な時代色——捨子——御伽草紙和泉式部と本書——育て親のおうぢとうば——天才少女の小式部——〔題號・年代〕——〔文體・用語〕——宮づき——幽玄——〔原本並所在〕——藤井博士藏本（本輯所收）——別本小式部——〔影響〕

天狗の内裏……五九六

梗　概

〔性　質〕——判官物——法談物——〔素材〕——一、地獄極樂巡り——遍歷説話の一種——地獄極樂傳説のいろ〳〵——目蓮救母傳説——富士の人穴草子——天狗と地獄極樂——二、天狗の内裏——天狗の正體とその傳説的進展——天狗と猿田彦——鼻高の内大臣——天狗の棲處——三、鞍馬天狗傳説——謡曲鞍馬天狗と舞曲未來記——張良の兵法傳授傳説——謡曲鞍馬天狗と本書——四、未來記——未來記の名稱及び由來——太平記中の未來記型諸説話——舞曲未來記と謡曲沼捜——崇德院の未來記——天狗の未來記——

五、**義經の前生譚**——謠曲沼捜と本書——太平記の時政前生譚——六、**本據說話、羅馬建國敍事詩『イニード』(イニーアスの地獄極樂囘り)**に似——天狗の內裏と巫女の洞——百合若傳說の本據——移植の徑路と年代——葡國詩人カモエンス——新ギルギリウス——ダンテの神曲の紛本——〔**構想・表現**〕——佛敎化と義經傳說への流入——佛法問答——未來記中に含まれた義經傳說——〔**題號**〕——〔**年代・作者**〕——女人血盆經——〔**文體**〕——〔**原本並所在**〕——異旅浸錄——燕石雜志——帝國圖書館本(本輯底本)——舊霞亭文庫本——藤井博士本(舊平出本)——〔**系統・影響**〕——古淨瑠璃の天狗の內裏

判官みやこばなし 一名鬼一法眼……六二四

梗概

〔**性質**〕——鬼一法眼傳說——辨慶物語と本書——〔**素材**〕——一、**鬼一法眼傳說**——義經記と本書——兵法傳授說話の一異型——三、**牛若丸鳥渡傳說との關係**——御曹司島渡りと本書——兩說話の相似の諸點——アイヌの口碑——鬼一法眼傳說の本據——三、**鬼一法眼**——きいちとおにいち——吉岡建法——鬼次郎・鬼三太——四、**皆鶴姬と滿海**——皆鶴姬とかつらの前——沼入水傳說——滿海ととうがい——辨慶の千人斬と牛若の千人斬——千人斬の迷信——毘沙門本地と本書——張耳の傳說——兵法四十二卷——舞曲笛の卷と本書——〔**構想・表現**〕——十二段草子と本書——鬼一の性格——義經記の鬼一——〔**題號**〕——判官みやこばなし——鬼一法眼(おにいち)——判官ばなし——義經都日記——義經千本杉——〔**年代**〕——〔**文體・用語**〕——〔**原本並所在**〕——帝國圖書館本(本輯底本)——班山文庫本——〔**系統・影響**〕——謠曲湛海——鬼一法眼三略卷——鬼一法眼虎の卷——俊寬僧都島物語——義經虎卷

日本記……六四四

梗概

〔**性質及び由來**〕——讀み物としての舞の本——舞三十六番——番外舞曲——日本記の由緒——〔**素材並構想・表現**〕——開闢神話——謠曲淡路——謠曲逆矛——陰陽五行說及び佛說の混淆——天台の大判——喫茶養生記——國號の由來と大日の梵字——卷の記逸——本書と盤古神話——三國比較論——〔**題號**〕——日本記——日本紀——大日本記——〔**年代**〕——〔**原本並所在**〕——藤井博士本(本輯底本)——班山文庫本(內閣本寫)——岩崎文庫本

九けつのかひ……六五三

梗概

〔**性質**〕——演出との關係——〔**題號及び素材**〕——九穴の貝——島山重保龍宮行傳說——賴朝の最後(賴朝最期物語)——謠曲九穴——島山重保——生飛說話——探險說話——齋院次官親能——〔**原本並所在**〕——藤井博士本(本輯底本)——班山文庫本——賴朝はまいて九けのかい——〔**參考**〕——賴朝濱出

いづみが城 一名勝負分……六五八

梗概

〔**性質**〕——〔**素材**〕——相模川と本書——一、**秀衡の遺命**——吾妻鏡の記載——玉葉の記載——義經記と本書——秀衡の死屍の木乃伊——義經の奧州落——義經追討の嚴命——二、**樞原の呪咀**——鶴岡等の祈禱と若宮別當の夢想——景時宿願の鶴岡大法會——賴朝の泰衡調伏——三、**忠衡の義死**——吾妻鏡の記載——義經記の記載——忠衡の首桶——三郎の名告——二人忠衡——四、**忠衡と其の兄弟**——國衡——泰衡——高衡——ひづめ五郎——賴衡——忠衡と基衡——泉冠者と泉三郎——尊卑分脈——奧州御館系圖——五、**忠衡の妻**——佐藤の尼公——信夫庄司——六、**泉(和泉)が城**——泉が城の所在——琵琶櫓と泉が城——

泉屋の忠衛館――酒泉――奥の細道の記載――〔構想・表現〕――本曲の構成――高館と和泉が城――謡曲
錦戸――忠衛妻と靜御前――忠衛の最期――まんじゆの前と本書――舞曲景清と本書――舞曲信田と本
書――忠衛妻と浮島が妻――〔題號〕――勝負分――〔年代〕――〔文體・用語〕――〔原本並所在〕――班
山文庫本――〔系統・影響〕――錦戸――相模川――古淨瑠璃いづみが城――凱陣八島――日本名女物語
――奥の細道――擬判官物の和泉三郎

笛の巻 …… 六七九

梗概

〔性質〕――笛の由緒と大師の驗德――由來と系圖――劍卷――笛の威德――異本と御伽草紙としての
本書――小說としての舞の本――濱出草紙――築島――繼信忠信記――八島にこう物語――やしま合戰
――奈良繪本の舞の草紙――〔素材並構想・表現〕――劍讚歎と本書――笛の妙手としての牛若――敦盛
と牛若――牛若の愛笛――蟬折――村雨丸――たいとう丸――蟬折と高倉宮――大水龍・小水龍――古
事談の記載――天人のひとへかくし――朱雀門の鬼笛――葉二――青葉の笛――青葉の笛の物語――青
葉の笛と小枝――より竹――狹衣中將と五節舞起源傳說――大師傳――寄竹の傳說――三鈷の奇瑞――
文珠との筆競べ――五筆和尙――獅子と孔雀――優塡王と獅子――謠曲獅子――謠曲石橋と本書――寂
昭の傳說――智證傳と本書――歸朝の難船と智證大師傳說――日本精神の顯現――英雄譚の義經と高僧
譚の弘法――彌陀次郎と彌陀六――〔題號〕――牛若自筆の笛の卷――牛若笛のまき物語――〔年代〕――
南錄――〔原本並所在〕――宗藏古寫本(本輯底本)――新群書類從本(寬永版本)――班山文庫本――班山
文庫本(內閣本寫)(本輯所收)――牛若麿(東北帝大本)――〔參考〕――觀世流笛の卷

目次終

(10 目――次)

挿圖目錄

本文凸版

日本記(本文全文)(藤井博士藏、古寫舞の本)……凸版……三五四―三五四
九けつのかひ(同　)(同　)……同……三五九―三六五

別圖

ほうらい物語(奈良繪入)上・下卷挿繪(京都帝國大學文學部藏)……寫眞版……九四・九五間
さよひめ(同　)下卷挿繪(同　)……同……一五二・一五三間
天狗の內裏(同　)上卷挿繪(舊霞亭文庫藏)……同……二五二・二五三間
同(同　)中卷挿繪(同　)……同……二六八・二六九間

本文挿圖

朝顏の露の宮

正德五年板(岩崎文庫藏)上卷本文……凸版……一頁
寬文四年板(東北帝大圖書館藏)上卷挿繪……凸版……一六

岩崎文庫本上卷挿繪……凸版……一八・一九
東北帝大本下卷本文……凸版……二二
同　下卷挿繪……凸版……二三

挿圖目錄――

(11)

岩崎文庫本下卷插繪……凸　版…三三
東北帝大本下卷本文……凸　版…三八

かくれざと

東京帝大國文學研究室藏寫本（奈良繪入）上卷表紙寫眞版…六九
同　上卷插繪……寫眞版…七〇
同　上卷插繪……寫眞版…七一
同　上卷插繪……寫眞版…七二
同　上卷本文……凸　版…七四
同　上卷插繪……寫眞版…七六
同　上卷插繪……寫眞版…七八
同　下卷插繪……寫眞版…八二
同　下卷插繪……寫眞版…八六
同　下卷插繪……寫眞版…八八

ほうらい物語

京都帝大文學部藏寫本（奈良繪入）上卷本文……凸　版…九一
同　下卷表紙……寫眞版…九八
同　下卷本文……凸　版…一〇〇

おもかげ物語　一名　辨才天本地

萬治三年板（帝國圖書館藏）上卷插繪……寫眞版…一〇六
同　帝國圖書館本下卷本文……寫眞版…一一三

さよひめ

京都帝大文學部藏寫本（奈良繪入）上卷本文……寫眞版…一二五
同　上卷插繪……寫眞版…一二七
同　上卷插繪……寫眞版…一三一
同　中卷插繪……寫眞版…一三一
同　下卷本文……寫眞版…一四八

はもち中將

うろこがたや版（東北帝大圖書館藏）上卷表紙……寫眞版…一五九
同　上卷本文……凸　版…一六〇
同　上卷插繪……凸　版…一六二
同　下卷插繪……凸　版…一六五
同　下卷插繪……凸　版…一七〇
京都帝大國文學研究室藏寫本下卷本文……凸　版…一八四

まんじゆのまへ

寬文十三年板（東北帝大圖書館藏）上卷插繪……凸　版…二〇三
同　中卷表紙……寫眞版…二〇七
同　中卷插繪……凸　版…二一六
同　下卷插繪……凸　版…二三三
同　下卷本文……凸　版…二三〇

小　式　部

文學博士藤井乙男氏藏寫本本文……凸　版…二三四

天狗の內裏

萬治二年板（帝國圖書館藏）上卷本文……凸　版…二三七
舊霞亭文庫藏寫本（奈良繪入）上卷本文……凸　版…二四〇
同　上卷插繪……寫眞版…二四二
帝國圖書館本上卷插繪……凸　版…二四五
舊霞亭文庫本上卷插繪……寫眞版…二四八
同　中卷插繪……寫眞版…二五二
同　下卷表紙……寫眞版…二五八
同　下卷插繪……寫眞版…二六〇
帝國圖書館本下卷插繪……凸　版…二六四
舊霞亭文庫本下卷插繪……寫眞版…二六六
帝國圖書館本下卷本文……凸　版…二六八

判官みやこばなし　一名　鬼一法眼

文學博士高野辰之氏藏寫本卷一本文……凸　版…二七六
寬文十年板（帝國圖書館藏）卷一插繪……凸　版…二七九
同　卷二本文……凸　版…二八二
同　卷三插繪……凸　版…二八六
高野本卷二本文……凸　版…二八八
帝國圖書館本卷四插繪……凸　版…二九二
同　卷五插繪……凸　版…二九五
同　卷五本文……凸　版…二九九

日本記

文學博士藤井乙男氏藏寫本表紙……寫眞版…三〇一
岩崎文庫藏活字本本文……凸　版…三〇三
同　表紙……寫眞版…三〇五

九けつのかひ

文學博士藤井乙男氏藏寫本表紙……寫眞版…三〇五

いづみが城　一名　勝負分

文學博士高野辰之氏藏寫本本文……凸　版…三一七

笛の卷・牛若笛のまき物語

編者藏寫本（奈良繪入）本文……凸　版…三二三
文學博士高野辰之氏藏寫本表紙……寫眞版…三二五
編者藏本插繪……寫眞版…三二七
同　插繪……寫眞版…三二一
高野本本文……凸　版…三二五
編者藏本插繪……寫眞版…三二九

——以上——

朝顔の露の宮

正徳五年板（岩崎文庫蔵）　上巻

帝（みかど）おはします。后（きさき）萩（はぎ）の大臣（おとど）の御むすめ、菊（きく）の御前と申侍る。此御腹（おはら）に皇子（わうじ）三人おはしける。第一のみやをば、糸ざくら宮（みや）のしんわうと申き。第二をば、もみぢの親王（しんわう）と申侍る。第三のみやは、色ごと深（ふか）くしひかくわんげんにちやうじ給ふ。容貌（かたち）心ざまに至るまで、花のみや詩歌管絃（しひかくわんげん）長（ちやう）殊（しゅ）都（みやこ）雙（ならび）なし。このきみを見まゐらする人は、上下によらずつゆの御情にもと

願ねがひ侍べるにより、をのづから御なを露のみやと申侍る。御父みかど帝も此みやを寵愛てうあひあるなり。されば此君十六の御とし年、おぎの左大臣の御むすめ、すゝきの御前と申を妃たち給ひきさきにたてたもふ。されども露つゆのみや宮や御心こゝろにいらず、いかならんかたちよき人にもたはぶれたく思召。をりふし梅がえの中なごんの御むすめに、朝がほのうへと申侍る。されば御子の朝がほのうへ七歳さいの御とし年、御母れいならずなやみ給ふ。むめがえの御いたはり、申もをろかにおはします。さま〴〵の御きたう有けれども、せむせの御事なれば、しだひによはり給ふ。すでに御まつごとみえし時、ひめぎみ御そばちかくいだきよせ、それ人間のならひにて、しやう死をのがるゝ事なければ、みづからやうにになり行こと、すこしもいとふ事なし。さりながら御身いまだ幼少なり。せめて十二三にもなり給ひ、いかなる方へもありつけ、めやすきさまにも有ならば、何をかおもひをくことのあるべき。これのみ心にかゝり侍るなり。梅がえどのはいかなる人をもむかへ給はゞ御心はなぐさむべきが、たゞいたはしきはひめ君なりと、をくれのかみをかきなで、はゝのいひをく事を、憶にわすれ給ふな。されば人界をあんずるに、ゆめまぼろしのうきよに、適々ぶつしやうとうたいに生れいで、今此しやうに身をうかめずば、又いつのよを待て、しやうじゆ來迎を待べし。たゞ心をすなをにして後生のみちをのみ思ひ、母

(一) 其比〔イ〕
(二) ひめ君を〔イ〕
(三) 二字缺、帝國圖書館本により補ふ
(四) み十二三〔イ〕
(五) おこと〔イ〕

がむなしき跡をもとぶらひ給へとて、終にはかなくなり給ふ。むめがえ殿・ひめ君の御なげきなか〳〵たとへんかたもなし。

かくて年月を送り給ふ程に、御むかはり過ぬれば、立花の御むすめうき草のまひと申を、むめがえの御心やすめにとてむかへ給ふ。さる程に、朝がほのうへ御年たち行にしたがひ、御かたちなべてならず渡らせ給ふ。昔いんきやうてんわうのきさきそとをりひめ、又はその殿のきさきも、此ひめ君ほどはあらじときこへ侍る。されば御はゝのゆいごんわすれさせ給はず、後生ぼだいのみちを御心にかけ、明くれ御經をあそばし、またはゝうへの御ために、六萬べんの念佛、すこしもおこたる事ましまさず。しかるに御まゝ母うきくさのまひにひめ君一人いでき給ひ、それよりこの朝がほのうへを、にくませ給ふことかぎりなし。いかにもしてちゝへあしくも申なし、いづくののゝすゑ山のおくへもすて給はんと、たくませ給ふ事こそおそろしく聞え侍る。

其程につゆのみやは、あさがほの御事きこし召及ばれ、みぬ戀にあこがれ給ふ。され共御父みかどより、すゝきの御せんをむかへをき給へば、重ての給ふべきやうもなく、たゞいたづらに御心をなやまし給ひ、いかにもして、この人のすがたをも一めみばやとおぼしめし、大りをしのびいで給ひ、あさがほのもとに御いでであり、あけくれ立そひ給ひしが、あるときあさがほの

(一) つるに〔イ〕
(二) 一周忌
(三) 藤原良房の女、明子、文德天皇の皇后、清和天皇の御母
(四) 日に六萬べん〔イ〕
(五) けれ〔イ〕

(一)經か

(二)おもはれすや〔イ〕

上うへ、十二ひとへの御きぬ衣紅にくれなゐのはかまめし、〔マヽ〕しゆへんに御きやう取添出いで給ひ、かくなん

あさがほのゆふべもしらぬうきのみは いつか此世をさりてゆかなん

とうちわびしげにながめ給ふ御すがた、つゆのみや御らんじ、こはいかに此世の人ともおぼへ(二)す、天人のあまくだり、わが心をもみんためかと、いよ〳〵たへかね給ひ、いかにはせんとおぼせしが、いづくにかもたせ給けん、御すゞりをとりいだし、さもうつくしきたんじやくに

きみにいふたよりなければいはつゝじ いはでこがれて色にいでけり

とかやうにあそばし、ひきむすび御そばちかくなげいれ給ふ。ひめ君御らんじ、さていかなる人なれば、このほとりまできたり、我すがたをも見侍ることのはづかしさよと、みすうちあげうちへ入給ふ御有さま、ゆふべをいそぐ秋の月、雲がくれもかくなんと、思ひしられ侍る。かくてみやはやるかたなくて、いかにはせんとも〔マヽ〕だへこがれ給へ共、更にたよりのあらざれば、夜半ばかり過たゝずみ給ひ、かくなん

戀そめてまだみぬ時はうす衣 きてみて色にいづるむらさき

とうちずさみ給へば、あさがほの御めのとにあをやぎのまひとて、心ざまやさしく、誠になさけにあまりたる人ありけるが、今の御ことぶきをきゝまひらせ、ふしぎやこのほとりにて、かくあらん人は覺えずと思ひ、いかなる人にておはしけれれば、このあたりへはきたり給ふぞと、とがめ參らすれば、みや御ことばなくして、かくなん

こひゆへにまよひきにけり秋のしか 歸るさわすれしばしたゝずむ

とありければ、あをやぎとりあへず

こひゆへにまよふはしかのならひなり 我みるとてもおどろきなしそ

とさもなさけありげに御返か申せば、みやはうちゑませ、すこし御ちからをえ給ふ。さていかなる人にておはしますぞととひまいらせければ、御なのり有べき色おもはづかしく思召せども、あまりに情ふかく申せば、いかゞはつゝみても せんなしとおぼし召、今はなにをかつゝみ侍らん。つゆのみやとは身づからが事なり。あだなるこひぢにまよひ、是迄きたりて有なりとの給へば、あをやぎのまひきゝ參らせ、さてはつゆのみやにて渡らせ給ふかや。またあだなるこひぢとは、あさがほの御事なり。されば こひぢのみちほどわりなき事はなし。かゝる雲のうへ人さへ、かやうにたゞ一人あこがれいで給ふぞや。たとへむめがえきこし召、いかなるつみにを(一)行こなはるゝ共、いかでなさけなくかへし參らすべきと思ひ、いかにや君聞しめせ。あさがほのうへと申は、いまだおさ(二)な き御ときより、明暮ごしやうの御事のみにて渡らせ給ひ、ちゝの御ゆるしも有ならば、御出家あらんとの給へば、ゆめ〳〵思ひよらざれ共、みづからが情には、

(一)あひ侍るとも〔イ〕

(二)一字缺、帝圖本により て補ふ

御こゝろの通ふ所まで、ぐして參り候べし。いか様にもおゝせ有て御覧せよとて、露の宮の御手を取、しやうじひとへのかたへをし入參らせ、あをやぎは我局へ歸侍る。

みやの御よろこびはかぎりなし。されどもなにと御ことばかけ給はんやうもなくておはします所に、ひめ君是をばすこしもしらせ給はず、夜すがら思召すは、さてもあさましき我身かな。いまだいとけなき時よりもはゝうへにはをくれ、けいぼにはにくまれ參らせ、なにとなるべきうき身やらんと、ものわびしげなる御こゝろにて、かくなん

さきのよにいかなるたねをまきをきて 今の浮身と生れきぬらん

とうちながめ給へば、つゆのみや此御こゝろをたよりにかくなん

君こふる心のやみにかきくれて まよひくる身をあはれとはみよ

*〔マヽ〕と侍りは、ひめ君きこし召うちおどろき給ひ、よひに花ぞのへ出しとき、たまづさひきむすびなげいれしを見るよりも、人にも見えぬるかと、いとゞ心うく思ひしに、かさねてこれ迄きたり、かやうにわが心をひきみむとすることは、いかなる人にて有やらんと、むねうちさはぎや る方なくて、御返かにも取あへ給はず、きぬ引かづき伏給ふ。宮は絶かねさせ給ひ、

ふる竹のなるとならすとひとよとめ ぬらさばぬれようたぐちの露

と有けれ共、御返かもなければ、かさねてかくなん

*とあそばしければひめぎみおどろき給ひ〔イ〕

かりそめに袖ふりあはせ過るにも かよひかよはすこゝろありとは

と侍べれども、たもとをもるゝをとし文、わきて返事もあらざれは、

あらつれな ありそうみ あはびがひ をくやまの こゝろうく もへいでゝ きみのしる よをあかし こがれいで ますかゞみ みちのくの みだれつゝ なびくもの

かずならぬ しづみはて きみのため しのぶぐさ ほたるびの ちにこがれ さよちどり あまをぶね かひなくて はづかしや たれゆへぞ いとやなぎ つよゆみの

かたゝながら つらぬく玉の ふかきこひぢに 思ひみだるゝ 胸のけぶりは そらにうき立 たよりなぎさの 心もすまの たまゝみるめ

*〔う〕つろふかげも 信夫摺 忍ぶもぢずり 時分 ときはけがたき 心 あまりこゝろは

身にもなさけは そこのいはまの あさくおもはぬ あしはけぶねの よるはおもひの なげくといへど ねをのみなきて きみにあはじと いとゞおもひは よしそれとても 君ゆへこそは かせのたよりに いてもみよかし

*一字缺、帝圖本によりて補ふ

(一) 一字缺、帝國本によりて補ふ

(二) 脱文か、未完の長歌か 原本は直に「さもしほ〳〵と」に續く

(三) はづかしく(イ)

昌陽池　水底清
こやのいけ　みなそこきよく
濁水　澄(住)世
にごりみづ　すまねどよをば
紅葉　散　戀故　散
もみぢばも　こひゆへちりて
細
しばしとめ　心はほそき
白波　夕
しらなみと　ゆふべの雨に
聞　姫
さもしほ〳〵ときこゆれば、ひめ君きこし召、あらふしぎや、この人は、いかさまよし有人と
覚えたり。みづからわが身のうきまゝ、歌うたの返かをせぬならば、さだめてこの人かへりなば、
朝顔　姫　和歌道　知　風聞　父母　名
あさがほのひめこそ、わかのみちをばしらざると、ふうぶんせむもはづかし。又ちゝはゝの御な
朽　似　歌　辱
をもくたすににたり。この返かしたりとも、なびかでかなはぬことにてもなしとおぼしめし、
かくなん
墨
あさがほのひかげをまたぬあだし身にくもりなかけそ空のしらくも
日陰　待　塔　白雲
と侍べれば、みやきこし召、この御こゝろのたよりにいよ〳〵たへかね給ふ。そらの白雲とよみ
宮　聲　倦　名
しは、みづからをおぼつかなくおぼすなれば、なのらばやとおぼしめせども、さすがとはねば
我有　顔　名告　流石問
われありがほになのりもやらず、
方　限
久かたのくまなき秋の月にさへ　くもりはかくるそらのしらくも
墨　空　白雲

詠
とうちながめ給へども、かさねて御返事あらざれば、さてはみづからをあやしくおぼすらん。
此上　裏　何
このうへは、つゝみてもなにかせんとおぼし召、かくなん
消　露　宮
なか〳〵にきへてものうきつゆのみやしろ
宿
しばしやどせる花もあらねば
侍　猶　昔　恥　路　鹿　鹿　笛　猛　神　歎　失　鬼　慢　召　猛　来　遣　言　墨　著　髪　下　髪　剃　墨　染　出　家　出　弔　宣　母　上　遣　言　母　上　入　日　衣　経　道　菩提　上　讀　母　上　遣
とはんべれば、ひめ君きこしめし、いかなる人ぞと思ひしに、さてはつゆのみにてましますぞ
やと、なをしも御心はづかしくてうちふし給へば、みやはいとゞあこがれ給ひ、あら御心づよ
や。むかしよりこひぢのみちは淺からぬ事ぞかし。心なき夏のむしもつまゆへに身をこがし、
ふゑによる秋のしかもこひゆえ其身をうしなふなり。みづからも君ゆへに、いのちをすてゝく
るものを、いかなるたけきおにがみも、なげゝばあはれむならひぞかしと、うちうらみの給へ
ば、ひめ君きこしめし、かさねて御返事あらんとはおぼさねども、忝もわうじにておはします
なり。みづからゆへに是迄きたり給ふに、御返事さへ申さぬことおゝそれおほき御事ぞかし。
いか様にもすかし參らせかへさんと思召、いかにやきこしめせ。みづからは七さいにてはゝに
後をくれ參らせしが、其時はゝうへのゆいごんに、しゆつけになりて跡をもとへとの給へば、ち
ゝのゆるし有ならば、かみをもおろしすみ衣きて、いかなる山にも取こもらんと思へ共、父
のゆるさねばちからなし。されどもかみをもそらず、衣をすみにそめぬれども、たゞ心はをのづか
ら後生ぼだひのみちにいり、にちや朝暮きやうをよみ、又ははゝうへの御ために、六萬べんの

念佛申、そのうへ五かいをたもち參らすれば、ゆめ〳〵ゆるしをはしませ。さなくばなどか、かやうにわびしめ參らせんと有ければ、つゆのみやの給ふやう、をほせさる事なれども、ぼだいのみちにいり給ひ、ほとけの御心にかなはせ給ふべき御身ならば、など情のみちをばしらせ給はぬぞ。たとへばびんなき事なれ共、(一)天りんせう王の御子せんしやう太子は、せんけんわうの御むすめ、あしゆくぶにんをこひ給ひ、ほどなくちぎりをこめ給ひしを、ぶにんの御ちゝせんけん王へもれきこへ、せんしやう太子・あしゆくぶにんもろ共に、(二)たつせのほらにすて給ふ。太子はつまぎ取給へば、ぶにんはねせりをつみ、なんぎやうくぎやうし給ひ、あけぬくれぬと月日ををくり給ふほどに、太子二人いでき給ふ。かくてぶにんはとし月の御つかれに、むじやうの風にさそはれ、ほどなくむなしくなり給ふ。せんしやう太子はこの御わかれをなげき、それより誠のみちにいり給ひて、たちまち(三)あみだ如來となり給ふ。二人の太子は、くわんをん・せいしとあらは(四)れ、衆生をりやくし給ふなり。かゝるほとけの御うへにも、こひぢのみちは有ものをとの給へば、ひめ君きこし召、をろかなる仰やな。せんしやうたいしの御戀は、それはぼんぶの御ときなり。さやうの御戀し給ふこと、よにあさましく思召、御心をひきかへ、ひとすじにぼだひのみちに入給ひてこそ、あみだ如來とはなり給へ、ほとけとへんげ給ひて後、こひをし給ふことやある。されば五かひの其中に、第三のかいもんに、じやいんをしめし給はずやと

(一)今昔物語五、東城國皇子善生人通二阿就頭女一語第二參照
(二)未詳
(三)昔ノ善生人ハ今ノ善見菩薩也。昔ノ阿就頭女ハ今ノ大吉祥菩薩也。昔ノ兄ノ尤ハ今ノ多聞天王此レ也。弟ノ明尤ハ今ノ持國天此レ也
（今昔物語五）
(四)一字缺、帝圖本によりて補ふ

の給へば、みやきこし召、ぐちなる人のことのはや、ほとけとしゆじやう、いかなるへだてましますぞ。諸佛の御かたちとても、人に替れる所もなし。又ぼむぶはゝのはらより生るれば、ほとけも御はゝのたひなひにやどり給ふ。人げんしすれば、しよぶつもしやうをかへ給ふ。されどもしんいのさとりをゑ給ふにより、御なをかへてほとけといふ。御身もわれもしゆじやうなれ共、さとりをうけばほとけなり。さればしやか如來と申も、じやうぼんわうの御子なり。御はゝはまやぶにんにておはします。しかるにしちた太子と申せし時、十九にて御出家あり。だんどくせんにとりこもらせ給ひ、あらせんにんをしとたのみ、なつみ、水くみ、つま木とり、六年しんくをし給ひ、廿五の御年僧にならせ給ひ、かさねて六年ぢやうざにてまどろむひまもましまさず。十二年なんぎやうし給ひ、誠のみちをさとりゑて佛とならせ給ひ、それよりしやかと申侍る。三十の御年より四十九年が間、一さいのみのりをとき給ふといへ共、男女のかたらひ有ては、佛にならずと云ことは、未說置給はぬなり。かゝるたつときしやか佛も、(一)やしゆたら女・いぎ・くだみとて三人迄きさきをもち給ひ、たいし二人をはします。御ちやくしをば、(二)らごら太子と申なり。次の御子は(三)ぜんしやうびく。かくのごとく男女の御契りましませし時もあり。これにんげんにかはり給へることはなし。げにそれまでもなし。わがてうの人のはじめには、(四)いざなぎ・いざなみのみことより、てんしやうだいしんのはじめ奉り、そのほかの御かみ

(一)太子有三妃一（中略）羅夷此云明女即是太子第一妃也。第二妃生二羅雲一、名耶檀亦名耶輪、（中略）第三妃名鹿野（五夢經）
太子ニ三人ノ妻有リ。一ヲバ羅夷ト云フ。二ヲバ耶輪ト云フ。三ヲバ鹿野ト云フ
（今昔物語一、悉達太子出レ城入レ山語第四）
天女・瞿姨女・鹿苑女
（三國傳記一、釋迦如來出世之事）
(二)母　耶輪陀羅女
(三)母　鹿野女
(四)古事記上、日本書紀神代卷上參照

(一) 一字缺、帝圖本により補ふ
(二) とな、りんゑにまようなり。ためしおほき中にも、江口といへる遊女さへ、諸人にはだなをふれ候へ共、心をさとりたちまちふげんぼさつとあらはれ給ふ（イ）
(三) 謡曲江口に見ゆ。原傳説は書寫の性空上人に關する事として傳へらる
古事談三、僧行・十訓抄上（第三不侮二人倫一事）・撰集抄五ノ七（性空上人之事）附室之遊女事）・東齋隨筆佛法類・謡曲室住參照
(四) 新古今一三、戀三、題不知「待宵の小侍從」の異名をとりたりといふ名歌平家物語（五、月見）には待つ宵の更け行く鐘の聲聞けばかへる旦の鳥はものかはとあり。これに唱和したる「物かはの藏人」の歌と並稱せらる
(五) 君もいかなるうきめにかあはせ給はん。いそぎ…（イ）
(六) なりぬとも（源氏物語柏木卷）
(七) 亂るゝ（同前）源氏にては、この女三の御歌に對しての返歌に、病中の柏木が前の歌を認むることとす
(八) 謡曲通小町參照

より陰陽の道つたはり、今すへのよの我ら(二)にいたるまで、男女のかたらひによりてこそ、しやうをばうけてきたるなり。但御身はちゝはゝの契りなくしてむまれは出させ給ふか。ふしぎの人の御ことばやな。さればぜんあくふたつといふも、さとりをもつてあくをせんとなし、ぐちをもつてせんをあくにひるがへす事あり。其しさいためしおゝきなかにも、(三)江口しは、ながれをたてさせ給ひ、諸人にはだをふれ給へ共、心にさとりましませば、たちまちふげんぼさつとあらはれ給ふなり。柳はみどり花はくれなひ、たゞ其まゝに、色をかへずともほとけにはなり給へ。あらりんゑにまよへる御心やとの給へば、ひめ君さしあたるりにつめられ給ひ、いかなるおりふしにも、のゝすゑ山のをくへもしらざれば、いそぎ御歸りましませとをどし給ふ。みやきこし召　いにしへかしはぎの

衛門のかみ、女三のみやをしのびし時、うた行衞なきそらのけぶりと立ぬ共、おもふあたりをたちははなれじ、とよみしなり。みづからもそのごとく空のけぶりとなりぬとも、いかで立かへり侍らん。されば女三のみやはげんじの大しやうのつまなれ共、人のなさけはあはれむならひにて、立そひてきえやしなましうき事を、思ひこがるゝけぶりくらべに、と返歌あり、あさからぬ契りをこめ給ふ。かやうにつまをかさねても、なさけの道はあるものを、さのみ人にはつらからぬ事ぞかしとの給へば、朝がほはきこしめし、この君はことはりをもきゝ入給はず、又またをどすにもおどろき給はねば、まづいつはりかへし參らせんと思召、かくなん

いまきてのそのかひあらじのり衣　このよをさりて後のよにきよ

とはんべれば、つゆの宮きこし召、おもしろの言のはや、このよをさりて後のよにきよとありしは、こよひはかへり、ゆふさりきたれとのことなり。されば(三)四位少將のせうしやうは小野小町をしのびしとき、もゝよかよへといひしを、九十九よ通けるに、みづからはゆふさりとの給ふは、かへすゝもうれしきおほせかなと、こまやかに御ちぎりあり、たちかへり給ふ。

ひめ君はつゆのみやをやう〳〵にすかしかへし給ひ、あだなる人の仰や。たとへこの身はうすらがみに立給ひ、御身はけいぼのにくみ給ひ、いかなるおりふしにも、のゝすゑ山のをくへも

すてんとたくませ給ふなり。とてもうきよになり給ふとも、あととぶらひて參らする人も有まじ。それによにんとむまれては、ごしやう・さんじゆにゑらばれ、つみのなき事はなし。しやばのとぶらひなくしてはたすかりがたし。御身いかなる人にも見え給はゞ、そのえむにひかれ、後のよをとひて參らする人あるべし。みづからは御身とし月の御きやうのくりきにひかれて、ごくらくじやうどにあるなり。御心やすく思ひ給へと、まぼろしの其まゝに、かきけすやうにうせ給ふ。

ひめ君御めざめ御らんすれば、ありしはゝうへはましまさず。こはいかにとなげき給ふことかぎりなし。いよ〳〵はゝうへの御むさうきゝ給ひ、御心ぼそく思召けるが、され共はゝうへの極樂世界ごくらくせかいにましますとの給へば、なによりもつてうれしくおもふなり。みづからもいかなる人にもみへよ。後生のえんになるべきとの給ふは、こよひのみやの御事にてやあるらん。そのうへたゞ人ならぬ御身なり。いかゞはせんとおぼしめし、此ほどのつよき心もひきかへて、なにとなくなつかしきさまにてをはしけるが、日もやう〳〵くれければ、あさがほのもとに御いでであり。こゝかしこに人めをしのび給ひし御すがた、かのなりひらのいにしへ二條のきさきを忍び、あるときは、まばらなるいたじきのしたにかくれふし、月やあらん春やむかしとながめしも、今こそ思ひしられ侍る。さればよものけしきもしづかに、人をともしづまりければ、あ

(*上略)うち泣きてあばらなる板敷に月の傾くまでふせりて、去年を思ひ出でてよめる
月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして
(伊勢物語四段)

(二)宮〔イ〕つゆのみや〔帝國本〕

(三)秋の夜のちよを一夜になすらへて八千夜し寢ばや飽く時のあらむ
秋の夜の千夜をひと夜になせりともことば殘りて鳥や鳴きなむ
(伊勢物語二二段)

(二)みやもそゞろに御うれしく
きのふより…〔イ〕

ちよな一よと御ちぎり淺からずひよくれんりとかたらひ給ひ夜もやう〳〵に明行ば〔イ〕

さがほの側近御そばちかく忍びいり、妻戸つまどをほと〳〵とたゝき給へば、朝顏あさがほのうへかねて御心えましませども、(二)露たれやらんととひ給ふ。つゆの取あへ給はず、

ひめ君御返歌、

とありければ、みやかさねてかくなん、

と侍れば、ひめ君、あらうつゝなの君の御心のうち、雪間ゆきまをしのぐうぐひすの、はるをまち得て花にたはぶれ、そゞろにこゑをいだすふせいし、さもめづらかにをぼし召、ひごろ御心つくし給ふこと、まめやかに御ものがたりあり、(三)千夜ちよをひとよとちぎり給ふ事かぎりなし。それよりたがひにわりなくおぼし召、いくひさしくとかたらひ給ひ、夜もやう〳〵明ければ、みやは立出んとし給ふ。ひめ君なにとなく御殘ごりをしげに、宮の御袖を引とめ、かくなん、

あさがほのあすをたのまぬ玉のをのたへぬさきにもとはゞとへきみ

と侍れば、つゆのみや立かへり給ひ、あらいまはしの言のはやとの給ひ、

いつまでも契りのすゑはおひまつの　かしらの雪をもろ共にみん

と御いわひあり。ゆふさりはかならずや参りなんとて、きぬ〴〵になり給ふ。今世

わかれと、のちにぞきこへ侍る。

さるほどに、かうじ門を出す、あくじせんりをはしるならひにて、そのよにうきくさのまひへ

もれきこへ、まゝしきなかのかなしさは、がくのまへにしよきたるがごとく、やがてむめがえ

殿への給ふやう、あさがほのうへこそ行衛もなき人に契りをこめ、一夜のへだてもなくましま

すなり。いかゞはあるべきとの給へば、むめがへきこし召、大きに腹をたて給ひ、そのぎまことにてあるならば、いづかたへもおひうしなはせ給へと、心中にさのみおぼさねども、うきくさのまひの心をひきの給へば、うきくさやるかたなくうれしくおぼせどもさもなきふせいにもてなし、御いたはしく候へ共、しばし御こら

寛文四年板（東北帝大圖書館藏）上巻

しめのためなれば、いかなるかたへもうつし申さんとて、ものゝふどもをめしよせ、ちゝごの御ことばのかはらぬさきに、いそぎあさがほのうへをぐして、とをからん山へすて申せとの給へば、ものゝふ共おほせにしたがひ、御ひめ君のたいへこしをかきよせ、御むかひに参りたるよし申ければ、あらいたはしやひめ君、これをば夢にもしらせ給はず、むかいとはいかなる事やらんとの給へば、ものゝふ共みだれ入、ちゝのおほせにて、いかなる山へもすて申せとの御事なり。いそぎ出給へと申ける。ひめ君きこし召、こはいかなる事やらん。こよひ君にちぎりをこめしことのもれきこへ侍るかや。あさましの御事や。さりながら、わが身のいたづらになる事は、かねてごしたることなれば、いまさらおどろくべきにあらね共、みづからかやうになりゆくならば、さこそは君のなげかせ給ふべきと、かきくどきこがれ給ふ。物のふはをそしとせめければ、ものゝふも物のあはれはしるぞかし。いとまをくれよとて、御きぬのそでをときつたへよとて、なみだとゝもにいだし給ふ。あをやぎは御返事にも及ばず。我をばすてゝゆき給ふべきかと、りうていこがるゝありさま、なにゝたとへんかたもなし。▲かくてものゝふ共は、あさがほのうへを、さもあらけなくこしのうちへをしいれ申、みやこあたりは人ちかきとて、よしの山にわけいり、谷ふかき所にて御こしよりもをろし、いまの御しやうぞくにては、

(一) 御ことぶきありてはやきぬ〳〵に【イ】
(二) これ【イ】
(三) 思ひしられたり【イ】
(四) されどにや月にむらくも花にはあらし、御まゐはいうき草のまひき、給ひ、梅がえ殿へざんげんある。梅がえ大きにはらをたて、いづかたへもをひうしなわせ給へと、御こゝろの中にはいたはしくなぼせ共、さらぬていに仰ける【イ】
(五) 好事不レ出レ門、悪事傳二千里一（北夢瑣言）
(六) 僻訴。こゝは待設けたる機會の到來せるに譬ふ

(一)二字缺、帝國本によりて補ふ

(二)一字缺、帝國本によりて補ふ

文學會編輯部

康本上卷

の御かたみとて、御衣きぬの袖を參らせける。みやとりて御らんずれば、

わかるとも心は君に有明の
月へだつ共われもわするな

この世にてちぎりむなしくさりぬ共
世々の末には生れあはまし

わかれじのなごりにぬらす我袖を
かたみにもみよなみだかはくと

かやうによみおかせ侍る。みやは御覽じ、いよ〳〵歎なげきまさり、既すでに御じがいあらんとし給ふ。あをやぎ取つき參らせ、こはいかに、きみさやうに御じがひあらば、あさがほの御あとをばたれかとぶらひて參らすべき。そのうへうき世にましますをもしらせ給はず。なにとてか御心みぢかくわたらせ給ふぞや。かなはぬ迄も御たづねありて御覽せよと申せば、みやはきこし召、まことにゆゝしく申人かな。命あらんかぎりはしゆ行にいでゝ尋ね、そのうへあはぬ物ならば、いかなるふち河へも身をなげんとおぼし召、今一たび立かへり、ちゝはゝの御すがたをもみまくほしくはおもへ共、もし

や其色もみへ、ひきとゞめられ參らせてはいかゞはすべき。たゞこれよりも出んとて、朝顔あさが

ほのすみ給ひし所にて御ぐしをおろし、すみの衣のころもに御身をやつし、かたみの袖を御身につけ、いまだならはぬたびのみち、あしよはぐるまのよろ〳〵と、立出給ふ御ありさま、めもあてられぬふぜいなり。

まづひがしはあづま、むつのはてまで尋ね、命あらば立かへり、にしはちんぜい、いき・つしまゝで尋んと思召、清水に御參有、なむや大ひくわんせをん、今一たびうきわかれのつまにあはせてたび給へと、ねんごろにきねんあり。音羽の山をこへ、山しなのさとをすぎ、あふさかの關、せきにつき給ひ、人をたづぬるかど出には、あふさかといふもたのもしく、しばしやすらひおはしまし、むかしをんぎのみかどのわうじせみまるは、この山にすてられ給ひしとき、これやこのゆくもかへるもわかれては、しるもしらぬもあふさかのせき、と此歌はゑしやじやうり、あへばわかれ、生ればしすると有しことなれば、いとゞ心ぼそくしてゆかせ給ふほどに、なみだのせき寺に參り、此所はいにしへをのゝこまちがすみけると也。さればこまちが歌▲わびぬれば身をうきくさのねをたへて、さそふみづあらばいなんとぞ思ふ。などながめしも、よの中をうらみてよみし也。我ばかりにはかぎらずと思召、いし山寺に御參り有。此も清水の一佛と頼をかけさせ給ひ、御まへにつや有て、夜もすがらむかしをおもひて、かのむらさき式部源氏

(一)一字缺、帝圖本により て補ふ
(二)後撰一五雜二、蟬丸逢坂の關に庵室を造りて住み侍りけるに行きかふ人を見て
(三)とゞしや定難の心なよみしとかや。人めのせきのせきでらわ小野の小町がすみしとやへわびぬれば(イ)
(四)古今一八、雜下
(五)とよみしもむかしなりとたどりゆきいつかあふみの石山や、むらさき式部が源氏の卷のしゆかうなえし泪後とやへめぐりあひて……月かなとゞいぜしも、今御みの上に引うけて御たもとしぼらせ給ふばかりなり(イ)

六十帖を書しるしたる所也。されば式部が歌に

雲隱 夜半 影 詠 もがくれにしよはの月かげととよみしは、今の我らがはかれおよみしかと、御 秩 絞 る ばかり也。

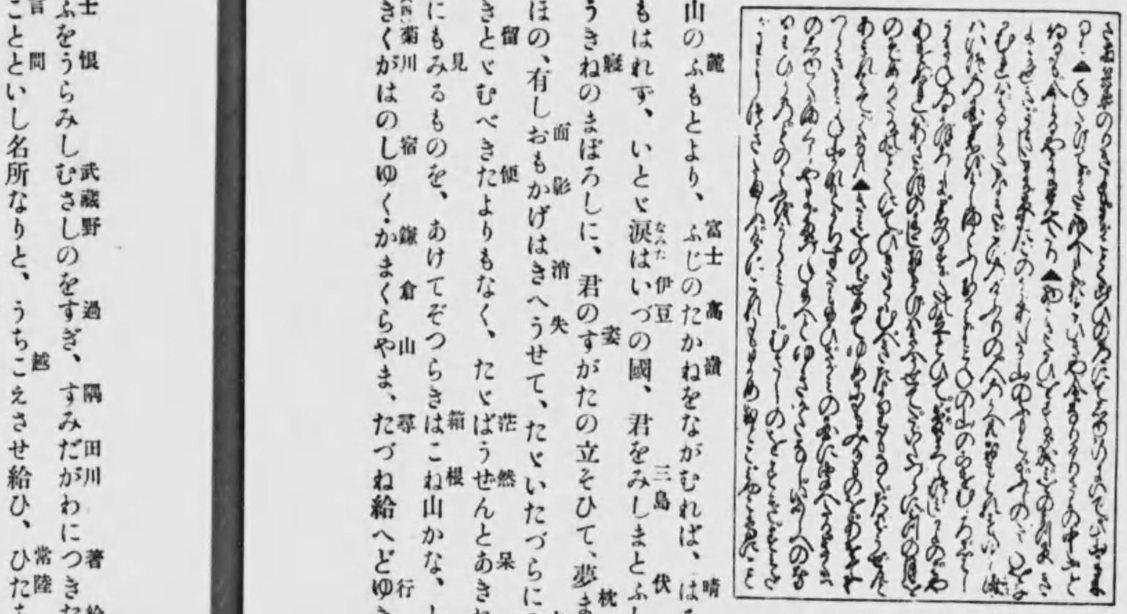
下

かくて其 (五) 夜も明ぬれば、勢多 唐 橋 せたのからはし打渡り、(六)野路 篠 原 のじしのはらを過行ば、涙 (なみだ) 曇 鏡 にくもるかゞみ山、(七)伊勢路 赴 それよりいせぢにおもむき、鈴 鹿 すゞかの山にさしかゝり、(八)御息 古 みやす所此國へ下り給ひし時、源氏 (九)歌 げんじの大將の名殘のうたに▲ふりすてゝけふはゆく共すゞかには、今日 行 鈴 鹿川 八十瀨 やそせの涙 濡 なみに袖はぬれじや、とよみおくり給へば、みやす所御返歌▲(一〇)すゞかはやそせのなみにぬれて、(一一)伊勢 誰 思 (一二) いせまでたれかおもひをこさん、とたがひにつらね給ふも、この所の事ぞかしと、うちこへさせ給ひ、それよりいそぢにさしかゝり、方 磯 路 渡 なみかな

(一三)いとゞしく過にしかたのこひしきに うらやましくもかへるなみかな

と詠 (よみ) め給ひしうらを過、いつかうき身はおはりの國、熱 田 尾張 あつたの宮をふしおがみ、伏 拜 三河 みかはの國に入ぬれば、(一四)八つ橋 燕 子花 かきつばた、蜘 手 くもでに物を思ひつゞけて打 通 とを (一六) らせ給ふ程に、尋 たづぬる

(一)新古今一六、雜上・紫式部集
(二)一字缺、帝圖本により て補ふ
(三)一字衍ナシ(帝圖本)
(四)一字缺、帝圖本により て補ふ
(五)一字不明
(六)のち(イ)
(七)いせぢになにあふすゞか山、是なんみやす所(イ)
(八)六條御息所
(九)源氏物語賢木卷參照
(一〇)二字缺
(一一)す(賢木卷)
(一二)おこせ(同上)
(一三)昔男ありけり。京にありわびて東にいきけるに伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、濱のいと白くたつを見て
(一四)伊勢物語七段)
(一五)伊勢物語九段參照
(一六)一字缺



(一)二字鉄
(二)西行法師
(三)新古今一〇、羇旅
(四)實は遠江國
(五)伊勢物語一二段をいふか

人をたう〳〵み、さよの中山にしばしや すらひ、むかし佐藤兵衛のりきよも、わ がごとくこひの道にてしゆ行にいで、此 山に來り、▲年たけてまたこゆべしとお もひきや、命なりけりさよの中山、と侍 るも、今みるやうに覺へたり。▲物うき たびをするが成みをのまつ原・きよみが せき・うきしまが原・たごのうら・あした か・ひる・ふじのたかねをながむれば、 はるゝかたなきこいのけぶりの、人のうへ共お もほの、有しおもかげはきへうせて、たゞいたづ らにみづの月を、のぞめるさるのごとくにて、ひ きとゞむべきたよりもなく、たゞばうせんとあきれはて、かくなん ▲きみをのみせめてゆめ にもみるものを、あけてぞつらきはこね山かな、とうちすさみ給ひ、さがみの國に聞へたる、 きくがはのしゆく、かまくらやま、たづね給へどゆきがたなし。いにしへのなりひらの、ものゝ

(一)遠江
(二)佐藤義清
(三)年たけてまたこゆべしとおもひきや
(四)菊川
(五)武

(一)業平のこと、伊勢物語(二段)の語
(二)伊勢物語九段參照
(三)「きこへしが侍れば」と續くか。原本は「きこへしが」に讀點あり。或は「われは」の誤か、若しくは脫字あるか
(四)凡河内躬恒の詠（古今四、秋上）
(五)壬生忠岑の詠（同上、前の躬恒の歌の次に見ゆ）
(六)原本つる、今異本によりて改む

士 恨 ふをうらみしむさしのをすぎ、隅田川 過 著 給 ふ。げにこれもまめおとこ、(一)忠實男 すみだがわにつきたまふ。(二)都 みやこ鳥に 言 問 ことといし名所なりと、うちこえさせ給ひ、武藏野 越 よりも君にはいつかあふしうまで、はる〳〵 州 奥 きぬるたびごろも、やつれはてたるわがすがた、 旅 衣 我 妻 いづくのつちかわれをまつ島、雄島 松 苦 屋 平 泉 をじまのとまや・ひらいづみ、つがるをすぎてそとのはま、まこ 土 我 輕 津 過 外 濱 とやこの所には、善知鳥 故 うとうの鳥の子ゆへに、ちの 血 なみだをながすときこへしが、(三)(マヽ)侍れはまたつま 流 聞 妻 故 ゆへぞと、見聞 脆 涙 御 軸 なみだに、そでのかはけるひまもなし。 乾 出羽 國 龜 割 越 過 後 それよりこしぢのかたへおもむかんと、夜を 越 路 方 夜 こめてではのくにかめはり山をこへすぎ、ゑちご・ 越 中 後 國 國 間 間 ゑつちうあとにみて、見 かゞのしら山ふしおが 加 賀 白 伏 拜 み、ゑちぜんのくにゝきこへたる、きのめの山に 越 前 木 芽 入 いりぬれば、陽 夕 日 傾 ひもせきじつにかたぶき、頃 ころは長月すへつかた、四方 嵐 烈 颯 よものあらしもはげしく、ひ 聲 物 凄 涙 誘 ぐらしのころものすごく、なみだをさそうをりふしに、雁 聲 りあへず▲(四)憂 うきことを思ひつらねてかりがね 草 枕 今宵 こよひはこゝにくさまくら、夜すがら思ひに 秋 夜 なきこそわたれあきのよな〳〵、とよみ給ひ、 詠 ゑ〳〵に、なきつれて御めをさまし、かくなん 殊 陀 鹿 鳴 音 目 山里は秋こそことにわびしけれ しかのなくねにめをさましつゝ (五)(六)

とうちすぎ給ひ、とてもねられぬながきよを、月もろともに立いで、(マヽ)寢 長 夜 つるがの川をばあとにみ

(四)憂きことを思ひつらねてかりがねの、なきこそわたれあきのよな〳〵
(五)山里は秋こそことにわびしけれ しかのなくねにめをさましつゝ
(六)つるがの川をばあとにみ

て、わかさのおばまうちすぎ、たんごのくにゝきこへたるはしだてに御參あり。うらのけしきをながむれば、ころはかみな月はじめつかた、まだはつ雪とおぼしくて、しまゝつがへにふりしけば、まつにも花とうたがはれ、よせくるなみはいたえ(一)〔マヽ〕をきよめ、なみまをくゞるすなどりぶね、いはまをつとふあま人の、みるめかひとるありさま、げにおもしろきめいしよかな。されば(二)いづみしきぶもこの所にて、(三)▲思ふことなくてやみましよさのうみあまのはしだてみやこなりせば、とよみてけり。みづからはひきかへて、みやこにてあらずとも、君もろともにみるならば、かゝるゑんごくはとうにても、おもふことのあるべきかと御たもとをひたし給ふ。

▲さるほどに花のみやこを出給ひて、はやふたとせになりぬれば、あまり御ちゝはゝ〔マヽ〕のきかまほしさに、こきやうのかたにをもむき、たんばの國にきこへたるおにがじやうをすぎゆけば、いかだをくだすおほい河、思ひにわがみもおひのやま、うちこへさせ給ひ、うきよのさがにいで、御ちゝはゝの御事を立ぎかせ給ひ、このほどのたびのつかれ、しばし御あしをやすめ給ひしが、とてもとゞまるみちならねば、これより西はつくしのはてまでも、いのちをかぎりに尋んと、もしやそれ共見えられ、いかゞはせんとおぼし召、夜はにまぎれしのびいで、とばにこひづか(四)・(五)あきの山、をとこ山をふしおがみ、こがなはてをさしすぎ、(六)せきとのしゆくをあとにみて、(七)かうない(八)〔マヽ〕・かちをりすぎゆけば、ひも山のはにかたぶき、山寺のかねのこゑ、くるゝをおし

(一)はだえ(膚)か
(二)赤染衛門の誤
(三)丹後國にまかりける時よめると詞書あり　上句、思ふことなくてや(ぞイ)見ましよさの海の（千載八、羇旅）
(四)一字缺
(五)山城國の名所、鳥羽離宮址の邊
(六)山城國山崎關址
(七)攝津國の地名
(八)未詳、かぢはら(梶原)か

むうぐひすの、なくねに花やちるらんと、みぬ花をのみ思ひやり、ふるごとながら思ひいで、〽(一)山寺のはるのゆふぐれきてみれば、いりあひのかねに花やちるらん、といにしへのうた人のゑいせしは、この寺かとうちながめ、かのへんじやうがつらねし、(二)花のちりつもるあくた河をうち渡り、いなのおざゝをわけすぎ、こやのいけみづ・いくた河、ひやうごを過てすまのうら、其日もやう〳〵くれたけの、ふし〳〵物を思ひつゞくるに、かのゆきひらの中納言、(三)まつ風むらさめにちぎりをこめ、しばしはこゝにすまのうらを、とりのなくねにたちいで、月のいでねば(四)大くらだに、よもあけぬればあかしがた、これなんいにしへ人まるすみて、かくなん▲(五)ほの〳〵とあかしのうらのあさぎりに、島がくれ行ふねをしぞ思ふ。これむじやうの心なるべし。いまさらをどろくべきにあらねども、このうたの心ばへ、身にしみ〳〵と思ひ行程に、たかさご・むろのつをうちすぎ、びぜん・びつちう・びんごのくに、今はうきよもあきのくに、みや島をふしをがみ、山ざと、うらのしほやまで、君かとゝへど袖もなき、ふるきすわうをきてみれば、すそながとのうらきれて、ふねにて渡る身をつくし、いとゞみやこのとをざかり、心ぼそくも出ふねの、君はいづくにまつらのおき、はるかに見ればきかいがしま、いにしへの(六)やすよりはこの島にながされて、こきやうにとゞまるつまやこの、あまりたよりのきかまほしさに、ふみこま〳〵と(七)かきくどき、このうみにうかむれば、せんせのちぎりくちせねば、ふるさとちかく

(一)能因法師の詠　但し「花ぞ散りける」又「山寺の」一に「山里の」（新古今二、春下）
(二)散りぬれば後は芥になる花を思ひ知らずも惑ふ蝶かな　僧正遍昭（古今一〇、物名、くたに）（遍昭集）
(三)謠曲松風參照　近古小說中にも松風村雨（萬治二年版）あり
(四)播磨國に在り、昔の明石の驛
(五)古今九、羇旅
(六)平家物語二、卒都婆流參照
(七)かきしたゝめ〔イ〕

*北野緣起下參照
なほ同書に載せし歌は
つくるとも又もやけなん菅原やむねのいたまのあはむかぎりは
袋草紙四・太平記一二、大内裏造營事附聖廟御事所載同前。大鏡上、左大臣時平條には下句「あかぬ」とあり

ながれより、ゆかりの人の取あげて、ついにこのふみつたはりぬ。みづからがちぎりは、なにとてかうすくして、かゝるゑんりはたうまで、尋てあはぬつらさよと、つゝむにあまる御かほばせ、ふな人のめもいかならん。

かくて御ふねちくぜんのはかたのつにつきければ、うら〳〵しま〳〵尋ね、それよりあんらくじに御參りあり。このてんじんの御いにしへ、かんしやうせうにておはせしとき、しへいのおとゞにざんせられ、このくにへながされ、つゐにこゝにてはて給ひ、御うらみのしうしんたちまちに、あら人がみとなり給ひ、にくかりしおとゞをならくにけをとし給ひ、*大りをば七たびまでやきはらひ ▲つくるともまたもやけなんすがはらの、むねのけぶりのあらんかぎりは、とあり、ついにしづまり給はねば、みかどさま〳〵になだめ給ひ、大じやう大じん〔マヽ〕に御くらゐをおくり、なむ天まん大じざい天じんと、きたのにいはひ給ひしより、御うらみをはらし給ひぬ。みづからかやうになり行も、うきくさのまひ口さがなくて、あさがほをすてしゆへぞかし。むかしをおぼし召ならば、みづからがうらみをも、ふたゝびはらさせ給へやと、ねんごろにきねんあり。あふすみ・さつまをうちすぎ、ひうがのくにをあとにみて、ぶんごのうらよりびんせんこひ、四國にわたりいよ・さぬき、思ひにむねもやくるのうら、八島をすぎてあはのくに、うきみはなにとなるとのおき、いつかきみにはあはぢ島、いのちあれば又めぐりくるあかしのう

(一)冴えか
(二)本宮證誠殿（しようじやうでん）のことなるべし
(三)古今一四、戀四、題不知、讀人不知、下句、忘る、も
(四)廣益俗說辨正編三神祇、俗說熊野神天竺より飛來り給ふ說參照
(五)舞曲高館にも異傳を載せ、又近古小說中に熊野の本地（近古小說解題に見ゆ）あり
(六)名は善財王、一に慈悲大顯王、妃五衰殿の善法女、他の妃の妬にあひ、懷姙のまゝ山中に殺さる。屍皇子を生む
(七)こそあはれなれ〔イ〕
(八)こと〔イ〕

ら、それより夜ぶねにめして出給ふ。すでにそのとしも八月なかばになりければ、所がらなにめでしあかしの月、いとおもしろくさ(一)へ侍るにつけて、あさがほの御事おぼし召いだし、御なみだとゝもにかくなん ▲月すめばひとしほくもるわがなみだ、君もろ共に見ばと思ふに、とうちながめ給ひ、それよりさかいのつにあがり、きのくにゝ御たちあり、三くまのに參り、あさがほの行衞をいのり參らせんと思召、ねごろ・こがはをうちすぎ、高野山をふしをがみいそがせ給ふ。▲くまのに參りて、みつの山、しんぐう・なちのおやま・しやうぢやうでん(二)につやありて、あさがほの御かたみのころものそでをとり出し、▲(三)かたみこそいまはあだなれこれなくば、わするゝひまもあらまし物を、と御かうしにかけをき、夜すがらきねんし給ふやう、ごんげん(四)の御いにしへ、まかだこくの御あるじ(五)なりしが、五すいでん(六)の御わかれものうきことにおぼし召、この山にとびきたり、今のごんげんとあらはれ給ひ、しゆじやうをさいどし給へば、いにしへの御思ひ、みづからあかぬわかれにおぼし召あはせ、いまひとたびあはれみて、ゆくゑをしらさせ給へやと、一七日さんろうありていのり給ふ。(七)さるほどにあさがほのうへは、よしの山にすてられおはしまし、じんりんのたへたる所なれば、いづくへ落ゆかせ給はんやうもなし。いかゞはせんとこゑをあげ、なげきさけばせ給へども、(八)きてとふ物はよぶこ鳥、ひも夕ぐれになりぬれば、やかんのものもをそろしや。なにとてか物

のふも、我 われをばむなしくなさずして、空 かやうに物をおもはするぞと、思 すこしこだかき山にあ
がり、二(一)(上)でうがたけをふしおがみ、嶽 この中將(二)姫 ひめの御いにしへも、みづからがごとく御けいぼ 繼母
にくまれ、(三)雲雀 ひばり山にすてられ給ひしが、それはほとけのほうべんにて、方便 あみだによらいと 阿彌陀如來
現 あらはれ給ふ。われはまたなにとなるべきうきみやらん。御いにしへわすれずば、はゝうへの 母上
おはします一つじやうどへむかへ給へと、淨土 迎 りうていこがれ給へば、かくていかなるふしぎにや、 流涕焦
いづくともなくとしのほどむそぢあまりのらうじよきたり、いかなる人にてましませば、この 六十 數 老女
山まで御いでであり、何事をかなげかせ給ふぞと、とぶらひ參らすれば、ひめ君らうじよを御覽 出 老女
じ、すこし御心づよくおぼし召、はじめをはりの御事共こまやかにかたり給へば、あらいたは 始 終 細 語
しの御事や。このちうしよも、もとはみやこのものなりしが、御身のごとくけいぼににくまれ、 都 繼母 憎
このくに(五)國 へすてられて、かやうに今 存 までながらへさぶらふなり。みやこへかへらせ給はん程は 候 都 還
こなたへいらせ給へとて、なを山ふかくぐし申、さもふしぎなるはにふのこやにうつし、この 入 深 具 不思議 埴生 小屋 移
實 誠 ひめ君はみづをくみつまぎをとり、うき山がつの御すまひ、(六)目 水 汲 爪 木 採 憂 賤 住
み・わらびをおりていたはり申。ひめ君はみづをくみつまぎをとり、うき山がつの御すまひ、(六)目
もあてられぬ御有 樣 さまなり。されば都にありし御 時 ときは、ぎよくたう 玉 樓 きんでんのゆかをみがき、 金 殿 床 塵
(七)鸞輿 屬 らんよしよくしやの玉ぎぬのそでをかざりてしきたへ、花のにしきのしとねにをきふしなりし 飾 數 妙 錦 茵 臥 起
引 替 柴 編 伏 屋 隈 變
其身の、今は又ひきかへ、しばのあみどもまばらにて、ふせやくまなき月かげも、むかしにか 昔 影

(一)大和國、北葛城郡二上山(にじやうさん)又、ふたかみやま)一名大坂山の北に在り。男岳・女岳と呼ばる。昔中將姫此の峯に庵を結びしと傳ふ山の南東麓に當麻寺あり
(二)横佩左大臣藤原豐成女、善心尼・妙意尼又法如尼の名あり
(三)當麻曼陀羅縁起 元享釋書二一 本朝列女傳九 中將姫行狀記 中將姫本地 謠曲當麻・雲雀山等參照
(四)大和國宇陀郡、一說、紀伊國有田郡
(五)山(イ)
(六)何にたとへんかたもなし(イ)
(七)鸞輿屬 車の玉衣の色を飾りて數妙の枕づく妻屋の内にしては、花の錦の

菌の起き臥しなりし身なれども、今は埴生のこや玉を數きし床ならん
(謠曲關寺小町)

(二)藤原忠房の詠
(古今四、秋上)

はり物すごく、御身にまとふあさ衣も、肩 褞 寢 薄 かたすそやつれうすければ、夜さむにさそふ身をしる 衾 知
雨 霧 方 我 語 あめ、はるゝかたなきわが思ひ、かたりなぐさむ人なければ、枕 慰 まくらにすだくきり〳〵す、わが 蟋
ごとくにや物を思ふかと、獨 言 ひとりことばをうけこたふ。あるときはまたかくなん▲きり〳〵す
いたくなきそあきのよの、長 夜 鳴 秋 ながき思ひはわれぞまされる、などいうちすさみ、あけぬくれぬ 我 明 暮
と月日をおくり給ふほどに、はや三年 とせになり侍る。さればとし月の御おもひ身につもり、か 積 思 年
ぎりのゆかにふし給ふ。らうじよあまりのいたはしさに、御そばちかく參り、らうしやうふぢ 側 近 老 少 不定
やうのかなしさよ。などみづからをばさきだて給はで、わかき御身のさきだち給ふ事のかなし 若 先 悲
さよと、りうていこがれかなしめども、うひむじやうのならひにて、なげくしるしのあらずし 流涕焦 有爲無常 習 歎
て、しだひ〳〵によはり給へば、いかにやひめ君、おぼし召をく事の有ならば、このらう女に 次第 弱 思 置 姫 老
おほせをかれよと申ければ、其時ひめ君さもたへがたき御こゑにて、このとし月の御なさけ、 仰 置 聲 堪 年 情
かへすゝもありがたく思ひ參らするなり。又みづからがむなしきしがひをば、みちのほとり 返 空 死骸 路
につきこめてたび給へ。もしもこひしき君のめぐりもきたり給ひなば、せめてはくさのかげに 築込 來 戀 草陰
ても、御すがたをも見もやせんと、御なみだとゝもにくれ〳〵と、御とし十八にてつゐにはか 姿 涙 共 (二) 年 終
なくなり給ふ。らう女のなげくことおろかならず。かくて御ゆいごんにまかせ、御しがいをと 老 歎 言 遺 死骸 取
りをき、みちのほとりにつきこめ、そのゝちらうじよは、いづくともなくうせ侍る。 置 路 築込 後 老女 失

(二)脫文か

(一)まん(満)する〔イ〕
(二)八じゆん計のらう人〔イ〕
(三)つが(寐)〔イ〕

さるほどに露つゆのみやは、權現ごんげんの御まへにさんろうありておはせしが、七日に(一)あたるあか月、(二)八旬はつしゆんにおよぶらうじん、宮人みやの御まくらがみにたち給ひ、なんぢが尋ぬるものは、この三とせがほど、中將ひめのあはれみ給ひしが、なんじがことをとし月思ひしが身につもり、すぎつる月の七日にむなしくなりてあるなり。このよのたいめん思ひもよらず。はかなきあとをみんと思はゞ、よしのゝおくを尋ねよと、かきけすやうにうせ給ふ。みやは御めをさまし、ちながらへあるものを。さてはいきてもせんなしと、御じがいあらんとおぼせしが、まてしばしわが心、せめてはかなきあとをも尋ね、そのしるしのほとりにていかにもなり、このよのちぎりこそうすくとも、らいせはかならずひとつはちすのゑんにならんとおぼしめし、ゆめぢをたどる心ちして、よろ〳〵よは〳〵と、よしの山につき給へば、ひもせいざんにかたぶき、みやは御めをさまし、山がらすのこゑさび、こがらしのをと物すさまじきゆふぐれに、むしのねもかれ〳〵に、わがごとくにやつまをこふかと、落るなみだにめもくれ、かたはぐるまのやるかたもなく、たにゝをりみねにあがり、尋ね給へどあともなし。夜もふけゆけばこかげにやどり、夜すがらおもひに御身をせめ、やう〳〵しのゝめもはれ行ば、しかのかよひちとおぼしきほそみちをわけ行て見給へば、あたらしきべうしよあり。むねうちさはぎ

(一)追つき甲さんとて御まもり刀〔イ〕
(二)御心もとに〔イ〕
(三)あいしう(愛執)のきづなにひかれ、つる高野山にてほつしん(發心)し、年月をおくりけるが、よし野の里にしる人ありて、此所を通りしが、みやの御ありさまを見まゐせ、おどろきたちより、さていかなる〔イ〕
(四)かいいだき、とひ奉れば、よにくるしげなるこゑにて今は〔イ〕
(五)もの誤か

御らむずれば、いまゝで見えざるさうる。さてはうたがひもなきこれなりと、いまひとしほの御なげきに、しばしきさんづの河にて待給へ。いそぎおつきたな取いだし、西にむかひて御てをあはせ、なむ十ばう三世のしよぶつ、あさがほのうへもろともに、ひとつはちすにむかへ給へと、心もとにさしたて、かつばとふさせ給ひけり。

さていかなる人にてましませば、このやまで御出あり、かやうにならせ給ふぞと、とひ參らすれば、みやはきこし召、とふにつらさのまたわ御なみだにむせび、御返事もの給はねば、だうしんばうかさねて尋申せば、さもくるしげなる御こゑにて、いまはなにをかつゝむべき。さく

つらくして〔イ〕

東北帝大木下巻

となりてましますを、みづからはしらずして、出(知)いで、この三年(世)とせがほど尋ねしが、熊野(詮)にまの〻御をしへにより、只今(教)はかなきあと(悲)に尋あひ、まゐしきはゝのをそうしくて(自害)、この山にすてられさせ給ひ、とし月のつかれにや、すぎつる月の七日にむなしくならせ、かやうにのばらのつかに(野原)ねんごろにつたへてたべ。さだめてふしんなし給ふべし。これなるまぼりがたなをしるしに参らせ給ふ。

(一)玉のをのきれやらず、身にあひ参らする事うれしや〔イ〕
(二)脱字あるべし
情あるか

(32)

ら木のみかどのわうじ、つゆのみや(帝)(皇子)(露宮)とはわれぞかし。されば(我)これなるつかは、むめがえ(梅枝)の中納言のむすめに、あさがほ(朝顔)のうへといふ人なりしが、みづから一夜のちぎり(契)をこめしを、

(一)惑

(母)

(繼)

(塞)

(年)

(空)

(過)

(野原)

(塚)

(忍)

(都)

(跡)

(只)

(停)

(都)

(悲)

(別)

(教)

(上)

(顔)

(朝)

(梅枝)

(上)

(露宮)

(帝)

(皇子)

(露)

(塚)

(一)御ゆくふしれざれば御なげきかざりなし〔イ〕
(二)笑止か

へや。またみづからがしが(死骸)ひをば、このつか(塚)(中)のうちにひとつにこめて給はれや。南無阿彌陀佛なむあみだぶ

最期(をさいごにて、御とし(年)廿一にてつゆ(空露)にむなしくなり給ふ。だうしんばう(道心坊)見参らせ、さてはつゆ(露)のみやにてましますか。こはいかなる所へ参りあひ、かやうに思ひをする事よと、なみだにむせびいたりしが、さてしもあらぬことなれば、御ゆひごむ(遺言)のたがへず、御しがひ(死骸)をあさがほの上〔マヽ〕へおなじど中にこめ、御まぼりがたな(守刀)をもち、花の都へぞいそぎ侍る。

▲さるほどに御ちゝみかど(父帝)は、つゆ(露)のみや見え給はねば、くに〳〵へちよくし(勅使)をたてさせ給へども、はや三年(年)とせになれども御行衛のあらざれば、いかゞはせんとなげき給ふ事かぎりなし。

くぎやう(公卿)・てんじやう人(殿上)にいたるまで、てんか(天下)のせうし(〔マヽ〕)これなりと、せんぎ(詮議)まち〳〵ありし所に、だうしんばう(道心坊)参りこのよしをそうもんす(奏聞)。御門きこし召、さていかなる事かと、だうしんばう(道心坊)御そばちかくめされ(側近)、ことのしさひ(仔細)御たづね(尋)ありければ、ありし御事共こまやかに申あげ(上)、御まぼりがたなさゝぐれば(捧刀)、御門御らんじ(覧)、今はうたがふ事もなしと、御ゆかをころび(轉床)をち、り(落)涕(露)(母)菊(細)

うていこがれ給へば、つゆの御はゝきく(菊)の御せん(前)、御きやうだい(兄弟)のみやたち(宮達)、てん上人(殿上)にいたるまで、天にあをぎ(仰)ちにふし(地伏)、なきかなしま(泣悲)せ給ふ御ありさま(有様)、これやけうしゆしやくそんね(教主釋尊)(混)槃(涅)はんの雲にかくれさせ給ひしとき、御でし(弟子)十六らかん(羅漢)其外のしよぶつ(諸佛)、五十にるいにいたるまで(二類)、御わかれのなみだにしづみしも(沈)、此御なげき(歎)にはこさじと(越)、心なき人までも袖をぬらさぬ(濡)

はなかりけり。

さる程にみかどは御なみだをおさへ、かやうになりゆく事、偏に浮草の前の仕業なりとの給ひ、うつほぶねに造りこめ、*萬里沖に流しながし給ふ。されば浮草のまひ辛くも因果のをきへながし給ふ。其いんぐわ、たちまちに身にきたり、今の世にいたるまで、へいちにさへね持ちもち給ふ其悪心あしく、人のこあしかれ、わが子さかへよとありしむくひあきらかにて、あさが上空ほのうへむなしくなり給ひしをなじ月日、このひめ君もうせ給ひ、はかなきあとよりさうくわとげんじいで、一たびはさきさかゆるといへ共、さかりのはるにすゑよりかれはつる事、これいまの人のうへに、けいしをにくみ、わがこのみをほんとする人、かへつて其子すゑかれをとろゆる事をみせしめんためなり。又むめがへの中なごんは、つのくになにはのうらになが し給ふ。いまのなにはのむめこれなり。

さるほどにみかどは、かゝる物うきよに、いつをいつまでかくあらんと、いとざくらのしむわうへ御くらゐをゆづり給ふ。このとうぐうの御すへも、たへなるめいくわとげんじ給ひ、今み

*萬里のはたう（波濤）へ追ひはなつ。ゐんぐわ（因果）のほどこそおそろしけれ（イ）

やこにきこへたるこのへのいとざくらこれなり。それより御ちゝ大わうは、御一門うんかく御ともにて、よしのやまへみゆきあり。つゆのみやの御はかに御かうあり、御なげきのひまより、かくなん▲みどり子をのはらのつゆとなしをきて、おひきざくらのこるものうさ、かやうに御ゑいかあり、びんばつとそりこぼし、御あんしつとむすび、とし月御とぶらひあり。つゐに山にてほうぎよあり。いまのよしのゝさくらと、めいぼくにあらはれ給ふなり。又二のわうじもみぢのみやの御うたに、▲わかれをばなにゝたとへんもみぢばの、ちりのこる身もいつをいつまで、とあり。おぐら山にとりこもらせ給ひ、さうあんのむすび、つゆのみやの御とぶらひありて、つゐにそこにてうせ給ひ、いまのをぐらのもみぢとげんじ給ふなり。又つゆの御はゝきくの御前かくなん▲あはれをばよその事にぞおもひしに、わがみのうへにきくぞかなしき、と侍り。このよはゆめのうちぞかし。つゆのごせをもとひ、又はわが身のためにとて、丈ひとしき御ぐしをおろし、すみのころもに身をやつし、御しゆ行にいで給ふ。御めのとのおぐるまも、われも御とも申さんとて、同おなじすがたにさまをかへ、もろともにいのちかぎりにおぐるまの、めぐり〳〵てのりの道にも、とみ御前の御とも申、とし月さんがひをいゑとして、つゐに二人ともに、のばらのつちとなり給ひ、のぎく〳〵をぐるまの花となり、御かたち御かたちをのこしをき給ふなり。又つゆのみやすて給ひしすゝきの御せんも、御うらみかず〳〵なれども、

(一) 小車の歌なるべし
(二) との下 よ(詠)脱か

*されば にやつゆの みやは、めいどの 御ちぎりふかゝりしにより、御つかの内より、若ぎみ御しゆつしやう（出生）ましませしが、つゆにはかなくきえ給ふ。まことに、しやうじやひつすひぶしやぢやうり（盛者必衰会者定離）とはいへ共、ぼんのう（煩悩）のきづなきれやらず、とんぢんかう（貪、瞋、痴）の三どく（毒）に、まことのみち（道）をうしなふ人げんのならひながらも、梅がえの みだい（御室）うきくさのじやけん（邪慳）ほど、ねんぐわはめぐる小ぐるまのあさましかりけるしだい（次第）なり。

別わかれの道には 岩木 いはきならず、ひきかへて 悲 かなしみ給ふ事かぎりなく、かくなん▲捨 すてられて 糸薄 手なれぬ 琴 ことのいとすゝきも、別わかれとなれば ほにいづる 穂出 もの、とよみ給ひ、いちはらの 市原野取 りこもり、露 弔 つゆの御とぶらひありてうせ給ひ、亡 妙 たへなる 草 くさとなり給ふなり。又 朝 あさがほの 顔 御しゆつしやう（出生）ましませしが、つゆにはかなくきえ給ふ。まことに、しやうじやひつすひぶしやぢやうり（盛者必衰会者定離）とはいへ共、ぼんのう（煩悩）のきづなきれやらず、とんぢんかう（貪、瞋、痴）の三どく（毒）に、まことのみち（道）をうしなふ人げんのならひながらも、梅がえの みだい（御室）うきくさのじやけん（邪慳）ほど、ねんぐわはめぐる小ぐるまのあさましかりけるしだい（次第）なり。

母青 乳めのとあをやぎの 前 まひ▲千代 ちよまでとそだてし君はかれはて、わ れはあをやぎたれをみましや、情 人間 今 楊柳 現 いまのやうりうとげんじ、にんげんの人々のなさ 隠 けふかく心すなをなるをば、あをやぎとたとへられ、人にしのばれ侍るなり。

▲*さる程に露 朝 つゆ顔 あさがほは、冥途 深 めいど契 塚 の御ちぎりふかくわたらせ給ひ、つ 中 かのうち 若 よりわかぎみ 君 一人出給ふ。父母 さ れ共御ちゝはゝのましまさねば、青 いかでかそだち給ふべき。やがてつ 露 消 ゆときへ給ひ、そのたましひの 魂 こ 胡蝶 うとなり、よろづの花にたはぶれ、萬 戯 ちゝにてやまします、母はゝにてや侍 父 るかと、明暮 歎 あけくれなげき給ふ。いま

されば にや、ふるき歌にも よの中は……

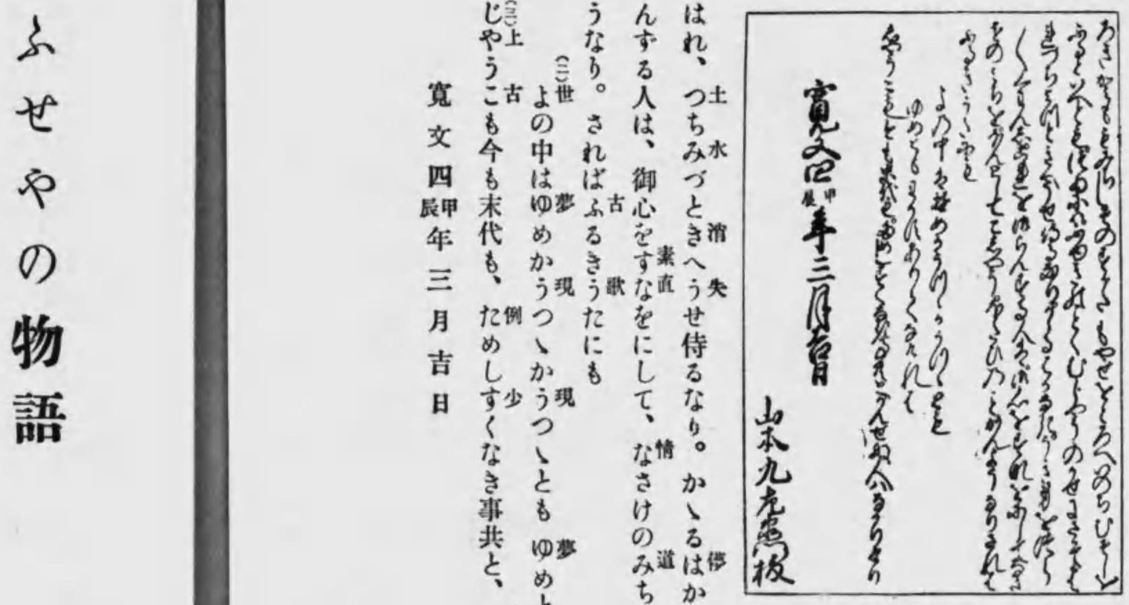
〔イ〕

厳木下巻

あがり、今 いまの電 いなづまの影 かげ是なり。故 かるがゆへに、人間のあひだに、仮 はかなきこと、あだなるをば、朝顔 あさがほの露 つゆ、電 いなづまの影 かげ、胡蝶 こてうの遊 あそびとたとへ侍るなり。そのほか御門 一もん 痛 けい 相 しやうにいたるまで、かくのごとくさうもくとへんげ 変化 給ひ、春 はるは色よき花とさき 咲 夏 さかへ、なつの日 ひにあひてしぼれ、秋 あきは葉 あをば 青 もも 紅 みぢし、冬 ふゆすでにきたれば、山のこけ苔 路 野原 のはらのちりとなりて、四季 しきの色をかゆる事、これ衆生 しゆじやう 上 のうへに、四季 しきたる事を知 しら

世のよまでも、父母 ちゝはゝ無 なくして土 つち 生 よりしやうじ、花の露 つゆにて命を 繦 つぐにより、あだなる事をばこてう 胡蝶 の遊 あそびとたとへ侍るなり。されば朝 あさ 顔 がほの上 うへ、仮 かゝるはかなきちぎ 契 りをし給ふにより、しうしん（しん）の花までも、夜 よる露 つゆにちぎり有、よく 契 咲といへども、日陰 ひかげをまたず 待 しをれ侍るなり。またつゆ露のみや、年 とし 宮 月の御思ひ、火 くわ 煙 ゑんとなりて天に

(一)いそぢ(五十)なふ(縒)るといへどもか
或は
ひそしなは ひさしう の誤か
(二)古今一八、雑下、讀人不知。又小町集に見ゆ。但し、いづれも下句
ゆめともしらず
(三)なす事かたく、やぶるはやすし。もつばらまことの道なみがゝざらんやきみ(君)忠、ふぼ(父母)にかう(孝)はうゆう(朋友)にまじはりまことと(誠)あり、ぶつじん(佛神)のみちにうとからぬこそ、子孫のさかえんもとなり。もろ〳〵のの(法)はかげ(影)とかたち(形)のごとしとや。じやうこも……〔イ〕
(四)もの こそ〔イ〕



土水消失はれ、つちみづときへうせ侍るなり。かゝるはかなきうき身をつら〳〵(偖)くわんじ、これを御らんずる人は、御心をすなをにして、なさけのみちをほんとして、ごしやうぼだひのことかんよ(後生菩提事肝要)

よの中はゆめかうつゝかうつゝともゆめともわかずありてなければ
じやうこも今も末代も、ためしすくなき事共と、かんせぬ人はなかりけり。

寛文四甲辰年三月吉日

山本九左衛門板

ふせやの物語

今昔、花の都に家たかき人の御子に、播磨の少将源のたゞのぶときこゆる人おはしけり。御年十八にて、一條の中納言の最愛の姫君を北の方とむかへとり給ひて、四季折節のながめにも御志あさからず、たがひに情ふかくてあかしくらし給ふ程に、いつしかうつくしき姫君いでき給ひ、いとゞあくかたなく、御ふたところの中にしたがひて、きのふにけふはまさり給ひつゝ、(一)ふり物なんどのやうにおひいで給ふを有難く思召、御年七にもなり給へば、御ぐしゆらゝ〳〵として、御かたちなべてならぬ、御心などのさいかくしも申たとへんかたなし。ひき物を教へ給へば、(二)師のいとまも入給はず、いとわりなき音をのみひき給へば、たゞ人とも覚えず、しかるべき佛の化身にやと、あやむる程なるべし。御さかりになり給はんまゝの御ゆくへ、さこそいとおぼしやられて、とく十ばかりになしたてまつりて見まほしくなどかたらひつ。(三)姫君の母君例ならずなやみ給ひける程に、少将にきこゆるやう、はかなくなり給ひなん後は、このおさあひ物あはれみ給へ。なみ〳〵ならんありさま

(一)瓜が
(二)一字缺、前田家本によりて補ふ
(三)つゝ〔前田家本〕

せさせ給はで、帝に奉り給へなんどきこへ給ひけり。

日にそへておもり給ふ。御身もいとゞこゝろぼそげに思はれければ、少將にきこへ給ふやう、いかなるやらんこの度はあぢきなく覺ゆる。さるにつけても、この姫君のことこそあはれにかなしう覺ゆれ。我なからんあといかゞせんずらんと思ふに、後の世のさわりともなりぬべし。かまへて〳〵おろかにあたり給ふなよ。それぞ我けふやうと思ひ奉らん。かばかりたぐひなくうつくしければ、よもあしからじ。かまへてなみ〳〵ならんありさまにはせさせ給ふななんど、打なげきつゝの給ふに、少將いとゞあさましく思しまどひつ。御なみだを押のごひて、あゝよれに思ひきこゆん。我もおなじ親なれば、それをばなじか思しめしおく。さても御年十三にてむかへ奉りしより、心ばかりは淺からず、十六年を過しつるも夢にてありける物を、おくれさきだち給ふこともあらば、我身もいきてなんの甲斐あるべきと、せきかね給へり。

この姫君の御めのと、こたかきといふ女は、もとより心ざま人々しうあつて、しふよりゆるされてめしつかはれ奉りしうへ、御乳にまゐりて後は、いとゞおぼえある人にてはんべりけり。それも姫君の御ことのみうくぞきこゆおき給ふ。かくて長月の末頃に、はかなきならひにて、昔語になり給ひぬ。姫君かなしさのあまりに、むなしき御ぐしにいだきつき給ひて、かくなん

(一) あら〔前〕
(二) ましていかはかり〔前〕
(三) 二字缺、前田家本によりて補ふ
(四) こだかきか 後に木たかきと見ゆ

打たのむ葉は秋風に散はてゝ、なにのかげにかこのみたまらん

これを見奉るに、別れのなみだにあはれをそへて、御前に候人々聲も惜しまずなきあへり。殿の御なげき中〳〵にいふもおろかなり。さてしもあるべきならねば、終に煙となし奉りぬ。籠僧なんど入て、様々の御佛事おこなひ給ふもあはれなり。されども有爲無常の理は、口惜きならひ申ばかりなし。々頼もしくおはれなり。御祈りの程はかくてなぐさみ給ひぬ。それ過ぬれば籠僧なんど皆出給ひぬ。御うちいとしづかになりぬるにつけて、少將は御なげき淺からず、明暮信心をいたし、御經をよみ念佛を申給ひて、その後世菩提をとぶらひ奉り給ふ。御かたみには姫君をもてなしきこえて、母上の草のかげにて見給はん事もありと思しければ、定めたる北の方もなくて三年にもなりぬ。姫君いとゞ御心もさか〳〵しくなり給ひぬ。父にむかひてなく〳〵のたまはく、母上うせ給ひてのち、母といふ人を見奉らぬがわびしきに、いかならん人をもむかへとり給ひて、我に母といふ物見せ給へとのたまへば、しばしはあるまじき事ときこえ給へども、かくいひ給ひて後は、朝夕おどろかし給へば、少將理と思し給ひて、さるべき人をたづね給ふに、五條の宰相といひし人のはかなくなり給ひて、北の方いまだ一人おはするが、是も姫君一人もち給へり。萬よしある様に

(一) ことわり〔前〕
(二) 前田家本、ろうそう、と仮名あり
(三) 速疾か
(四) おほせ〔前〕

て、さるべき人と申ければ、憂うきをも身につ積みたる人なればとて、度々いひよりて迎むかへ給ひぬ。

二三日ありて、北の方に姫君を喚よびたてまつり御覧らんじつゝ、我姫君をこそ頬たぐひなき體と思ひしに、是程美いつくしき人も世に生うまれ給ひける物と、つく〴〵とまぼり給ふ。假かりそめなれど親となり子となるは、この世ならぬ事と申すに、今よりは隔なく思おぼせよ。我もゆめ〳〵疎おろかに思ひ奉るべからずとて、慇ねんごろにの給ひて、後は少しもおろかなる氣色けしきなくおはせば、少將もうれしげにおはしけり。

かくて年月ふる程に、或ある時少將物語のつい序でに、まことや姫君のおはするよしを承うけたまはりし。いづくにましますや。むかへとり迎取て我姫君と一所にそだて給へかしなんどきこゆれば、喜聞北の方よろこび給ひてやがてよび喚給ひぬ。たがひの公達うち語らひ遊あそび給ふ程に、へきなんど様々にこしらへおきて、少將を入まゐらせてけり。にほひの君もかくばかりなりぬれば、いかゞし給はん。御めのとや乳母うに及およばで終になびかせ給ひけり。少將よそにて思ひしよりもなを近まさりして、片時はなれ難くぞ思おぼしける。見るにつけてもいとゞ心まさりのみし給ふ。忍びつゝおはしてか、やう〳〵慰なぐさめ給へども、いたく打とけ給ふけしき氣色もなし。さるにつけても、いとゞ心ある様にぞ思お

ぼしける。

かくしつゝ明し暮し給ふ程に、北の方めざましき事に思して、ゆげね(親眞)殿に聞ゆるやう、あひしの君のいま今一も大人となしきをさしおきて、ありつきぬるこそ安からね。いかゞしてにほひの君を亡うしなひてんとの宣給へば、ゆげね、我もさこそ思ひつるに(二)にこそ。さるべきものに申合あはせて見侍らんとて、五條わたりなる武士三人語らひよせて、ゆげねが局にて様々に酒呑ませもてなし、祝の肴にとて卷絹五疋唐綾三反だんづゝ三人が前におき置たり。これを怪あやしと見るに、北の方みづから出あひて、わらはが申さん事聞なんやとの宣給へば、武士畏て、何事にて候とも、命の及および候はん程の事は承うけたまり候はんと、同じやうに申せば、北の方よろこび喜て仰らるゝやう、是のにほひの君が少將を女よばねにして、婚せたらば、なを猶〳〵も心ざしは所望にしたがひ隨候はんと、の宣給ふこそおそろし怖けれ。さて三人目を合せて、暫しありて、それこそかなひ叶候まじけれ。この君は御家のしう主にてまし候うへ、さばかり高きちやう帳うの内におはしますを、いかゞしてたばかり出し奉るべき。思ひより候はずといふ時に、著たる衣をぬ脱ぎて肴にして、みづから酌(二)もて、なを猶〳〵強て、弓箭とる取武士となりて、何にか恐れをなすべき。たばかりてとゞけん事は、いと易き事なるべしとの宣給へば、欲耽にふけるならひなれば、仰にしたが從ひ候はんと申せば、北の方はよろこび喜て、さかづき盃打呑て、

(一) 候し(前)
(二) 思あひてうちかたらひ(前)
(三) れへき(前) 脫文あるべし
(一) はの誤か
(二) 思候つる(前)
(三) 取て(前)

さらばあすの物したくし給へ。内の御あそび(遊)なれば、御ともめされてまゐらんずらん。又父君も參り給ふべし。その跡にすかし出して、はし近く(端)あそばん時に、はしりよりていだきとりて、近江の水海に沈め給へとの給へば、皆うけたまはりぬと定めて歸りぬ。

少將殿の晝寢し給へる御夢に見え給ふやう、俄に辻風ふき渡りて、にほひの君をまきあげて(卷上)ゆきぬと御覽じて、むね打さわぎて、うつゝになりぬれども物もの給はず、御息もあらくけしからず見えさせ給へば、北の方あさましき顏にて、御心地例ならず。いかに〳〵との給へども、暫ためらひて、唯今かゝる夢を見つるなり。母上もあやしく夢に見えてこそ程なくかくれにしか。いかなる事のあるべきやらんとて泪ぐみ給へば、北の方心の中には、我思ふ事のかなふべきかとうれしけれども、何事か候はん。左樣のまうざう見る事ひまなく侍れども、それそよらず。あらまがゝしやとて、是をつゐでにして、なさぬ中なればか樣にいふとぞ思しめさるらん。我子も同じやうにて候へば、露ちりばかりもおろかに思はねども、きく程の事をばいかゞ聞えざらん。にほひの方へところにより文の通ふなる、返をも見せずし給ふなるこそおそろしけれ。終にはよき事侍らじ。思召合する事侍るべしとの給へば、世に心づきなげに思して、などかそれをせいし給はぬぞとばかりありて、内へ參り給はんとて、にほひの君の方へおはして見給へば、あなたこなたの女房少人ばかりなみ居

(一)御ひろれ〔前〕
(二)に〔前〕
(三)返事〔前〕
(四)たゞいま黒召あわする〔前〕

て、繪どもひろげてあいしの君と見給へり。にほひの君は女郎花の上に白き小うちぎひきかけてふしけるが、おきなをり給へる樣體、常に見る人とも覺えず。あらめづらしやとのみうつくしく見ゆるにも、ありつる夢語りて出んもまがゝしくて、むねふさがりて出給ふを、にほひの君の例ならぬ御けしきあやしく思すに、父君、晝かゝる夢見つるなり。さて心さわぎして、御祈はじめ候べき日見せにつかはし候ひつるとの給へり。御身づからも御經よみてつゝしみ給へ。あまたあらんだにもあるべし。まして唯一人持奉ればとて、さめ〴〵となき給ひて、色々の事仰られて、あらき風もいたはしくて過ぎつるにとて、泪を流し給ひけるに、にほひの君もまことに思してなき給ふ。ともに御ぐしのちに思へば、是ぞかぎりなりける。

さてそれより歸りて、内へ參り給はんとて又おはしぬ。御前の人々かまへて〳〵そひ奉れと、かへすゝいひ置て出給ひぬ。やう〳〵夜にもなりければ、北の方御でいに出て、中のかうしあげてみすを卷あげ、せんざいの方をながめ、月に向ひて、姫君達の御中へじじうといふものを御使にて、いまはなりはてぬる我身だにも、折節の氣色はいとゞ捨難きに、わかき人々のいかなればながめし給はぬぞ。こなたへ出給ひてあそび給へとの給へば、二人ながら入らせ給ひて、いでやにほひの君、我に琴ひきてきかせ給へとあれば、承ぬとて、琴柱たてなをしてひき給ふに、我が心にもすみ渡り面白く思し給ひけり。やゝ久しくありて、武士もとより心得たる

*前田家本、體にていと揚假名あり

事なれば、走りあがりて（上）姫君かきいだきて、門より外へはしり行。御めのと（母）をはじめて、數の女房達あわてさわぎて走るに、武士立かへりて、太刀のむね（背）にてさん〴〵（散）に木だかきを打ふせてけり。殘りの女房達もをぢおのゝき（怖懼慄）てにげ歸たれば、あいしの君をはじめて、數の女房達（半）はしたものまでも、我姫君はいづちへおはしけるぞやと、なき（泣）かなしみけり。母御前も空なきして、是はいかにとて、ゑん（縁）より下へころびなげき（歎）給ふよしをし給ふ。

さて武士夜の中に近江の水海（湖）にゆき（行）て、汀に姫君おろして申やう、行あひばら（二合腹）のとの（三殿）をとりておはするとて、まゝ母御前のあながち（強）にやとひ給ふ程にかくするなり。ゆめ〳〵おのれらに恨（厭）かけ給ふなとて、御衣（四）はぎ（剝取）とりて、すでに太刀をぬきてむかひ（向）奉つるに、姫君心も消え目もくれて、物もの給はず。さりながら泣〳〵の給ふやう、いかなる武士なりとも、まことにおのれらが敵ならずば、さのみ心のたけかる（猛）べきか。暫いとま（暇）を得させよ。臨終の十念せんとの給へば、武士實にもあはれなりと思ひて、太刀をそばめて（側）まちけり（待）。これらが太刀をこひうけて、（五）乞受丈たけにあまりたる御ぐし（髮）を五にゆひわけ（結分）て、一は母の宮々におはしますうぶすな（産土）八幡大菩薩（賀）か、一は ゑんま（閻魔）法王に手向奉つる、西にむか（六向）ひて、南無十方三世の佛神、誓ひつきせずましまさば、納受たれ（垂）て、唯今臨終の期にのぞむ（臨）。ねがわくば惡業なんなう（七煩惱塵）のちりをすゝぎて、母の聖靈諸共に、かならず（必）引接し給へと、御手を合せて念佛

百返ばかり申て、今はとく〳〵（計）はからへとの（宣）給ひて泪を流し給へば、武士も共に泪を流して、

あらけなき武士も實に哀れなる　時は泪のこぼれけるかな

にほひの君もかくなん

逢坂の關を越れば程もなく　美濃尾張（身の終）まで

みのをはりとも成にけるかな

との（宣）給ふも限りなくいとほしく思ひ奉れども、とてもたすけたてまつる（助奉）べき道ならねば、太刀をとりなを（直）し近づきて、もちあぐ（持上）るかとみゆる（見）に、太刀は三にをれ（折）にけり。武士はまだか（未）〳〵聞事は見もせずきゝもせぬとて、共におどろく（驚）。さりながらさてやむ（止）べきならねばとて、水海の深きところにしづめ（沈）て歸りぬ。

いきて（生）も死にても親子の御あはれはたし（多生）やうくわうごう（曠劫）迄も深き事なれば、後世の母御前や影の身にそひ（添）給ひけん、この君すでに（既）水にむせび（咽）て消えんとし給ふを、海龜（甲）がしにてありけるか（主）うにやどり（宿）て、姫君を甲の上に置（置）給ひぬ。龜泪を流して、瀨田のはし（橋）の上におきて、我は是君の母の魂なり。朝夕は影の身にそひて守つるに、いかなるひまか（障）ありけん、か樣にせらるゝこそ口惜けれ。さりながら今は死なれぬ命ばし（榛）かまひて死なんと思ひ給ふなよ。左樣にておはしまさば、よきやうもありなんとて、久くなりぬ（暇）いとま申てとて、海へ入り給ひぬ。悲しなんどはいふばかりなし。御體こそあらねども、母上の御魂ときゝ（聞）給ふに御名殘惜しくて、又海へも入

たく思せども、母上の仰られつる事なれば、おはしつる方をのみまぼりて、たゞ橋の上にさめ泣〳〵となき給へる。父君は唯今かくなりぬとは、よも知り給はじと思ふにも、いとゞせきかね堰給へるは泪なり。長月十日あまりの事なれば、初雁の空に鳴渡るも心ぼそくて、故郷へことづ言附けせまほしとかなしくて、悲

〔一〕わが住みし都へゆかばかりがれよこのありさまを物がたりせよ〔美人くらべ、上〕

初雁よ都へゆ行かば足乳男をに　我有様の物語がたりせよ

御心もうつゝならねば、思はく方もなし。夜も明けれども行べき方なくて、海の上をのみつく〳〵とまぼりて、おなじところに立給ひぬる程に、はりこし張輿に乗たる人、馬乗十四五騎ばかりぐ具して、御うちを出されて、知る人は候はず、迷ひありく歩といひもあへず、顔に袖を引きあてゝなき泣給へば、知らねども人の様めでたくおはするを見るに、そゞろにいとほしくあはれにて、尼御

〔二〕此こしはしとゝめよとてかきすゑたり〔前〕

〔三〕しり人〔前〕

前も袖をぞしぼりける。絞

さてこしより出て見給へば、夜の程にあわてゝきりたりと思しくて、髪はみじかく長くあれど奥周章切短も、かゝりうつくしく、美なきあかみたる顔ばせ、やごとなくいつくしき人のこゝに捨られてお泣赤はしけりとて、見奉るぞいとほしく侍て、いざゝせ給へ。この尼は信濃のふせ屋伏と申ところに住者にて候が、熊野へ参りて下向し候なり。子も一人も候はねば、然るべき権現のさづけ給ふ授子にておはするにこそとて、長持より練貫ぬきの二衣取ぎぬとり出し、せいがうの雲好ものも著せ奉りて、御奥こしにのせ参らせて、尼御前は馬に乗りて、やう〳〵行程に、姫君こゝをいづくといふところぞと問ひ給へば、鏡の山と申せば、姫君、都にては東路なんどゝこそきゝつるに、今はまのあ間たりに見る事よと、あはれに心ぼそくて思召つゞけて、かくなん纏

近江なる鏡の山はくもらねど　戀しき人の影はうつらず

と姫君詠給へば、尼御前もかくなん

近江なる鏡の山に都なる　人の影をばいかゞうつさん

さてそこ迄おはしなぐさみぬ。不破の関といふところにおはし給へり。都にて別れし日数も積慰澄

りければ、數ふるも悲しくてさどろみ給はぬに、宿の軒より蟲の音聲々心すみければ、姫君か

くなん

〔一〕に〔前〕

〔二〕たは〔前〕

〔三〕うつゝみし〔美人くらべ、上〕

〔四〕近くなるうみとほければ都なる人の妻はいかでうつらむ〔同〕

(一)上句 秋の野に蟲のこゑ〳〵さへづれば (同)

(二)同 おなじ音に鳴蟲の音も物憂くて 心とまらぬ不破の關かな

か様に道のとまりせき〳〵にあはれをまし、歌をよみ、心をなぐさめおはする程に、信濃のふせ屋にも著給ひぬ。うちの人々待參らせて、様々によろこびあへり。姫君うちへ入り見給へば、錦のちやうの前に唐の屏風たてたり。紫檀のけうそくなんどあり。琵琶二面、しやうの琴もあり。金物したる二階に、古今・萬葉・伊勢物語なんどのさうし餘多ありけり。さるべき人のさまかなと思ひつゝ見給ふに、明暮は、いざゝせ給へ。年頃の尼がもと見せ參らせ候はんとて、先ひんがしを見れば、梅・櫻・糸柳花なんどたのみあり。南には池ほり中島をつき、松に藤かゝりて山時鳥まち顔なるけしき、汀の山吹さき亂れて見處あり。西には一間四面の持佛堂あり。その前に桔梗・なでし子・女郎花、あづさへ・しもつけ・萩の花・白菊のなどの花も、皆まがきのうちに、殘らず、大方四方に四季の木草うえたり。中にも持佛堂けしきこそ、まことにめで度、光かゞやく心ちする。唯常はしやうじんをし、御前に參て御經をよみ給ひつゝ、母の後世を祈り、我もとく向へ給へと申給ふぞあはれなる。

さて故郷には父君うちより出給ぬ。御うちの人々聲も惜しまずなくに、いかにとの給へば、にほひの君を俄に、てんぐにてかありけん、ものがとり奉りて候なりとて、北の方ふしまろびなく〳〵の給へば、聞もあへず、いかに何とて、といひもあへすたをれふしたえ入ぬ。木たかき、

給脱か

(一)あら〔前〕
(二)給そなんと〔前〕
(三)しらさりけるよ 〔前〕
(四)けしき〔前〕 氣色
(五)姫君の御方へ〔前〕

(一)悲 ありかなしや。いかにかくは又うき目をば見せ給ふなんど申程に、やゝ暫らくありてたゞしげなる御氣色にて、さればこそ昨日の晝、見しをかぎりとけるよ。いつもといひながら、御顔の惜しき、殊更うつくしくひかりかゞやくけしきにて、天人もかくばかりあるらんと、目おどろくばかりにありし物、又も見ざらん悲しさよと、くどきたてなき給ふも、例すくなくぞ覺ゆる。さてにほひの君の方へ入て見給へば、かたはらに琴琵琶あれども主はなし。いとゞ御なげきぞ深かりける。四方に向ひて、南無十方三世の神佛、示現納受たれ給ひて、こゝに住しにほひの君安穩にて都へ歸りつゝ、今一度かはらぬ姿を見給ふにも、泪せきあへずして、かくなん

何方へ我なでし子は散りしとも 花は見つらん我にをしへよ

やがて山寺にて御いのりはじめさせ給ひけり。御身づからも八幡に參給ひて、日本第一の社壇、王城の鎭守、八幡大菩薩、願はくはこのにほひの君、かはらぬ體にて都へ歸り給へと申給ふよりして、西宮なんどに祈るき給へば、神もいかでか納受し給はざらんと、あはれにぞ見え給ふ。

かよひ給ひし少將、かくともしらで御方へおはしければ、木たかき參て、まづ言葉は出さで、袖を顔に押あてゝ、少將あやしと思ふに、木たかき申やう、北の御方なんど一ところにおはし

て琴ひかせ給ひしに、俄におそろしげなる武士せんざいの中より三人はしり出て、取参らせて出しに、やがてつゞきて走り出て候しかども甲斐なし、と申てなきけり。少将うち聞に、心もと、昔人返す〳〵御遺言ありし物を、仰おかずとても、うまれさせ給ひしよりいだきそだて参らせて今日迄は候ひつるに、若き御身のいかなる目をか御覧ずらんとて、又なくより外の事ぞなき。身若く候はねば、神佛に籠りて祈り申事もかなひ候はぬ事の悲しさよと申せば、少将殿は物もの給はず、きちやうの内に入給ひて見給へば、御ふすまも枕もさながらあり。御装束もとき給はで、ひきかづきふし給ひて、なくより外の事ぞなき。空言をもいひつけし人なれば、北の方のし業にてもあるらんとは思せども、流石にいかゞし給はん。又かくてもあるべきならねば、我御方に歸らんと思して、おき上り給ひて御覧ずれば、琴の近くありけるを、引きよせてかきならして見給へば、あはれ泪おさへ難くて、その時かくなん

ひきならす琴の音ばかり昔にて　泪の色もかはりぬるかな

とのもといふ古きいろ好をよびて聞ゆるやう、いかにかくながめおはするを北の方御覧じて、もしてこの少将をあひしの君に逢はせばやと思ふなり。いかゞせんとの給へば、とのも、あなゆゝしのあだ〳〵しさよと思へども、打頼みの給へば、あかぬ名殘をとぶらひ奉りてこそとて、

一字缺、前田家本により補ふ

ひきならす琴の音きけばもろともにたもとの露をはらひこそせれ〔美人くらべ、下〕

時しもあれ秋しもつらき別して　いかにたもとの露けかるらん

信濃なるそのはらからもある物を　思ひかなしき契なるらん

と下へ書きたる料紙にかきて、きちかきといふはした物を、色めかせたるさまにでたゝせて奉りければ、少将も心づきなしと思せども、御返事し給はざらんも流石にて、かくなん

さらぬだに露けき秋に別して　とふ人さへにうらめしきかな

捨筆にあら〳〵と書き給へり。北の方見給ひてそゞろに腹をたてゝ、あら心うや。姫君の果報なさよ。我めになき見えそなんどの給へば、罪なき人をと、いとほしく覚えけり。

かくしつゝ父君は過にしちもくに三位の中將になり給ひて、やがて中納言になり給ひしかども、このなげきに御よろこびとも思ひ給はず。やがて思召たちて、おほやけに暇申て出家し給ひぬ。姫君の爲にとて、高野に籠りておこなひ給ひけり。人々あはれとぶらひ奉り給、おほやけも、ことにふれて思食忘るゝ事なくなげかせ給ひ、御とぶらひの御ふみあり。はし書にかくなん

この思ひよそに聞だに哀れなり　身の上いかに悲しかるらん

とうのべんを勅使にて、高野へたてられけり。中納言入道どのかたじけなくて、墨染の袖をしぼりけるかしこまりて、かくなん

墨染になる泣なげくこの思ひ　かたじけなさに我もしぬべし

時しもあれ秋やは人の別るべきあるなれどだに戀しきものを　忠岑（古今一六、哀傷）

まちかきか

一字缺、前田家本により補ふ

おとにきく言の葉だにもあはれなりましてみのうへさこそあるらめ〔美人くらべ、上〕

勅使立歸りてかくと申せば、御返事御覧じて哀れにぞ思しける。
さて少將はありし我御所にても、ひきかづき臥ふし給ひぬ。御心地例ならず見えさせ給ふとて、
父母大に騒さわぎ給ひて、かた〴〵に御祈はじめ給ふ程に、やう〳〵よろしき樣に見え奉らんと
もてなし給ふも、覺えずあぢきなくて、このにほひの君の行方知らずば、出家の身となりて山
林にもとぢこもり、それに猶忘れずば、いきて甲斐なしと思しつゞくる行末ぞこゝろぼそき。
あまりの御事にや、九月十日あまりの御事なるに、住吉に百日こもらんと志して、思食立て參
り給ひぬ。一日一夜に三千三百三十度の拜み奉りて、願はくは藤原のともよりがふさいまだい
きて世にあらば、ありかしらせ給へ。その命つきて世になくば、ともよりが命をめして、たと
いちひろの底なりとも、同すみ家へ導き給へと、五體を地になげて禮拜し給ふ。聞奉る人袖を
しぼらぬはなし。神も納受し給ひぬらんとぞおぼゆる。さて七日といふ曉の夢想に、白髪なる
翁、わ君が思ひ人は、是より東なるあづまの方をたづねよといふ、いといみじくけ高き御聲に
て仰せらるゝと思ふに、現とも覺えず。是はひとへに神の敎なんめりとたのもしくて、さては
いまだ世にあると、うれしくぞ覺ゆる。さてあづまの方をたづねんと思ひて、やがて下向し給
ふ。御所におはして、我御方にふし給ふやうにて、夜のうちに唯ひとり出て、日頃かたらひ置
給へる山伏の清水に住む處へおはして、たづぬべき事ありて、暫やつれんと思ふなり。日比の

(一) 夫妻 或は 嬬妻 なるべし
(二) ちいろそこ〔前〕
(三) 尋みよ〔前〕

(一) 本山派の山伏の用ゐる一種の裝束
(二) 笛之巻 にも ふちおひとつて かたにかけ とあり 三九九頁參照
(三) 逢坂の關にも心とめられずあはれ戀路のいそがしの身や 〔美人くらべ、下〕
(四) なか〔前〕 長歌か

契わすれ給はずば、御身の裝束かし給へと仰らるれば、あやしと思ひながら柿の衣・ゆひ袈裟
なんど參らせければ、たぶさをときて我裝束にぬぎかへて、さばかりにうつくしき御足に、こ
んのはゞき・わらぐつはき給ひつゝ、ふち笈肩にかけて出立給ひけり。御けしきも山伏も、た
がひに袖をしぼらせ給ひけり。
比は神無月の始なれば、時雨に曇る旅の空、四方の山邊もかき曇り、物思はざらんだにも心
ぼそかるべきに、いまだならはぬあづま路、今日をはじめて出給ふ御心のうち、推量をしはかられ
てあはれなり。相坂を越え給ふとて、かくなん
あふ坂の關に心もとゞまらず まだ見ぬ道のいそぎのみして
逢
念
歌
さて信濃の國ふせ屋は、にほひの君明暮なき沈み給ふを、尼御前こゝろ苦るしくなげきつゝ、
世に口をかしき女房・尼達近づけて昔物語など、晝はわかき侍に鞠蹴させて見せ奉まつる。やう
〳〵なぐさめ給ふもあはれなり。なぐさむよしにもてなし給ふ事よろこびあへり。御心中は忘
るゝひまもなく、父の御事、少將殿の面影、御めのとの戀しさ、數の女房達思召つゞくるに、
涙のかわくひまもなし。唯都の方のみながめ給ひけり。身に思ひのなきにだに、夕まぐれは物
うきに、峯のあらしのはげしくて、木末さびしくなり渡り、事にふれていとゞ思ひぞまさりけ
る。ありし事ども忘れやらで、御筆すさみになる歌

(一)空擡曇り暗雨して峯の木枯しげくしくなりて梢淋しくなりはてて錦と見えし紅葉ばも思ひの中に散り失せて訪ふ人も絶き悲しさに思ひ纏けて清水の……（美人くらべ、下）

(二)も〔同〕

(三)獨り〔同〕

(四)見るぞ憂き〔同〕

(五)浦〔同〕

(六)怨みぬに〔同〕

(七)で〔同〕

(八)落つる〔同〕

(九)來り〔同〕

(一〇)悲〔同〕

(一一)なみに〔同〕

(一二)身に〔同〕

(一三)し〔同〕

(一四)こがれ……ふかくして——如何に心なつくし船漕がれ行くらん軽蟹の糸縒り雖き事故に今官の契深くこそ〔同〕

(一五)一字缺、前田家本によりて補ふ

(一六)なとこと〔前〕

(一七)契りて〔美下〕

(一八)無き面影も忘られず〔同〕焦れ居〔同〕

(一)清水の
近江なる
(四)かくるさへ
東路の
諸共に
(一)寝
旅ねして
(一〇)戀しけれ
垂乳男の
さき蟹の
〔マヽ〕こ
ふかくして
(一九)かけられて
(二二)鈴虫の
(二九)遠
とをくなる

なんど、手すさびに書き給へるを、尼御前見給ひつゝ、さればいかさま戀する人にておはしけりと思ひて、見奉りしよりそゞろにいとほしく思ひ奏らせて、今日迄はおろかならずこそ思ひ

流れてすまぬ
海の底には
(二)
大津の濱の
(五)
不破の關にも
流れきて
(九)
都の方を
(一一)夜
浪のよるひる
(一二)儚
はかなく我を
(糸)
あらいとほしや
(一七)常
つねに忍びて
(二〇)
思ひやれども
(二四)(二九)(三二)
うき音を鳴
(三〇)中
水のなかには

物ゆへに
捨られて
(六)
浦なれど
(七)留
とゞまらず
信濃なる
はる〳〵と
(二三)立
たちそひて
(二五)失
うしなひて
(二六)鳴
是ならす
來し人の
(二八)
(二一)
池水の
白糸の
(三一)
濁あひけん

相坂越えて
(三)憂
捨られて
うきめを人に
甲斐もなくして
(八)
露泪と
伏
獨ふせ屋に
思ひやるこそ
(一三)
哀れといひて
(一四)(一五)(織)
こがれおりけん
(一六)(小琴)
風のをこと
一
心ひとつに
(二二)
行かたもなき
(二七)(二八)
繰(來)くるべき人は
(三二)
身こそつらけれ

(一〇)遣方も無き〔同〕

(一一)に〔同〕

(一二)汀に遊ぶ〔同〕

(一三)鴛鴦〔同〕

(一四)に〔同〕

(一五)なきて〔前〕

(一六)いたづらに杉の板間の明け來れば思ひ亂れて〔美下〕

(一七)更に〔同〕

(一八)洛〔同〕

(一九)なる〔同〕

(二〇)ナシ〔同〕

(二一)澄むことなき身の物憂さよ〔同〕

(本)何は に掛く人事自然一切の事の意

奉れ。今は思さん事、ありのまゝにきこゑてなぐさみ給ひて、〔マヽ〕この尼もそのかみあかぬ別れをして、多くの年月送り、老少不定の堺を知りなし後は、か樣にさまをかへて、知るもしらぬも、一佛淨土のゑんとうまれんと祈り侍るなり。かゝる尼の身として、花に心をとゞめ、月をながめ、琴琵琶を彈き、か樣のあそびを捨候はぬも、人のそしり候らん。是も思へば御法なり。朝にひらくる花の夕の風に散るを見ても、無常のあはれを催す。かゝれば津の國の難波の事、皆御法の基と思ひて過しあへり。今は我身の殘り少なくなり侍るこそ、御身の爲にもいとかなしけれ。尼が候はざらんあと迄、かまへて是におはして、後世とぶらひてと、行末までこまゞゝと、泪を流し給ひつゝ聞ゆるやう、とりわけ戀しと思ふとの給ふに、にほひの君あはれと思して、泪を流し給ひつゝ聞ゆるやう、とりわけ戀しと思ふ物も候はず。唯いかなる罪の報にて、父母にもそひ奉らず、乳母をも捨はてゝ、都をよそに過別候らんと、思ひ候ばかりなり。若又御跡までもながらへば、墨染にさまをかへて、訪ひ奉るべしとの給へば、あなゆゝし。たゞひなき御さまを、ゆめ〳〵さる御事あるまじく候なりなんど、後の世の事まで申あへり。

かくしつゝ都には、少將うしなひ奉りてさわぎたづね給へり。物思ふていにてあやしく見えつる物、さまやかへつらんとなげき給ふ。うちにも聞しめして、ようせうより近く御覽じなれさせ給ひしかば、いみじくあはれに覺しけり。中納言出家したるだにもあるに、是さへうせはて

なば、折ふしの御會も興あるべからずとて、御なげきあるもかたじけなくぞ覺ゆる。
(一)前り〔渡〕
さて少將は大井のわたりまで迷ひおはしたる。便船こふて渡り給ふとて、
戀渡る我こそあらめ水の上に 行船さへもこがれけるかな〔清(集)〕
となが め給へば、數多あまた乗たる中に、年六十ばかりなる人この歌詠じて、
(二)乗りて行人に思ひのあればこそ(火)水の上にて船もこがるれ〔清(集)〕
(三)宿二樹下一、汲二一河流一、一夜同宿一日夫妻(中略)皆是、先世宿緣也(說法妙眼論應身品)
(四)供御物か、或はくだものの誤か
さてきしに船よせており行に、この翁少將に物語しよりて、そもそれさまは、いづくへ心ざして下り給ふぞと申せば、山伏の少將、いと思ひ定めたる處も候はず。いまだ奥の修行をし候はぬ程に、信濃善光寺をも拜み、又きこゆる名所なれば、みちの國たがのがうしのぶ里なんど見度候との給へば、さてはさてはいみじき道づれかな。一樹のかげにやどり、一河のながれを結ぶも、この世一の契ならず。今日よりは淺からずつれたてまつらん、といひて行程に、日くれぬ。今宵は翁がしりたる所にとゞまらせ給へとて、ぐして入奉つる。三間ばかりなる家に入奉り、よしあるさまの住居なり。ませがきやさしくしたるに、白菊なんどうつろひて、さま〴〵の花あり。内には高麗べりのたゝみしきならべて、大方たゞ人のすみかとも見えず。十四五ばかりなる上童に紅梅の五あこめ・紅のもきせて、さるべきくこものもちて參て、金の御盃・銀御うしに酒入て強まゐらせけり。さてあけぬれば出給ふに、内に入て、人のいざなひによりて、

東國あづまの方へ下り侍るなり。疾罷上とくまかりのぼり候はんとて、この山伏とつれてくだりけり。山伏の少將は、道すがら心をすましてながめをのみし給へば、翁申やう、いかにも戀する人と見たてまつる。今は何をかくし給ふぞ。ありのまゝに語たまへと申せば、さては人のあやめてとふ迄なりぬとはづかしく思せども、法師の身として行に違たる事は恥かしく候へども、いづみの禪師と申人のうちに、(一)(ママ)さかはぬこそといひしびでう(五)(未女)を忍て通ひし程に、いかなる事にかありけん、このびでうしうのかんだうをかうぶりて、あづまの方へ行けるとかやほのかに承て、たづね行き候なりとの給へば、翁涙をながし、あはれ我むかしのありさまに違ひ候はぬものかな。

さらばいづくまでも御供申さんとて、
もろ共にたづねゆかん戀のみち 思ひしりぬる程にこそあれ
又少將の歌に
ふちは瀨になる世なりとも例なき この言の葉をいつか忘れん
さて千本の松原過ぬ。美濃の國ふるわたりといふ處にてとゞまらせ給ふ。やう〳〵日ざしくれてとまかはの宿に著ぬ。遠江の國はしもとへおはしけり。宿のありさまを御覽ずるに、ひんがしは入江さし入て、あじろにむすべるを待つ人いたり。南にはまん〳〵たる海上に、釣する舟のこがれ行もやすからず見ゆ。西は山ふかくしてかすかなり。北は琴を調ぶる松風心すごく、

(一)前田家本、きやうと 假名あり
(二)和泉の前司なるべし
(三)せんし〔禪〕
(四)人名なるべし
(五)びじやう(非上)のことなるべし。武家の内々にて食物など調ふる者。なかゐ、未女、などともいふ
(六)て 脫か
(七)駿河國沼津附近
(八)尾張國舊渡か
(九)未詳

浪の音うちそひて、何につけてもかたゝ〳〵いみじくおもしろき名所なり。かゝるついでなくては、いかで見んとぞ思しける。

(一)浪の音峯の松風打そひて　心とゞまるはしもあるかな

宿の人々酒を呑みて、歌をうたひ、琴・琵琶を弾くところもあり、おもしろく覚ゆ。十二月の末なれば、それにて年とり給ひけり。所がらなれば、初春のけしきもことに物あはれに、(二)御心すみて、いづくをさすともなければ暫おはして、二月の十日比に又立出て、あづまの方へたどりおはするに、春風やはらかに吹て、よろづ物ごゝろばそく思して、是はいづくへ行らんとの給へば、この翁申なぐさめ参らせいはく、年よりぬるさんげの物語申さんとて、若かりしその(三)往時かみあかぬ戀をして、七年まで心をつくし候て、四季のながめに心をすまし、身は影などのやうになりはて、人のさまにもあらざりしかども、先世の報は七年まで多くの年月を送り候ひしが、御房はいまだ三年にだにもなり給はぬに、いたくあぢきなげにおはするよ。契あらば逢瀬もありぬべし。心づよく思せかしと申せば、誠に心みじかきには候はず。いづくの浦にいかなる有様にてかおはすらんと思ひやれば、いとあはれに候なり、などいひ行程に、(六)宇津の山邊のうつゝにも夢にも人にあはねども、(七)高たかはしも過ぎてきゝ人とをりぬ。(八)先さき〳〵のしゆく〳〵ながめおはして、(九)かんかうの宿にもとまり給へるに、いつならひ給はぬ御身に、旅の日數も積

(一)波のおと峯の松風身にしみて心のとまるはしもとのやど〔美人くらべ下〕

(二)一字缺、前田家本によりて補ふ

(三)若候し〔前〕

(四)めぐるあふせ〔前〕

(五)おほしめせかし〔前〕

(六)駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり（伊勢物語九段）

(七)駿河國の地名

(八)きく〳〵〔前〕未詳

(九)未詳

りつゝ、心ばそく思して、夜ふくるまで御經よみ給ふ。都の方にむかひて、南無住吉大明神、をしへ給ひし夢想むなしからず、にほひの君にあはせ給へと祈念して、よりふし給へり。

少將の御夢に、かくいひかなしむにほひの君の、白き御衣に柳の一重・紅の袴きて、いづくともしらぬ花園に、つく〴〵とうらみ顔にてながめ給ふ。

都にもかはらぬ是も春ながらなどか契し花人もなき

とて立給へり所へおはして、あなゆゝしゝ。いかなる所におはして、かく物をば思はせ給ふぞと口説くどき給へば、

足引の山がくれにてとふ人もなき戀をしてひとりふせやに

との給ふと思すに、驚おどろき給ひぬ。さむるうつゝもうらめしくて、

逢ふと見し夢にもやがてまぎれなで　さむる現の恨しき哉

この翁にかくと語り給へば、まさしかるべき御夢かな。ふせやといふ所にぞおはしますらんといひて、信濃の國をたづね御らんせよと申せば、さもあるべしとて、夜も明はてぬにいそぎ立給ふ。

伏屋

ふせやにも姫君の御夢に、少將の日比たづねわび給へるに、思はぬ外にあひみて、うれしげにてかくなん

(一)都にてこひしき春はきたれどもわれに見馴れし花人ぞなき〔美人くらべ下〕

(二)し〔美人くらべ下〕

(三)ぞ悲しき〔同〕

(四)る〔同〕

(五)うれしくてさめぬれば〔同〕

(六)逢はぬ〔同〕なき人の姿をゆめに見えつればさむるうつゝのうらめしきかな〔同、姫君の詠、なき人とは母上をいふ〕

かくとだに君は知らじな東路を　いかばかりかはたづねわびつる
とよみ給へると御覧じて、やがて夢さめぬ。今さら又別らるゝ心地して、見つる夢もうらめしながら

いかにせん櫻は春の夢ながら　見る程もなくさむるつらさよ

とよみ給ひぬ。さて少將信濃の國へ今はこゝろざしておはする程に、道をふみ違へて甲斐の國へ過ぎ給ひぬ。あまりに口をしくて、

かきくらす戀路に迷ふ身にしあれば　手にさはれどもかひやなからん

翁もかくなん

さのみやは戀路の闇に迷ふべき　思ひかひある時もありなん

かくてたづね歸りつゝ、信濃のふせや近くおはしぬ。この翁物思ふ姿にて淨衣の袖しぼり給へば、少將あやしく思すに、この翁の給ふやう、そも〳〵われをば誰とか思ふ。日本第一の明神本朝の守護神住吉の明神なり。我むかし凡夫なりし時、淺からざりし戀をして過ぬ。神と現じて末代の後まで人の願ひをみてんと、ちかひきつるなり。中にも戀する人をあはれむこゝろざしふかく、なんぢにかぎらず道びく事多し。殊更なんぢはあはれに思ひつれば、かく現じて見えつるなり。志ふかくたづねきつるふさいは、あのむねかどの内にあり。さても日比の名殘こ

そをしけれとて、かくなん

たづねわぶる人に我さへひかれきて　歸る名殘の袖はぬれけり

とかくいひつゝ、そのむねかどのきわまでぐし奉りて、かくなん

君が日比心をつくしたづねつる　人ぞ信濃のこゝのふせやよ

さてかきくらしうせ給ひぬ。さればこそたゞ人凡夫のきやうがいとも思はざりつる物を。誠や東の方をたづね見よと、の給ひし夢のおも影に違はせ給はぬ御體、今ぞ思ひあはせられて、かたじけなさに涙落そひつゝ、住吉のをしへならでは、いかでか戀しき人にたづね逢ふべきといひて、都の方を三度拜み給ひけり。さてわたされて、なめてならぬさまなり。日暮ければ、忍やかに立入て、物のけしきを見給ふに、南面に琴の音のほのかに聞えけるを、よく〳〵聞給へば、戀しき人の爪音と聞なして、むね打さわぎて、まがきに傳ひよりて聞給へば、その人の聲にて、

夏引の糸よりはへて來し人の　思ひも今は絶えやしぬらん

とて、いみじくなくけしきなり。聞に絶え入こゝちして、

夏引の糸こそはへてはるゞゝと　たづねて來つる思ひ絶えねば

との給ふ御聲、姫君そらに聞給ひて、むね打さわぎて見給へば、せんざいにまぎれて山伏立た

---

*一字皆わかるゝ（前）

（一）名こり袖は（前）

（二）に（前）

（三）夏びきの絲ほどだにもとふ人のなきかなしみをいかゞ忘れん（美人くらべ、下）

（四）なつびきのいとあはれなる戀をしてわれこそ來ては訪はんとはする（同）

（五）名殘の袖はぬれけり（濡）

（六）たづねつる　人ぞ信濃のこゝのふせやよ（伏屋）

（七）夏引の糸よりはへて來し人の　思ひも今は絶えやしぬらん

（八）夏引の糸こそはへてはるゞゝと　たづねて來つる思ひ絶えねば

り。春のよの朧なる月影に、まぎれなく少将と見給ふ。(我)(紛)(怖)おそろしながら、この人のさまにいか(様)にしてまねぶならんと思へども、(學)(縦)たとい鬼神なりとも、少将にてましさばとられんと、日比(寄)より思ひし事なれば、近う立よりて、あなゆゝし。いかで知り給ひけるぞやとて、

(一)そめて〔美人くらべ、下〕
(二)下句
冬にかゝりてきたるなりけり〔同〕

都をばいつから衣立出て(唐)(裁)(一)(三)行めぐりつゝ春きぬるらん(来(著))(内)

さて姫君うちへ入給ひて、都にて知りて候ひし山伏のたづねきて候が、いかゞせんとの給へば、(驚)(急)(尋)(来)大におどろき、いそぎ立出て内へ入奉りけり。少将は柿の衣にて袴なんどもいたくやつれ給へ(並)(紛)(宣)(童)ども、なめての人にはまがふべくもましまさず。尼御前參りてさま〴〵にもてなしまゐらせけ(参)(利)(淺)り。少将聞ゆるやう、この君こまかに御物語候らん。はかなくより見そめ奉りて後、あさから(細)(停)ず候ひしを、いかなる事や候ひけん、物にとられ給ひぬと都にはひろうす。心ながく物詣をし(奪)(披露)(長)候て、住吉の示現にまかせて、是迄たづねはべりつる。明神の現じて導き給へる事、始より終(尋)(侍)まできくどき語給ふを、尼御前、さればこそ天上の公達にておはしけると思ひし。いとほし(日說)(擬)(殿)の御ありさまやとて、ねり色の二重ぎぬの袖しぼりけり。さて姫君御袖しぼりかねて、かくなん(有)(樣)(衣)(絞)(濡)(添)

(三)山伏の苔の衣を見るからに　いとゞぬれそふ我たもとかな(秋)

さて御湯ひかせまゐらせては、いよ〳〵うつくしくなり給ひぬ。雲客・卿相の御ありさまと見え(引)(參)(美)(有)(樣)給ひし。やせくろみ給へども、たゞ人にはまがふべくもなし。御はん參らする女房達上わらは(病)(黑)(紛)(飯)(童)

めやすき程にてもてなし奉る。さて少将姫君御物語よもすがらさせ給ひしに、枕もうきぬべし。(終)(夜)(一)(浮)

(一)う〔前〕
(二)行(ゆく　とぶ假名あり)〔前〕

少将きこゆるやう、はる〴〵の道をたれゆへにたづね來つると思しめす。いかばかりかは心つ(聞)(誰)(故)(尋)(盡)くして思ひきつらん。我思ふやうには思しめさぬか。片思こそとて御涙せきあへず。姫君も片(來)(語)(合)思のよし終夜かたりあへり。さて明ぬれば、尼御前のもとよりはなだの狩衣・紫の指貫・紅の袴・(計)(標)冠取添かぶりとりそへて參らせけり。少将は思の外にかゝる物さへもち給ふよと、めづらしく見給ふ。(持)(珍)旅の御裝束ぬぎかへて、冠替かぶりめし給へば、又ありし御體なり。廿二三の比なれば、花やかに(脫)(召)美うつくしく見え給ふ。尼御前はたゞその事ともなく涙をぞ流されける。さてこゝろのうちに思(心)ひけるは、さればこそたゞ人とも思はざりしが、若殿にて思して、それにつけてもはる〴〵の(遙)(志)道思しめし立おはしけるよと、よく〳〵この君にこゝろざし深くおはしまししけり。姫君かやう(現)に見奉るに、うつゝならずおはして、かく

(四)(五)逢ひ見ては
〔美人くらべ、下(少将の詠)〕
(六)下句
何の思ひに勘へらすらん〔同〕

逢はざらん時こそあらめはかなくも(儚)(急)今日さへ袖を絞ぬる哉

さて三日ばかりありて、信濃の御目代の方へ御ふみつかはされけり。思ひよらず是に候が、いそ(文)(遣)(上)ぎ申合せ度事候。とく〳〵、と仰られけり。信濃の守ふみ給はりて見るに、うは書に御判あり。(文)(賜)少将殿の御判と見奉りて、おどろき給ひけり。ひらき見て、畏て、承はりぬと御返事申、馬ど(驚)(披)(屋形)(遙)(下)もそろへて鞍おかせ、御よろこび申にひかせて參りけり。御やかたはるかより馬よりおりけり。(置)(悦)(引)

人々いかに〳〵と思ひあへり。さてみすあげて、ゑんに近くめして、物仰せらるゝを見たてまつる人々、いとゞおそれをなして敬たてまつる。是にくだりて候が、京へとく〳〵のぼり度思ふなり。國の人催して、とく〳〵のぼらるべしと仰せければ、かしこまつて申。さてもうせさせ給ひて、中納言・北の御方あさましくさわぎなげかせ給ひて、院中も誠に御なげきの事にて候に、か様におはしまし候事、返す〳〵めで度よろこびにて候とて罷出けり。

さて京へのぼらせ給ふに、女房三十人、はしたものその數あり。尼御前も御名殘をしみて御供に參り給ふ。信濃の守いそぎ京へこの由申ければ、父母よろこび給ひて、いそぎ御迎に參人々、院中より五百人とぞ聞えし。父君のもとより參る人々その數をしらず。

さて京へのぼらせ給ふに、姫君うかりし事思ひつゞけ給ふ中に、母君の御面影唯今のやうなる心地して、あはれにぞ思しける。少將はありし事どもこまかに聞給ひしかば、さこそありけめと、涙そゞろに落給ふ。都には、あせちの中納言殿少將をまちつけ給ひて、よろこび給ふ事かぎりなし。姫君はいつしか父君の事思ひ出られて、かくともいはまほしく思せども、暫事をもとりしづめてとて、少將うちへまゐり給ひぬ。おほやけめづらしく思召、よろこばせ給ひて、やがて中將になして、三位し給ふ。さていそぎ高野へ姫君の御使まゐらせ給へば、中納言入道殿いそぎ下り給ひぬ。父姫君を御覽じて、あまりのうれしさに、目もくるゝ心地しておはしける。

さてはじめよりの事どもかきくどきの給ふ。いかばかりかはあり難く思ひ奉りしに、我身にもかへまく侍しものを、いづちともなくうせさせ給ひしのち、か様の體になりて候との給ひて、されども今まで命ながらへて見候へ參らせぬれば、うれしさなにゝたとへん方なし。さてとゞまりし御めのと、木たかきよりはじめて、數の女房・はしたもの是を見參らせて、うれしともよの常ならず、皆參りあつまりて御をんども多く給はりけり。さてふせ屋の尼御前は、信濃の國をあらそひなく給はりて、國司尼御前とぞいはれける。

かのまゝ母御前は親子籠に入らるゝ。にほひの君は唯我にゆるせとの給へども、神佛のおぼしめさん事もあり、罪あるものに罪をあたへねば、かへりて中々まさる事の出くるなりとて、終に獄に入れられけり。さて、つらからざりしものなりとて、あいしの君ばかりをば、にほひの君のあながちにの給ふ程にとてゆるしけり。都の人々あり難き事に申あひけり。

三位の中將は大納言になりて、やがて大臣にならせ給ふ。承る人々、かゝる事や候とて、語り傳へあへり。さても、うせはて給ひて出き給へるよろこび思召つもりて、大臣殿・北の政所ともに住吉へ御願はたしに參り給ふ。儀式申つくし難し。さま〴〵の寶物ども參らせ給ひけり。あせちの中納言殿も、左大臣殿出き給ひ、御よろこびの御願どもかた〴〵所々にはたし給ふ。さて左大臣殿は都へ歸り給ひて、程もなく若君一人・姫君一人出き給ひぬ。程もなく生ひ立給へ

ば、中將になり給ふ。姫君は春宮の中宮とぞいはれさせ給ふ。春宮位につかせ給ひしかば、姫君も后の宮とて、いまだ御年十七にてつき給ふ。三位の中將いよ〳〵あがりて、右大將とぞ申ける。左大臣どの關白の宣旨をかうぶり給ふ。御年四十ばかりの御けしきもの〳〵しくおはすると、人々あふぎたてまつる事十四年なりつれど、あだなる事思しめさず、北の政所の御心いよ〳〵あく方なくおはす。安穩にして都へ歸り給ふこそあらめ、おなじ事とはいひながら、かやうにいみじくおはする事、かたがたの御祈によりてこそとおぼゆるなり。さて關白後生には、觀音とぞなり給ふとうけ給はる。大方昔も今も、住吉の明神のねがひをみて給ふ事うたがひなし。又罪なからんものに夢にはらぐろあるべからず。現世後世あしき事なり。か樣の事いたづらになさんよりはとて、筆にまかせて書きとめ置なり。

(一) 一字缺、前田家本によりて補ふ
(二) 生(しやう と振假名あり)〔前〕

かくれざと

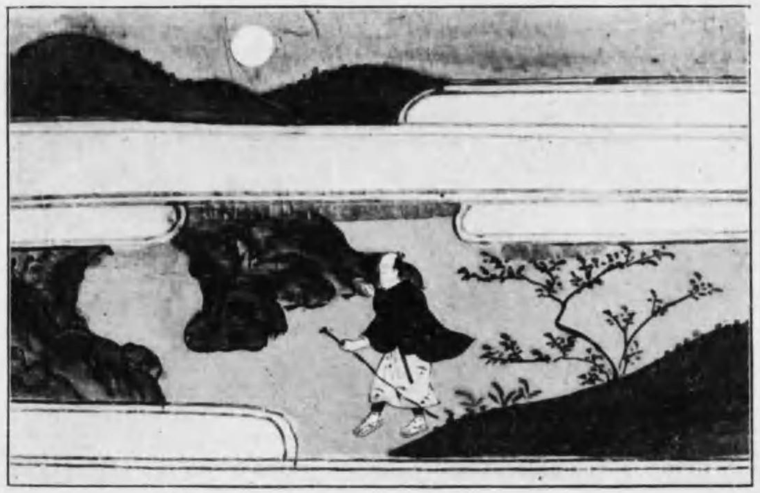
上

秋きのたそがれどきは、空そらならでも心ぼそからぬかは。風かぜ尾吹招折すごくお花ふきまねくおりふし、よに蟲聲間り行むしのこゑ〳〵もあはれにきゝなし侍べる。今宵におふこよひは秋も中半、夜半よもなかば、(一)新しん月のいろまどかにてらして、二千里の外までくまもなし。照故人こじんの心もきかまほしとおもふより、(二)忍もぎがと立出ぼそをたちいで、そこともしらずたどりゆく。都みや東賀茂このひがしかもの河原かわらにさしかゝり、水のながれいとふかきを、腰半こしなかまでかゝげて、さ夜ごとに毎

(一) 三五夜中新月色 二千里外故人心 居易(唐詩集上、八月十五夜、附、月)(白氏文集一四、八月十五日夜禁中獨直對ル月憶二元九一詩の句)
(二) よしさ(遂)の訛

京都帝大國文學研究室藏寫本(奈良絵入) 上卷

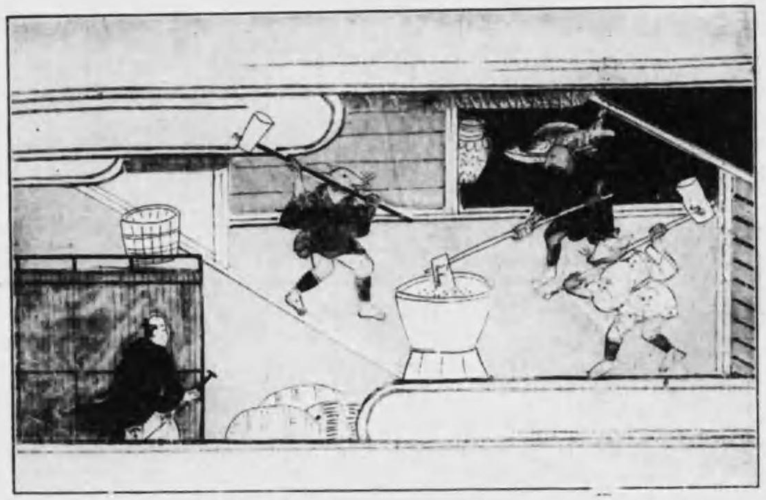
(二)方廣寺大佛殿
天正十四ニ豐臣秀
吉創建、慶長中秀
頼再建
(三)十三間堂
蓮華王院
二條天皇長寛二
年後白河法皇御
創建



東京帝大（國文）本　上巻

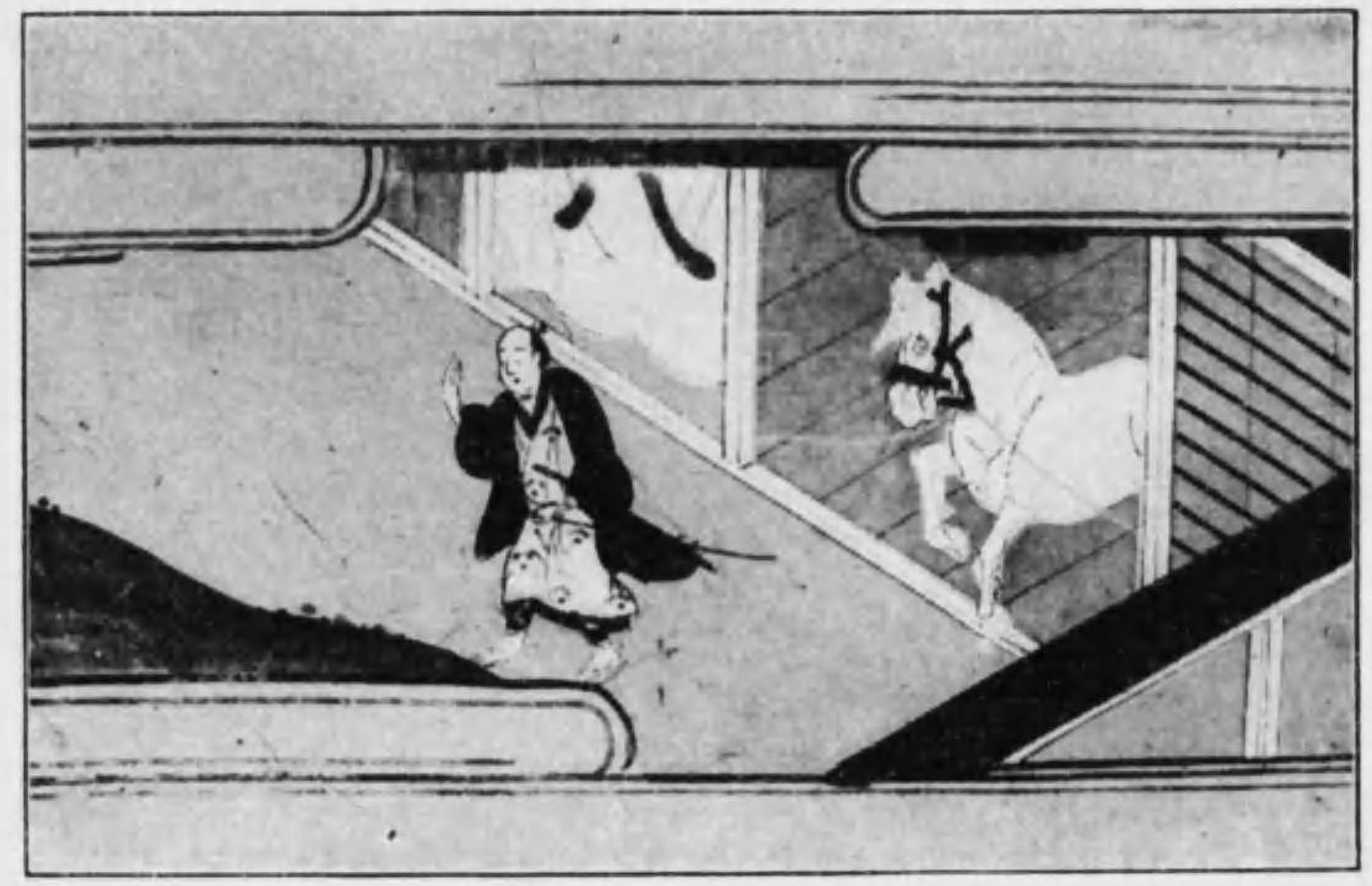
音ねをのみなく千どり(鳥足)あしになり、やう〳〵うち渡りて、南(廣)みなみをさして行程に、かの大ぶつや(二佛)三十三げん(間)をゆんで(手)になして、打過る一二のはし(橋)ほうしやう(法性)寺、紅葉(色濃)稲荷(荷)山、松にかゝれるふぢ(藤)のもり、木幡(幡)邊(邊)にはたの野べに出たりけり。ひがし(東方)のかたにものいふこゑ(言聲)聞(聞)きこへたり。我ならで又よの人も、月にはあこがれてこゝらたどるらん。うちよりてこよ(寄今宵)ひをながむるうたあらばと思ひて、たちより(立寄)けれども人なし。かしこなるきしかげ(岸陰)のところをみやりたれば、おほきなるあな(穴)あり。そのうち(内)にこそ人のものいふこゑ(聲聞)きこゆれ。そも是に人をまよはすき(迷狐)つねのすむなるふる塚にてやあるらん。もしはひご(日頃)ろきゝつたへしこの野べには、ねずみ(鼠)のすむかくれざとのありといふ。ともあれ、みやこ(都)にかへりての物がたり(語)にもなれかし。内に入て見ばやとおもふ心

(二)夜甫の人、費長房
費薬商の老翁に隨
つて壺中に入り、
玉堂に遊びしとい
ふ神仙譚
(後漢書七二下、
方術傳・蒙求中、
壺公謫天・曾我
物語一、費長房
が事等參照)
壺中天地乾坤外、
夢裏身名旦暮間
元稹(朗詠集下、
維、仙家(家)道士
隱倫、幽栖)
(三)水の下桶の字
脫か
或はつみ(ツミ)はく
みの誤寫か



つきて、さし(足)あしになりつゝ半町ばかり行かとおもへば、さしも(廣)ひろき所に出たり。日は(天)てんにかゝり(懸)てくもりなくてらし(照)、河水しづかになが(流)れて又ふかからず。是はそもひちやう(房)ばうがいひけん(言)こちうの天(地)てん(乾)ち、けんこん(坤)の外なる國なるべし(思)とおもひ、むかふ(向)をみれば、棟門(門)唐門(門)建(建)てならべたり。あやしく(怪)おもひ(思)てたちより、門のうちをさしのぞきたれば、人もなし。さし入て(立)大ばん所にいたりけれ(到)ば、多(集)おほくのねずみ(鼠)のあつまりて、なべ・かま(鍋釜)すゑ(据)ならべ、うを(魚)を切、水をつみおく(汲)。十二けん(間)のとをざぶらひには、とり(鳥)うさぎ(兎)はくてう(白鳥)五さ(竿)ほばかりかけならべ、おけとつぼ(桶壺)とはいくつもならべ、こぼるゝほどさけ(酒)をたゝへたり。庭にたてうすふたつ(立臼二)ならべ、米(米)よねをうつ(打)所もあり。そのよねうたをきけば、おかしくも(面白)又おもしろかりけり。

(一)列子周穆王第三に見ゆる故事
(二)烏騅(史記七、項羽本紀參照)
(三)大夫黑のことなるべし。もとの名、薄墨(平家物語二、嗣信最後・盛衰記四二、繼信孝養の條等參照)
(四)羽の意
(五)寛平法皇は王侍從と申し比より殊に鷹をつかはせ給ふ。加茂臨時祭の事勸修寺のむすめ御契を結ばれし事などみな鷹の故なり(嵯峨野物語)勸修寺のむすめとは藤原高藤女女御胤子(醍醐天皇の御母)猶、大鏡(上、宇多天皇の條)・宇多天皇實錄一寛平元年十一月廿一日、廿八日の條・今昔物語二二、高藤内大臣語第七・勸修寺緣起等參照
(六)平維茂



切　韻

さなへのはにはいなごもつきぞ。
とらげのねこはこゑをもいやよ。

とうたひたるふしのおもしろさ、こゑめづらかににほひありて、いきのはづむことぞ有となん。またひがしのかたを見わたせば、五十けんの馬やあり。も(一)ろこし周のぼくわうのてんぢくにわたりしとき、八しゆんのめいばにのり給ひけん、それよりするゑには、かんそ七十よどのたたかひに、かうのめされしは〔マヽ〕(二)うんすい、わがてうのゐにしへ、よりとものめされしいけずき・するすみ、よしつねの(三)大くろ、これらのめいばをあざむく程のむまどもを、おの〳〵馬やにたてたりけり。五十(四)もとのたかべやあり。是又むかしをいはゞ、(五)うだのみかどのあさみどり、(六)よごしやうぐんのはるがすみ、これらにをとらぬたかどもを、かず〳〵にすゑならべ、大たか・小たか・はいた

(一)すゞめだか、悦哉の異名
(二)初鷹、初鳥屋出しの鷹
(三)悦哉の雌
(四)はいたかの雌
(五)日々野かずなふませた鷹。又生れて三箇月以内に捕つた若鷹
(六)架(ほこ)。鷹をとまらする具(ほこ)の一種。野ほこ・壽命のほこともいひ常の架よりも桁高きもの
(七)盧生の故事(唐の李泌の枕中記所載の支那說話、謠曲邯鄲・太平記二五、自二伊勢一進二寶劍一事附黃粱夢事等參照)
(八)なの誤寫 めなう(瑪瑙)
(九)かの誤寫なるべし 高殿、樓
(一〇)間の誤寫なるべし 六間(むま)
(一一)書ゐん(院)の訛
(一二)雜賀(さいが)か 紀伊國海草郡
(一三)支那南陽酈縣山の

(一)かすゞみだか・(二)はしたか・つみ・(三)えつさい・(四)このり・(五)のざれなんどいふさま〴〵のたかあり。あしをもとをしそろへつゝ、いづれも(六)とほこにすゑをきたり。みやこのうち、ましてとをきの中にもかゝるところ有べしとは、きゝもおよばず見もせざれば、(七)ゆめにえいぐわをきはむらんと、めなん後ぞくやしき。にしのかたにまはりてみれば、をりふし中門はひらきてあり。内をみいれたれば、すいしやうのいさごをしき、め(八)かうのいしをならべたり。つりどのに(九)〔マヽ〕たりどの、玉のらんかんにこがねをこじりとし、白がねのはしら、めなふのぬき、さんごのうつばり、こはくのむなぎ、すいしやうのみすにしんじゆのやうらくをかけたり。(一〇)〔マヽ〕六門のくわい所には大もんのたゝみをしき、三ぷく一つい、くわびん・かうろみがきたてゝならべたり。(一一)書ゐんにはもろこし・やまとのものゝ本、まきたるもあり、とぢたるもあり。めんざうにはぢんのまくら、からしきのとのゐものをおきたり。そのかたはらには、七ぼうのきよくろくに、へう・とらのかはをしきかけたり。せんすいにはいせ・しま・さいか(一二)〔マヽ〕の大いしをあつめて、つくりあげたるきしかげに、れうとうげきしゆの舟あり。五色のいとにてつなぎたり。うへ木には、月に花さくかつらの木、(一三)せんかのきくいろをあらそひ、よしのゝさくら、おのへのまつ、露しもそめしくれなゐの(一四)やしほのおかのしたもみぢ、(一五)西行法師がいにしへかればのかせをながめたりしなにはのあしの一むら、(一六)ありはらの中將のあづまのたびに露分しうつの山邊のつたかえで、花は(一七)木こゑをな

菊水の故事（抱朴子僊藥篇所載の支那說話、謠曲枕慈童參照）

（一）山城國愛宕郡岩倉中村八幡宮の北丘紅の八重の岡のもみぢ葉をいかに染めよと猶しぐるらむ　藤原伊光（新勅撰五、秋下）

（二）津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり　西行法師（新古今六、冬）

（三）伊勢物語九段參照

（四）すの誤かそすえ（木末、梢）

（五）君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る　紀友則（古今一春上）

（六）須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり（古今一四戀四）（伊勢物語一一二段）

らべつゝ、にほひたがひにくんじたり。北よりつゞく山をみれば、たかねの雪はきえやらで、にうつろふ梅がかを、君ならではとにほふらん。のきにさえづるうぐひす、うつばりにすくふつばめ、いでの山ぶき、みかさのつゝじ、おちくるたきにうつろひて、にしきをさらすごとくなり。山のおさきはあらうみにて、よせくるなみにきしをあらひ、ほかけてはしるふなよばひ、いそにはあまのしほたれて、玉もをとりいそなをつむ。しほやのけぶりよこおれて、我ゆきこふらんむねの火のおもはぬかたになびくらん。山のうしろはすみがまなり。かればのもみぢをりくべて、ながふてほそくたちのぼるけぶりのするもあはれ也。うき世の外なるとをざとにも、かゝる事ありとは露しらざりけりと、たちやすらひてながめゐたり。

（一）ならで誰の誤

（二）きの誤寫

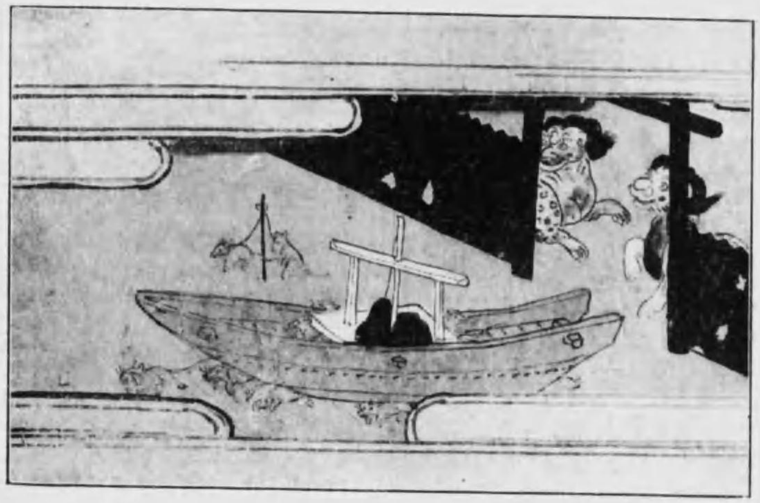
（三）行き交ふか

（四）なしの上をの字脫か

（五）攝津國武庫郡西宮神社（夷宮）

かゝりける所に、早打はやうち、馬にのりてかけきたり、案内あんないをこふ。内うちより立たち出て、そ者うしやのまにて物いふ。何なるらんときゝゐたれば、津國西宮の樓鼠の盛前ごとくもり物をぬすみとる。御まへなるこまいぬこれを見て、大（一）怒おほさにいかりなしけれ共ども、ちいさきねずみの事なれば、おそれまどひて、古ふるき井のもとにおち入、かこちてなきさけぶ。いかなるゆへぞとたづぬれば、西のみやのはいでんのあたり、こゝかしこ遊あそびけるを、こまいぬのかけ出てせなかをしたゝかにかみたりといふ。ねずみのおや此よしを聞て、おとなげなくもこまいぬ殿、たとひいかなる事ありとも、あれほどちいさきねずみを、なさけなくもかませたまふこそやすからね。そのぎならばにしのみやのしやだんをかぶり倒たをし、鳥井の二はしらころばかせといかりけれども、わかきねずみ共二三百はしり出て、ひそかにかにしのみやにしのびよりて、しやだんのとびら、鳥井のはしらをかぶる事いふばかりなし。裏比須殿どの此のよしをきこしめし、にくきやつばらがしわざかな。そのねずみども一疋もにがすな。地獄ぢごくおとし・さげわなにかけて、ごくもんにさらし、とび・からすにくらはすべしといかり給ふ。こまいぬうけたまわり、ひらた舟をぢごくおとしにしつらい、ゑびす殿のもとめ給へるつりばりのいとゞもをわなにこしらへて、こゝかしこにかけをき、うしろのかたよりときのこ

(一)惠比須を記紀神話の水蛭子に附会する傳説によれば、天照大御神・月讀尊・素盞嗚尊とは別ち御兄弟に當る(古事記上・書紀神代巻上參照)

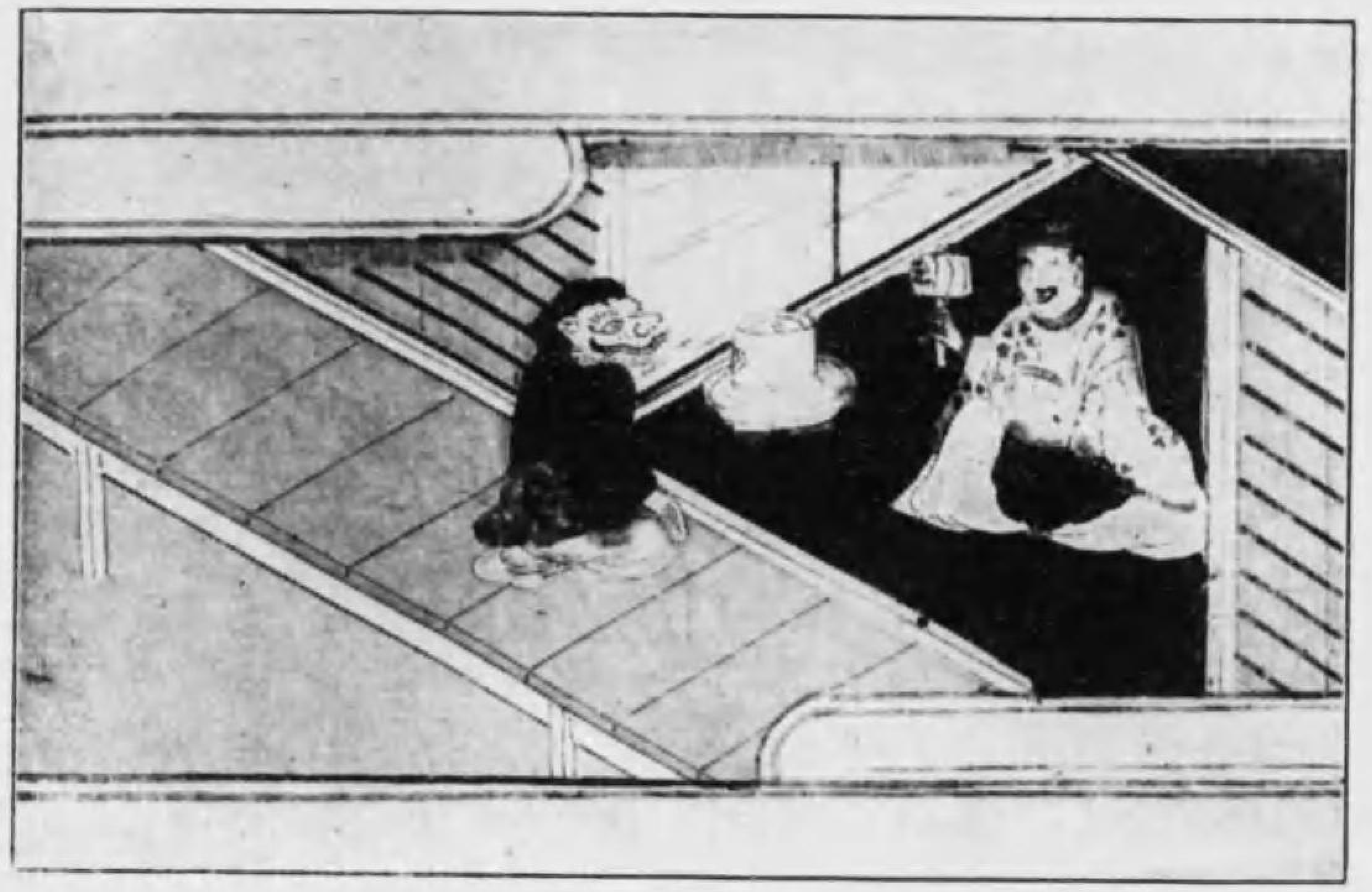


ゑをとつとあぐれば、二三百のわかねずみきもをつぶし、にげふためきてぢごくおとしにかけこみてをしつぶさるゝもあり、さげわなにかゝりてうにぶらりとなるもあり。手をおられ、あしをそこなひ、こしをうちおり、さま〴〵かたわになりて、にげかへるものわづかに五六十には過ざりけり。

のこりたるねずみどもなきのなみだに成てにげかへる。おやをうしなひ子をころされ、やすからぬ事かな。いかにしてかゑびすどのにめいわくをさせ、このうらみをほうずべきとだんかうする所に、かうもりの四郎とびきたりていふやう、きのふうけ給はりしは、いせのくにわたらひのこほりに、月よみのみやとて、ゑびすどのには御あにより。此みやに御ちやをしんぜらるべしとつかひの

(二)叡山の三面大黒天傳教大師開創の時出現ぜりといふ傳説あり 謡曲蛭子大黒天參照

參まいりけるに、明日かならずすゝ(二)ちやのゆにきたらせ給ふなるよし御返事是ありて、すきやのさうちなゝめならず。又松かせといふちやうすあり、河しまといふひき木あり、これ一ぐのたからひ給へといふ。ねずみきゝて、それこそねがふところなれとて、さうちをせしすきやには、ちやうすどのは御らんじて、かやうならば明日のちやのゆにもをことゞ〳〵く打ころさせんとの給ひて、こまいぬをつかいとして、ひえいざんにぞのぼせられける。大こく天神は此よしを聞しめし、まづはそれがしがめしつかふものども、いかでさやうのあしきわざをいたすべしともおぼえず。さりながらちやうすひき木はわきまへて奉るべし。是にてかんにんし給へとて、うちでの小づちをふりあげ、ちやうとうたせ給へば、さきのうす



同前

ひき木よりなを見事なるをぞいだされける。こまいぬいそぎ御まへをたちて、にしのみやにはせかへり、ゑびすどのにかくと申ける。ゑびす仰けるは、かのねずみと申すは、大日きやうの(一)六十しんには(二)ゑしんとゝかれて、ものをやぶる人をば、ねずみの心にたとへられたり。(三)しゆそりやうたんといふは、ぜんかん書にしるすところ、うたがひおほきを名づけたり。されば(四)らいきに、(五)ねこをやしなふ事は、ねずみをとらしめんためなりといへり。かゝるいたづらものをてまへにかゝへてししやとして、あまさへ、さやうのことせまじきと仰あるこそ心得ね。(六)又つれ〴〵ぐさにも、なくてもよからんもの、(七)くにぬす人、いゑにねずみといふなれば、わざわひのものといふ、此ものにきわまれり。されば、かゝらんことばをきくからは、たゞもと

(一)煩惱の六十心・實は貪心・瞋心・疑心等五十九の心相を擧ぐ
(二)鼠(そ)しんの誤寫なるべし　云何ガ鼠心、謂ハク思惟スルヲ斷ゼント諸ノ繫縛ヲ（大毘盧遮那佛神變加持經〔大日經〕一、入眞言門住心品第一）
(三)蚡(田蚡)已罷レ朝出止二車門一、召二御史大夫安國一載。怒曰、與二長孺一共一禿翁、何爲二首鼠兩端一（漢書五二、竇田灌韓傳第二二）〔史記一〇七、魏其・武安侯列傳第四七參照〕
(四)左記東坡の語を誤り引けるならん
(五)東坡云、養レ猫以捕レ鼠、不レ可三以レ無レ鼠而養二不レ捕之猫一（鶴林玉露人集卷之六、猫犬）

のちやうす・ひき木をかへし給ふべしといからせ給ふ。　こまいぬかさねてひゑいざんにいたりて、かくと申ければ、大こくおほきにはらを立給ひて、一日もそれがしがてのものといはんにあだをなし給ひてうちころし給ふをも、よし〳〵とかんにんして一ごんのうらみをも申さず。このしかるをこのちやうすほどの事につけて、さやうに仰あるこそかへす〳〵もむねんなれ。何かと上はちやうすをもまどふまじ。そも〳〵ねずみの事ども、ないてんげてんをひき出し、人の給ふこそやすからね。やぶる心をねずみにたとへ給ふことは、人の心のいましめなり。人のこゝろのものやぶりなるを、ねずみのごとしといふならば、ゑびすのごとく(一)かきやぶりなる事あるは、ねずみのごとしと申すべし。ねこをかふてやしなふは、ねずみのためとのたまふは、れいきのことわりなり。ねこはねずみをくらふものとさだまりたるいはれなし。人はかならずいをゝくふものならず。ゑびすのごとくれうしをするものゝあるゆへ也。のみ・しらみの人をくらふ、人はのみ・しらみのためにむまれたる也。又なくてもくるしからぬもの、ねずみにまさりてかずおほし。ひやけ・大水・ぢしん・かみなり・せうもうのわざはひなんどは、ねずみよりなをなくともよからん。てんちはさわなきもの也。(二)えらまぬをみちとする、いはんや物にはとりえあり。せうもうのおくにも、あかきをとりえにする。あしからんねずみにも、そのとくとりえのあるゆへに、十二支のその中に、子の一支を入られ、正月のいはひにも、子の日の松を

(六)その物につきて、その物を費しそこなふ物、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり（徒然草〔文段抄九七段〕）
(七)國にぬす人　〔早大本〕
(一)無理に非を通すこと
(二)道可レ道非二常道一　名可レ名非二常名一（老子第一章）

賞ぞしやうぐわんする。四方のうち北をねのかたとなづけて、水をやういくせしむる也。薬師十二神のうち、略迦羅大将はかしらにねずみを戴き、子のときをまもり給ふ。十一月のね祭(二)まつりも、富貴願利生ふつきをねがふにりしやうあるゆへぞかし。このことはりをしらせたまはぬゆへ、さやうにのたまふおかしさよ。たとへば日ごろ申だんずる中なれば、あしからん事をも、かんにんし給ひてこそみちといふべけれ。此うへはそれがしがてのものに、ゆびをなり共さしたまはど、御うらみ申すべし。其上、ちやうす・ひき木をもかたくまどひ申すべしと、あらゝかに宣の給へば、こまいぬおどろきて御まへをまかりたち、にしのみやにかへりて此よしかくと申けり。

かくてこまいぬは、にしのみやにかへりて此由を申ければ、ゑびす殿はきこしめし、こゝろへ得ぬおほせかな。そのぎならば、津のくにのねずみどもをことゞくふみころし、そのゝちつはものをあつめてひゑいざんにをしよせ、大こくてんとせめたゝかひ、一せんのうちにしゆうをけつすべしとて、こまいぬをつかはし給ふに、にしのみやは申すにをよばず、すまのうら・一のたに・わたなべ・ふくしま・こん口・やまざき・やはたあたりのねずみども、此由をつたへきゝ、とるものもとりあへず、おやをつれ子をかゝへて、ひゑいざんにゝげのぼる。ゑびすどのはきこしめし、さらばぐんせいをあつめよとて、りうぐうじやうへつかひをたてらる。りうわうは

(二)子の誤
(三)大黒天の祭
陰暦十月甲子の日に行ふ

承うけたまわり、かゝるふしぎの事こそあらね。ひごろはさも一しよにすまゐてふくの神とあふがれ、しよ人是をあがめたてまつる。しかるにいまことの出來して、つは物をあつめ給ふこそ、珍めづらしきくわだてなり。さりながら海にふれをなし、ちやくたうをこそ給ひしものなりとて、八ひろのくまわにせんぢんなり。ちからはたれにもまさるべき仰ならず。さらばつはものあつめよとて、大将には、いづれの神もしらせおもふらん。こゝろもかれいとよばゝるは、いくさぶぎやうのためなるらん。つかいばんのそのためにも、すばしりをもめされたり。名はさきだちてとびうをや、いくさにいつもかつうをと、きけばまことにまながつを、その外には、はも・いるか・かまつか・くじら・はまちをさきとして、中にもたいはいせむしやにて、火をどしにぞそみたるいろかき・あかがい、夜うちをさせぬ夜なきがい、このものどもをさきとして、ほろのかいをふきならし、たこ・いかのてのはたさゝせ、さはらかに出たち、島かいらぎのすねあて、しやちほこ・たちうをゝこしにさし、さよりによりあひて、

(二)青紀神代巻上、事代主神の條・同下、一書の豊玉姫の條等参照
(三)義経の勇臣、紀州熊代の住人、鈴木三郎重家・亀井六郎重清兄弟のもぢり
(四)いなり寿司。鯔の小なるもの。いな。名良しに掛く
(五)はぜ 又はきすに似たる淡水魚
(六)ぶりの幼魚關西の方言
(七)伊勢武者は俗火威の鎧著て宇治の瀬代にかゝりぬる故(伊豆守源仲綱(平家物語四、宮御最後)
(八)青紀神代巻下、彦火火出見尊の條参照
(九)きさご(きしやご)の異名

(一)板屋貝に似たる帆立貝科の一種。到るに掛く
(二)たひらぎ(玉珧)
(三)ながにし(香螺)
(四)法羅(ほら)の貝
(五)さより(針魚)の異名

東京帝大(国文)本　下巻

下

一の谷の須磨の浦・ひやうご庫・西の宮に集りたり。其勢は十萬八千餘騎とぞしるしける。

大こくてんは此よし聞召、大おほきにいかり給ひて、三めんの形かたちをあらはし、比叡の山にじやう城をかまへ、みやこのうちのねずみどもをあつめ給ふに、その數すくなし。きらばかくれ里につかひを使たてよと仰けり。このゆへに、はやうらきたりて打來かくと申ける。かくれざとのねずみどもおどろき驚さはぎて、つわものをあつめて大こくてんにたてまつる。おねら・小ねら・おねの子・しろねずみ・くろねずみ・のねずみ・山ねずみ・廿日ねずみをさきとして、我も〳〵と出たちたり。そのなかに

(一)鳴尾は武庫川西岸の地名。鳴尾浦は今津西宮の沖
(二)俵口(へうぐち)か又、蓮尺(れんじやく)商品を負ふ道具の名。馬具の連著のしりがい(鞦)に掛く
(三)一名不動坂、修學院村より叡山への登路
(四)一字衍
(五)七六頁頭註參照
(六)日・月・素三神の次の弟神の意なるべし。但し、水蛭子(紀は蛭兒)の生誕は記にては三神よりも早く、紀の本文は素尊の前
(七)餅菓子の名、一名まめあめ
(八)ふちまめの異名
(九)朽ちかけか
(一〇)やはすふんどう一名のふんどう

(一)鳴尾鼠なるおのねずみ次郎あなずみを大將とさだめて、その勢十萬餘騎よき、いろ〳〵の旗はたの紋もん、たはら・さんだはら・ひやうくちのなわ・ますがたるはたさゝせ、こはたとうげより山しな・かも河にさしつどひて、ひゑいざんにぞあつまりける。

大こくてん大きによろこび給ひて、さらばこのつはものどもを、かも河・きら〳〵坂までさしむけよとのた給ふところに、ゑびすどのより御つかひまいりたり。そのことばにいはく

抑とし月、日ごろ、一しよにありて、千代よろづ代の末までかはらじとこそおもひしに、かゝる事になりゆくは、ひとへに神道の本いにあらず。しかるにそれがしと申は、かたじけなくも天神第七代いざなぎ・いざなみのみことにはてんじん第七代いざなぎ・いざなみのみことには第四の御子也。御あに君はいせのくにわたらひのこほりにまします。申すもおそれあり、大かたしろしめさるべし。うぢもけいづもてん下におそるべき人なし。大こくどのはそのかたちのいやしき、いろくろく、せいひきく、よこはゞかりに見え給ふは、くじらのわぎりにたとふべし。てに持給ふは何なるらん。家つくるばん匠やうのさいづちとや申すべき。かたにかつぎたまふは、ひごろこのませ給ふなるすはま・とちまめ・さとうまめ・たうふなんどや入給ふ。さてまた、あしにふまへ給ふは、何を入たるたはらぞや。千ごくまめのくちかけのやはすのまめやおさめけん。もしそれならずば、ねずみど

(二)漉粉　てうづの粉には(中略)赤小豆の粉綠豆のこを使ひ給ふべし(女重寶記一、女けしやう)

ものひやうらうのそのために、(二)手頃塔忍致ごろはかんにんいたしつゝ、一しょに相駈あひなれ申せしは、浮き世の不祥ふしやうとぞんずる也。されば軍このいくさに御出あつてたゝかひ給ふとも、あしみじかくまししませば、家鴎如見みゑ給ふ。かけひき自由ひきじゆふなるまじきに、おなじくは降參かうさんしてわび事をなしたまはゞ、ゆるすべしとぞつかわしたまひける。

大こくてんから〳〵とうちわらひ、御返事はこなたより申べしとてつかひを返かへされ、あなみの次郎をめし、なんぢをつかいにつかはすなり。むまにのりていそぎ行べし。ねこ太郎に行逢あふな。とびのすけもあるぞかしなど〻申つけられけり。其返事のことばにいはく

仰のごとく、日ごろはさしも一しよにあり、いのちかけてかはらじとこそおもひしに、わざはひいできて、すでにいくさにのぞむ事、ほとけのいましめにそむきたり。さればさんきさんげの心をばたちまちにひきかへ、にんにくじひのかたちをあらため、(二)かうふくふたうのよろいかぶと、しんねかうしやうのほこたてをならぶる事、恐るにゑびすどのの御けいづの事うけたまはりとゞけたり。それがしいかでおとるべき。かたじけなくもてんにありてはしゆみせんのいたゞきにざして、三十二しんにあふがるゝたいしやくてんわう也。むかししやくそんてんぢくに出給ふそのときは、まかきやらてんと名づけたり。

(二)したみの訛か　滑酒　甘露天酒也。其凝如レ脂、其甘如レ飴矣(博物志)

(二)剛復不道(無道)か降伏不動か　(三)嗔恚強情か

(四)須彌山の最頂、忉利天の主。喜見城に在つて、四天王・三十二天を支配す

(二)一字衍か　(三)屋後の麻地酒のことか　(四)次生三姪兒一。難二已三歲一脚猶不レ立。故戒二之於天磐橿樟船一而順風放棄(書紀神代卷上)　姪子と申すは今の西宮大明神にて坐す。生れ給ひし後三年迄御足不レ立して、片輪に坐せしかば、磐橿樟船にのせて海に放ち奉る。かぞいろはいかにあはれと思ふらん三年になりぬ足立たずしてと讀める歌是也(太平記二五、白二伊勢一進二寶劍一事附黃梁夢事)

この日本にわたりて、一さいしゆじやうのねがひをかなへんと、形かたちをかへてあらはれたり。それたうりてんのきけんじやうと申すは、大らくじざいのところにて、百味のじきみち〳〵たり。酒には天のしゆたみとて、そのあぢはひかんろのごとく、これにんげんのうちにして、ならもろはく・いたみざけ・あさぢしやうちう・にんだうしゆ・はかたのねりざけ・なんばんざけ・しろざけ・みりんちうなどゝいへども、さらに是におよぶ事なし。あまの羽ごろも身にまとひて、たのしみさらにつくる事なし。何とぼしき事ありて、まめのめし・まめのくわしを好このみて是をくふべきや。たゞ是人のしん〳〵をもよほすことをあらはせり。あしにふまへしたはらこそ、五こくじやうじゆの事はりなれ。かたにかけたるふくろには、じゆみやうちやうをんのくすりを入、ふらうふしのくどくをぞ給ふ。てにもちたるつちこそ、によいほうじゆのかたちをしめし、心のまゝにたから物をうちいだす。もろ〳〵のしゆじやうのねがひをかなへ、心にしたがふいはれあり。ゑびすどのとむまれて、みつのとしまであしもたゝずほねもなし。ひる子のみことゝ申せしそこの殿ときこえたり。父母これをみて、あまのいはくす舟にのせて、大かいになかしすて給ふを、りうじんこれをあはれみて、とりあげてやしなふに、やう〳〵人になら せ給ひ、にしのみやにまし〳〵、しよこくのあき人のうはまいをもらふて、月日をおくり給ふ也。かせすさまじくなみあらきはまべいはにざをしめて、うををつりて日ををくり、み

をすぐるわざをなすに、氏うぢよりそだちといふ事あり。いまその身にて、なにのけいづのいるべきと申もなをいやましなり。たゞとにかくにかうさんし給へ。それさなきものならば、御うんのすへにて有べしと申あげて、あなづみはむまにうちのりかへらんとする鳥井のあたりに、とらげのねこころぶうちあげてねう〳〵となきけるにきもをけし、日ごろはさしもはやしとおもふむまなれども、たゞひとへにこゝろにおどるこゝちして、ねう〳〵のこゑみゝのあたりにひゞきて、おそろしさかぎりなし。やう〳〵ひえいざんにし坂本にかけつけて、しばらくいきをぞつきにける。

いくさをするとだんがうさま〴〵なり。とかく出むかふてたゝかへとて、ゑびすどのは四でうむろまち大こく殿の町にぢんをとり、大こく殿は二でう河原町大こく町にぢんをとり、はたをなびかし、ときの声をぞあはせける。

ほこ(矛)の誤寫なるべし(早大本)

(一)後梁の頃の人、明州奉化縣の僧。名は契此

(二)ぜんぼふ(禪法)か

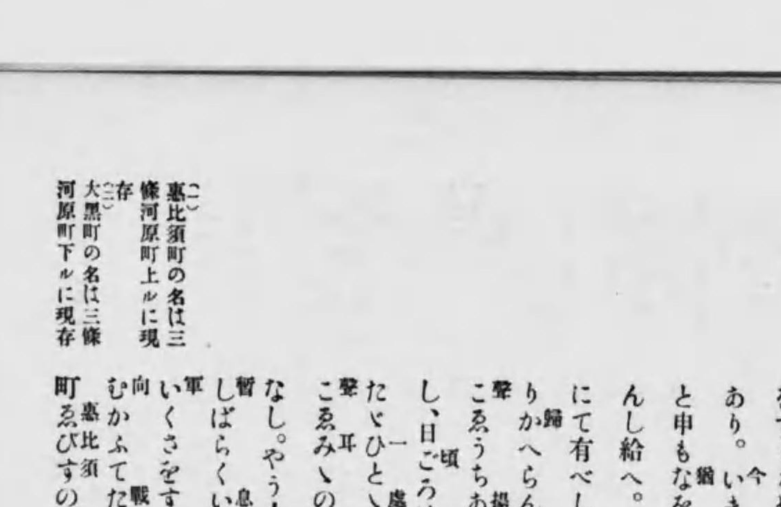
(三)聖徳太子の傳説(書紀、推古紀)ある達磨塚の跡、僧勝月(一説、解脫上人)建立。永享二年足利義教再興

(四)京都五山

(五)南禪(五山の上)・天龍・相國・建仁・東福・萬壽

(六)辨財、東福寺の開基

(七)法堂と禪門院との間、洗玉澗に架す紅葉の名勝



箭　　筒

(一)裏比須町の名は三條河原町上ルに現存

(二)大黒町の名は三條河原町下ルに現存

(三)裏比須町の名は三條河原町上ルに現存

(四)三條室町下ルに現存

(五)三條高倉通をのぼる

(六)三條高倉通をのぼる

(七)三條高倉通をのぼる

(八)三條高倉通をのぼる

(九)三條高倉通をのぼる

(十)三條高倉通をのぼる

(十一)三條高倉通をのぼる

(十二)三條高倉通をのぼる

(十三)三條高倉通をのぼる

(十四)三條高倉通をのぼる

(十五)三條高倉通をのぼる

(十六)三條高倉通をのぼる

(十七)三條高倉通をのぼる

(十八)三條高倉通をのぼる

(十九)三條高倉通をのぼる

(二十)三條高倉通をのぼる

(二十一)三條高倉通をのぼる

(二十二)三條高倉通をのぼる

(二十三)三條高倉通をのぼる

(二十四)三條高倉通をのぼる

(二十五)三條高倉通をのぼる

(二十六)三條高倉通をのぼる

(二十七)三條高倉通をのぼる

(二十八)三條高倉通をのぼる

(二十九)三條高倉通をのぼる

(三十)三條高倉通をのぼる

(三十一)三條高倉通をのぼる

(三十二)三條高倉通をのぼる

(三十三)三條高倉通をのぼる

(三十四)三條高倉通をのぼる

(三十五)三條高倉通をのぼる

(三十六)三條高倉通をのぼる

(三十七)三條高倉通をのぼる

(三十八)三條高倉通をのぼる

(三十九)三條高倉通をのぼる

(四十)三條高倉通をのぼる

(四十一)三條高倉通をのぼる

(四十二)三條高倉通をのぼる

(四十三)三條高倉通をのぼる

(四十四)三條高倉通をのぼる

(四十五)三條高倉通をのぼる

(四十六)三條高倉通をのぼる

(四十七)三條高倉通をのぼる

(四十八)三條高倉通をのぼる

(四十九)三條高倉通をのぼる

(五十)三條高倉通をのぼる

(五十一)三條高倉通をのぼる

(五十二)三條高倉通をのぼる

(五十三)三條高倉通をのぼる

(五十四)三條高倉通をのぼる

(五十五)三條高倉通をのぼる

(五十六)三條高倉通をのぼる

(五十七)三條高倉通をのぼる

(五十八)三條高倉通をのぼる

(五十九)三條高倉通をのぼる

(六十)三條高倉通をのぼる

(六十一)三條高倉通をのぼる

(六十二)三條高倉通をのぼる

(六十三)三條高倉通をのぼる

(六十四)三條高倉通をのぼる

(六十五)三條高倉通をのぼる

(六十六)三條高倉通をのぼる

(六十七)三條高倉通をのぼる

(六十八)三條高倉通をのぼる

(六十九)三條高倉通をのぼる

(七十)三條高倉通をのぼる

(七十一)三條高倉通をのぼる

(七十二)三條高倉通をのぼる

(七十三)三條高倉通をのぼる

(七十四)三條高倉通をのぼる

(七十五)三條高倉通をのぼる

(七十六)三條高倉通をのぼる

(七十七)三條高倉通をのぼる

(七十八)三條高倉通をのぼる

(七十九)三條高倉通をのぼる

(八十)三條高倉通をのぼる

(八十一)三條高倉通をのぼる

(八十二)三條高倉通をのぼる

(八十三)三條高倉通をのぼる

(八十四)三條高倉通をのぼる

(八十五)三條高倉通をのぼる

(八十六)三條高倉通をのぼる

(八十七)三條高倉通をのぼる

(八十八)三條高倉通をのぼる

(八十九)三條高倉通をのぼる

(九十)三條高倉通をのぼる

(九十一)三條高倉通をのぼる

(九十二)三條高倉通をのぼる

(九十三)三條高倉通をのぼる

(九十四)三條高倉通をのぼる

(九十五)三條高倉通をのぼる

(九十六)三條高倉通をのぼる

(九十七)三條高倉通をのぼる

(九十八)三條高倉通をのぼる

(九十九)三條高倉通をのぼる

(一百)三條高倉通をのぼる

(一百一)三條高倉通をのぼる

(一百二)三條高倉通をのぼる

(一百三)三條高倉通をのぼる

(一百四)三條高倉通をのぼる

(一百五)三條高倉通をのぼる

(一百六)三條高倉通をのぼる

(一百七)三條高倉通をのぼる

(一百八)三條高倉通をのぼる

(一百九)三條高倉通をのぼる

(一百十)三條高倉通をのぼる

(一百十一)三條高倉通をのぼる

(一百十二)三條高倉通をのぼる

(一百十三)三條高倉通をのぼる

(一百十四)三條高倉通をのぼる

(一百十五)三條高倉通をのぼる

(一百十六)三條高倉通をのぼる

(一百十七)三條高倉通をのぼる

(一百十八)三條高倉通をのぼる

(一百十九)三條高倉通をのぼる

(一百二十)三條高倉通をのぼる

(一百二十一)三條高倉通をのぼる

(一百二十二)三條高倉通をのぼる

(一百二十三)三條高倉通をのぼる

(一百二十四)三條高倉通をのぼる

(一百二十五)三條高倉通をのぼる

(一百二十六)三條高倉通をのぼる

(一百二十七)三條高倉通をのぼる

(一百二十八)三條高倉通をのぼる

(一百二十九)三條高倉通をのぼる

(一百三十)三條高倉通をのぼる

(一百三十一)三條高倉通をのぼる

(一百三十二)三條高倉通をのぼる

(一百三十三)三條高倉通をのぼる

(一百三十四)三條高倉通をのぼる

(一百三十五)三條高倉通をのぼる

(一百三十六)三條高倉通をのぼる

(一百三十七)三條高倉通をのぼる

(一百三十八)三條高倉通をのぼる

(一百三十九)三條高倉通をのぼる

(一百四十)三條高倉通をのぼる

(一百四十一)三條高倉通をのぼる

(一百四十二)三條高倉通をのぼる

(一百四十三)三條高倉通をのぼる

(一百四十四)三條高倉通をのぼる

(一百四十五)三條高倉通をのぼる

(一百四十六)三條高倉通をのぼる

(一百四十七)三條高倉通をのぼる

(一百四十八)三條高倉通をのぼる

(一百四十九)三條高倉通をのぼる

(一百五十)三條高倉通をのぼる

(一百五十一)三條高倉通をのぼる

(一百五十二)三條高倉通をのぼる

(一百五十三)三條高倉通をのぼる

(一百五十四)三條高倉通をのぼる

(一百五十五)三條高倉通をのぼる

(一百五十六)三條高倉通をのぼる

(一百五十七)三條高倉通をのぼる

(一百五十八)三條高倉通をのぼる

(一百五十九)三條高倉通をのぼる

(一百六十)三條高倉通をのぼる

(一百六十一)三條高倉通をのぼる

(一百六十二)三條高倉通をのぼる

(一百六十三)三條高倉通をのぼる

(一百六十四)三條高倉通をのぼる

(一百六十五)三條高倉通をのぼる

(一百六十六)三條高倉通をのぼる

(一百六十七)三條高倉通をのぼる

(一百六十八)三條高倉通をのぼる

(一百六十九)三條高倉通をのぼる

(一百七十)三條高倉通をのぼる

(一百七十一)三條高倉通をのぼる

(一百七十二)三條高倉通をのぼる

(一百七十三)三條高倉通をのぼる

(一百七十四)三條高倉通をのぼる

(一百七十五)三條高倉通をのぼる

(一百七十六)三條高倉通をのぼる

(一百七十七)三條高倉通をのぼる

(一百七十八)三條高倉通をのぼる

(一百七十九)三條高倉通をのぼる

(一百八十)三條高倉通をのぼる

(一百八十一)三條高倉通をのぼる

(一百八十二)三條高倉通をのぼる

(一百八十三)三條高倉通をのぼる

(一百八十四)三條高倉通をのぼる

(一百八十五)三條高倉通をのぼる

(一百八十六)三條高倉通をのぼる

(一百八十七)三條高倉通をのぼる

(一百八十八)三條高倉通をのぼる

(一百八十九)三條高倉通をのぼる

(一百九十)三條高倉通をのぼる

(一百九十一)三條高倉通をのぼる

(一百九十二)三條高倉通をのぼる

(一百九十三)三條高倉通をのぼる

(一百九十四)三條高倉通をのぼる

(一百九十五)三條高倉通をのぼる

(一百九十六)三條高倉通をのぼる

(一百九十七)三條高倉通をのぼる

(一百九十八)三條高倉通をのぼる

(一百九十九)三條高倉通をのぼる

(二百)三條高倉通をのぼる

(二百一)三條高倉通をのぼる

(二百二)三條高倉通をのぼる

(二百三)三條高倉通をのぼる

(二百四)三條高倉通をのぼる

(二百五)三條高倉通をのぼる

(二百六)三條高倉通をのぼる

(二百七)三條高倉通をのぼる

(二百八)三條高倉通をのぼる

(二百九)三條高倉通をのぼる

(二百十)三條高倉通をのぼる

(二百十一)三條高倉通をのぼる

(二百十二)三條高倉通をのぼる

(二百十三)三條高倉通をのぼる

(二百十四)三條高倉通をのぼる

(二百十五)三條高倉通をのぼる

(二百十六)三條高倉通をのぼる

(二百十七)三條高倉通をのぼる

(二百十八)三條高倉通をのぼる

(二百十九)三條高倉通をのぼる

(二百二十)三條高倉通をのぼる

(二百二十一)三條高倉通をのぼる

(二百二十二)三條高倉通をのぼる

(二百二十三)三條高倉通をのぼる

(二百二十四)三條高倉通をのぼる

(二百二十五)三條高倉通をのぼる

(二百二十六)三條高倉通をのぼる

(二百二十七)三條高倉通をのぼる

(二百二十八)三條高倉通をのぼる

(二百二十九)三條高倉通をのぼる

(二百三十)三條高倉通をのぼる

(二百三十一)三條高倉通をのぼる

(二百三十二)三條高倉通をのぼる

(二百三十三)三條高倉通をのぼる

(二百三十四)三條高倉通をのぼる

(二百三十五)三條高倉通をのぼる

(二百三十六)三條高倉通をのぼる

(二百三十七)三條高倉通をのぼる

(二百三十八)三條高倉通をのぼる

(二百三十九)三條高倉通をのぼる

(二百四十)三條高倉通をのぼる

(二百四十一)三條高倉通をのぼる

(二百四十二)三條高倉通をのぼる

(二百四十三)三條高倉通をのぼる

(二百四十四)三條高倉通をのぼる

(二百四十五)三條高倉通をのぼる

(二百四十六)三條高倉通をのぼる

(二百四十七)三條高倉通をのぼる

(二百四十八)三條高倉通をのぼる

(二百四十九)三條高倉通をのぼる

(二百五十)三條高倉通をのぼる

(二百五十一)三條高倉通をのぼる

(二百五十二)三條高倉通をのぼる

(二百五十三)三條高倉通をのぼる

(二百五十四)三條高倉通をのぼる

(二百五十五)三條高倉通をのぼる

(二百五十六)三條高倉通をのぼる

(二百五十七)三條高倉通をのぼる

(二百五十八)三條高倉通をのぼる

(二百五十九)三條高倉通をのぼる

(二百六十)三條高倉通をのぼる

(二百六十一)三條高倉通をのぼる

(二百六十二)三條高倉通をのぼる

(二百六十三)三條高倉通をのぼる

(二百六十四)三條高倉通をのぼる

(二百六十五)三條高倉通をのぼる

(二百六十六)三條高倉通をのぼる

(二百六十七)三條高倉通をのぼる

(二百六十八)三條高倉通をのぼる

(二百六十九)三條高倉通をのぼる

(二百七十)三條高倉通をのぼる

(二百七十一)三條高倉通をのぼる

(二百七十二)三條高倉通をのぼる

(二百七十三)三條高倉通をのぼる

(二百七十四)三條高倉通をのぼる

(二百七十五)三條高倉通をのぼる

(二百七十六)三條高倉通をのぼる

(二百七十七)三條高倉通をのぼる

(二百七十八)三條高倉通をのぼる

(二百七十九)三條高倉通をのぼる

(二百八十)三條高倉通をのぼる

(二百八十一)三條高倉通をのぼる

(二百八十二)三條高倉通をのぼる

(二百八十三)三條高倉通をのぼる

(二百八十四)三條高倉通をのぼる

(二百八十五)三條高倉通をのぼる

(二百八十六)三條高倉通をのぼる

(二百八十七)三條高倉通をのぼる

(二百八十八)三條高倉通をのぼる

(二百八十九)三條高倉通をのぼる

(二百九十)三條高倉通をのぼる

(二百九十一)三條高倉通をのぼる

(二百九十二)三條高倉通をのぼる

(二百九十三)三條高倉通をのぼる

(二百九十四)三條高倉通をのぼる

(二百九十五)三條高倉通をのぼる

(二百九十六)三條高倉通をのぼる

(二百九十七)三條高倉通をのぼる

(二百九十八)三條高倉通をのぼる

(二百九十九)三條高倉通をのぼる

(三百)三條高倉通をのぼる

(三百一)三條高倉通をのぼる

(三百二)三條高倉通をのぼる

(三百三)三條高倉通をのぼる

(三百四)三條高倉通をのぼる

(三百五)三條高倉通をのぼる

(三百六)三條高倉通をのぼる

(三百七)三條高倉通をのぼる

(三百八)三條高倉通をのぼる

(三百九)三條高倉通をのぼる

(三百十)三條高倉通をのぼる

(三百十一)三條高倉通をのぼる

(三百十二)三條高倉通をのぼる

(三百十三)三條高倉通をのぼる

(三百十四)三條高倉通をのぼる

(三百十五)三條高倉通をのぼる

(三百十六)三條高倉通をのぼる

(三百十七)三條高倉通をのぼる

(三百十八)三條高倉通をのぼる

(三百十九)三條高倉通をのぼる

(三百二十)三條高倉通をのぼる

(三百二十一)三條高倉通をのぼる

(三百二十二)三條高倉通をのぼる

(三百二十三)三條高倉通をのぼる

(三百二十四)三條高倉通をのぼる

(三百二十五)三條高倉通をのぼる

(三百二十六)三條高倉通をのぼる

(三百二十七)三條高倉通をのぼる

(三百二十八)三條高倉通をのぼる

(三百二十九)三條高倉通をのぼる

(三百三十)三條高倉通をのぼる

(三百三十一)三條高倉通をのぼる

(三百三十二)三條高倉通をのぼる

(三百三十三)三條高倉通をのぼる

(三百三十四)三條高倉通をのぼる

(三百三十五)三條高倉通をのぼる

(三百三十六)三條高倉通をのぼる

(三百三十七)三條高倉通をのぼる

(三百三十八)三條高倉通をのぼる

(三百三十九)三條高倉通をのぼる

(三百四十)三條高倉通をのぼる

(三百四十一)三條高倉通をのぼる

(三百四十二)三條高倉通をのぼる

(三百四十三)三條高倉通をのぼる

(三百四十四)三條高倉通をのぼる

(三百四十五)三條高倉通をのぼる

(三百四十六)三條高倉通をのぼる

(三百四十七)三條高倉通をのぼる

(三百四十八)三條高倉通をのぼる

(三百四十九)三條高倉通をのぼる

(三百五十)三條高倉通をのぼる

(三百五十一)三條高倉通をのぼる

(三百五十二)三條高倉通をのぼる

(三百五十三)三條高倉通をのぼる

(三百五十四)三條高倉通をのぼる

(三百五十五)三條高倉通をのぼる

(三百五十六)三條高倉通をのぼる

(三百五十七)三條高倉通をのぼる

(三百五十八)三條高倉通をのぼる

(三百五十九)三條高倉通をのぼる

(三百六十)三條高倉通をのぼる

(三百六十一)三條高倉通をのぼる

(三百六十二)三條高倉通をのぼる

(三百六十三)三條高倉通をのぼる

(三百六十四)三條高倉通をのぼる

(三百六十五)三條高倉通をのぼる

(三百六十六)三條高倉通をのぼる

(三百六十七)三條高倉通をのぼる

(三百六十八)三條高倉通をのぼる

(三百六十九)三條高倉通をのぼる

(三百七十)三條高倉通をのぼる

(三百七十一)三條高倉通をのぼる

(三百七十二)三條高倉通をのぼる

(三百七十三)三條高倉通をのぼる

(三百七十四)三條高倉通をのぼる

(三百七十五)三條高倉通をのぼる

(三百七十六)三條高倉通をのぼる

(三百七十七)三條高倉通をのぼる

(三百七十八)三條高倉通をのぼる

(三百七十九)三條高倉通をのぼる

(三百八十)三條高倉通をのぼる

(三百八十一)三條高倉通をのぼる

(三百八十二)三條高倉通をのぼる

(三百八十三)三條高倉通をのぼる

(三百八十四)三條高倉通をのぼる

(三百八十五)三條高倉通をのぼる

(三百八十六)三條高倉通をのぼる

(三百八十七)三條高倉通をのぼる

(三百八十八)三條高倉通をのぼる

(三百八十九)三條高倉通をのぼる

(三百九十)三條高倉通をのぼる

(三百九十一)三條高倉通をのぼる

(三百九十二)三條高倉通をのぼる

(三百九十三)三條高倉通をのぼる

(三百九十四)三條高倉通をのぼる

(三百九十五)三條高倉通をのぼる

(三百九十六)三條高倉通をのぼる

(三百九十七)三條高倉通をのぼる

(三百九十八)三條高倉通をのぼる

(三百九十九)三條高倉通をのぼる

(四百)三條高倉通をのぼる

(四百一)三條高倉通をのぼる

(四百二)三條高倉通をのぼる

(四百三)三條高倉通をのぼる

(四百四)三條高倉通をのぼる

(四百五)三條高倉通をのぼる

(四百六)三條高倉通をのぼる

(四百七)三條高倉通をのぼる

(四百八)三條高倉通をのぼる

(四百九)三條高倉通をのぼる

(四百十)三條高倉通をのぼる

(四百十一)三條高倉通をのぼる

(四百十二)三條高倉通をのぼる

(四百十三)三條高倉通をのぼる

(四百十四)三條高倉通をのぼる

(四百十五)三條高倉通をのぼる

(四百十六)三條高倉通をのぼる

(四百十七)三條高倉通をのぼる

(四百十八)三條高倉通をのぼる

(四百十九)三條高倉通をのぼる

(四百二十)三條高倉通をのぼる

(四百二十一)三條高倉通をのぼる

(四百二十二)三條高倉通をのぼる

(四百二十三)三條高倉通をのぼる

(四百二十四)三條高倉通をのぼる

(四百二十五)三條高倉通をのぼる

(四百二十六)三條高倉通をのぼる

(四百二十七)三條高倉通をのぼる

(四百二十八)三條高倉通をのぼる

(四百二十九)三條高倉通をのぼる

(四百三十)三條高倉通をのぼる

(四百三十一)三條高倉通をのぼる

(四百三十二)三條高倉通をのぼる

(四百三十三)三條高倉通をのぼる

(四百三十四)三條高倉通をのぼる

(四百三十五)三條高倉通をのぼる

(四百三十六)三條高倉通をのぼる

(四百三十七)三條高倉通をのぼる

(四百三十八)三條高倉通をのぼる

(四百三十九)三條高倉通をのぼる

(四百四十)三條高倉通をのぼる

(四百四十一)三條高倉通をのぼる

(四百四十二)三條高倉通をのぼる

(四百四十三)三條高倉通をのぼる

(四百四十四)三條高倉通をのぼる

(四百四十五)三條高倉通をのぼる

(四百四十六)三條高倉通をのぼる

(四百四十七)三條高倉通をのぼる

(四百四十八)三條高倉通をのぼる

(四百四十九)三條高倉通をのぼる

(四百五十)三條高倉通をのぼる

(四百五十一)三條高倉通をのぼる

(四百五十二)三條高倉通をのぼる

(四百五十三)三條高倉通をのぼる

(四百五十四)三條高倉通をのぼる

(四百五十五)三條高倉通をのぼる

(四百五十六)三條高倉通をのぼる

(四百五十七)三條高倉通をのぼる

(四百五十八)三條高倉通をのぼる

(四百五十九)三條高倉通をのぼる

(四百六十)三條高倉通をのぼる

(四百六十一)三條高倉通をのぼる

(四百六十二)三條高倉通をのぼる

(四百六十三)三條高倉通をのぼる

(四百六十四)三條高倉通をのぼる

(四百六十五)三條高倉通をのぼる

(四百六十六)三條高倉通をのぼる

(四百六十七)三條高倉通をのぼる

(四百六十八)三條高倉通をのぼる

(四百六十九)三條高倉通をのぼる

(四百七十)三條高倉通をのぼる

(四百七十一)三條高倉通をのぼる

(四百七十二)三條高倉通をのぼる

(四百七十三)三條高倉通をのぼる

(四百七十四)三條高倉通をのぼる

(四百七十五)三條高倉通をのぼる

(四百七十六)三條高倉通をのぼる

(四百七十七)三條高倉通をのぼる

(四百七十八)三條高倉通をのぼる

(四百七十九)三條高倉通をのぼる

(四百八十)三條高倉通をのぼる

(四百八十一)三條高倉通をのぼる

(四百八十二)三條高倉通をのぼる

(四百八十三)三條高倉通をのぼる

(四百八十四)三條高倉通をのぼる

(四百八十五)三條高倉通をのぼる

(四百八十六)三條高倉通をのぼる

(四百八十七)三條高倉通をのぼる

(四百八十八)三條高倉通をのぼる

(四百八十九)三條高倉通をのぼる

(四百九十)三條高倉通をのぼる

(四百九十一)三條高倉通をのぼる

(四百九十二)三條高倉通をのぼる

(四百九十三)三條高倉通をのぼる

(四百九十四)三條高倉通をのぼる

(四百九十五)三條高倉通をのぼる

(四百九十六)三條高倉通をのぼる

(四百九十七)三條高倉通をのぼる

(四百九十八)三條高倉通をのぼる

(四百九十九)三條高倉通をのぼる

(五百)三條高倉通をのぼる

(五百一)三條高倉通をのぼる

(五百二)三條高倉通をのぼる

(五百三)三條高倉通をのぼる

(五百四)三條高倉通をのぼる

(五百五)三條高倉通をのぼる

(五百六)三條高倉通をのぼる

(五百七)三條高倉通をのぼる

(五百八)三條高倉通をのぼる

(五百九)三條高倉通をのぼる

(五百十)三條高倉通をのぼる

(五百十一)三條高倉通をのぼる

(五百十二)三條高倉通をのぼる

(五百十三)三條高倉通をのぼる

(五百十四)三條高倉通をのぼる

(五百十五)三條高倉通をのぼる

(五百十六)三條高倉通をのぼる

(五百十七)三條高倉通をのぼる

(五百十八)三條高倉通をのぼる

(五百十九)三條高倉通をのぼる

(五百二十)三條高倉通をのぼる

(五百二十一)三條高倉通をのぼる

(五百二十二)三條高倉通をのぼる

(五百二十三)三條高倉通をのぼる

(五百二十四)三條高倉通をのぼる

(五百二十五)三條高倉通をのぼる

(五百二十六)三條高倉通をのぼる

(五百二十七)三條高倉通をのぼる

(五百二十八)三條高倉通をのぼる

(五百二十九)三條高倉通をのぼる

(五百三十)三條高倉通をのぼる

(五百三十一)三條高倉通をのぼる

(五百三十二)三條高倉通をのぼる

(五百三十三)三條高倉通をのぼる

(五百三十四)三條高倉通をのぼる

(五百三十五)三條高倉通をのぼる

(五百三十六)三條高倉通をのぼる

(五百三十七)三條高倉通をのぼる

(五百三十八)三條高倉通をのぼる

(五百三十九)三條高倉通をのぼる

(五百四十)三條高倉通をのぼる

(五百四十一)三條高倉通をのぼる

(五百四十二)三條高倉通をのぼる

(五百四十三)三條高倉通をのぼる

(五百四十四)三條高倉通をのぼる

(五百四十五)三條高倉通をのぼる

(五百四十六)三條高倉通をのぼる

(五百四十七)三條高倉通をのぼる

(五百四十八)三條高倉通をのぼる

(五百四十九)三條高倉通をのぼる

(五百五十)三條高倉通をのぼる

(五百五十一)三條高倉通をのぼる

(五百五十二)三條高倉通をのぼる

(五百五十三)三條高倉通をのぼる

(五百五十四)三條高倉通をのぼる

(五百五十五)三條高倉通をのぼる

(五百五十六)三條高倉通をのぼる

(五百五十七)三條高倉通をのぼる

(五百五十八)三條高倉通をのぼる

(五百五十九)三條高倉通をのぼる

(五百六十)三條高倉通をのぼる

(五百六十一)三條高倉通をのぼる

(五百六十二)三條高倉通をのぼる

(五百六十三)三條高倉通をのぼる

(五百六十四)三條高倉通をのぼる

(五百六十五)三條高倉通をのぼる

(五百六十六)三條高倉通をのぼる

(五百六十七)三條高倉通をのぼる

(五百六十八)三條高倉通をのぼる

(五百六十九)三條高倉通をのぼる

(五百七十)三條高倉通をのぼる

(五百七十一)三條高倉通をのぼる

(五百七十二)三條高倉通をのぼる

(五百七十三)三條高倉通をのぼる

(五百七十四)三條高倉通をのぼる

(五百七十五)三條高倉通をのぼる

(五百七十六)三條高倉通をのぼる

(五百七十七)三條高倉通をのぼる

(五百七十八)三條高倉通をのぼる

(五百七十九)三條高倉通をのぼる

(五百八十)三條高倉通をのぼる

(五百八十一)三條高倉通をのぼる

(五百八十二)三條高倉通をのぼる

(五百八十三)三條高倉通をのぼる

(五百八十四)三條高倉通をのぼる

(五百八十五)三條高倉通をのぼる

(五百八十六)三條高倉通をのぼる

(五百八十七)三條高倉通をのぼる

(五百八十八)三條高倉通をのぼる

(五百八十九)三條高倉通をのぼる

(五百九十)三條高倉通をのぼる

(五百九十一)三條高倉通をのぼる

(五百九十二)三條高倉通をのぼる

(五百九十三)三條高倉通をのぼる

(五百九十四)三條高倉通をのぼる

(五百九十五)三條高倉通をのぼる

(五百九十六)三條高倉通をのぼる

(五百九十七)三條高倉通をのぼる

(五百九十八)三條高倉通をのぼる

(五百九十九)三條高倉通をのぼる

(六百)三條高倉通をのぼる

(六百一)三條高倉通をのぼる

(六百二)三條高倉通をのぼる

(六百三)三條高倉通をのぼる

(六百四)三條高倉通をのぼる

(六百五)三條高倉通をのぼる

(六百六)三條高倉通をのぼる

(六百七)三條高倉通をのぼる

(六百八)三條高倉通をのぼる

(六百九)三條高倉通をのぼる

(六百十)三條高倉通をのぼる

(六百十一)三條高倉通をのぼる

(六百十二)三條高倉通をのぼる

(六百十三)三條高倉通をのぼる

(六百十四)三條高倉通をのぼる

(六百十五)三條高倉通をのぼる

(六百十六)三條高倉通をのぼる

(六百十七)三條高倉通をのぼる

(六百十八)三條高倉通をのぼる

(六百十九)三條高倉通をのぼる

(六百二十)三條高倉通をのぼる

(六百二十一)三條高倉通をのぼる

(六百二十二)三條高倉通をのぼる

(六百二十三)三條高倉通をのぼる

(六百二十四)三條高倉通をのぼる

(六百二十五)三條高倉通をのぼる

(六百二十六)三條高倉通をのぼる

(六百二十七)三條高倉通をのぼる

(六百二十八)三條高倉通をのぼる

(六百二十九)三條高倉通をのぼる

(六百三十)三條高倉通をのぼる

(六百三十一)三條高倉通をのぼる

(六百三十二)三條高倉通をのぼる

(六百三十三)三條高倉通をのぼる

(六百三十四)三條高倉通をのぼる

(六百三十五)三條高倉通をのぼる

(六百三十六)三條高倉通をのぼる

(六百三十七)三條高倉通をのぼる

(六百三十八)三條高倉通をのぼる

(六百三十九)三條高倉通をのぼる

(六百四十)三條高倉通をのぼる

(六百四十一)三條高倉通をのぼる

(六百四十二)三條高倉通をのぼる

(六百四十三)三條高倉通をのぼる

(六百四十四)三條高倉通をのぼる

(六百四十五)三條高倉通をのぼる

(六百四十六)三條高倉通をのぼる

(六百四十七)三條高倉通をのぼる

(六百四十八)三條高倉通をのぼる

(六百四十九)三條高倉通をのぼる

(六百五十)三條高倉通をのぼる

(六百五十一)三條高倉通をのぼる

(六百五十二)三條高倉通をのぼる

(六百五十三)三條高倉通をのぼる

(六百五十四)三條高倉通をのぼる

(六百五十五)三條高倉通をのぼる

(六百五十六)三條高倉通をのぼる

(六百五十七)三條高倉通をのぼる

(六百五十八)三條高倉通をのぼる

(六百五十九)三條高倉通をのぼる

(六百六十)三條高倉通をのぼる

(六百六十一)三條高倉通をのぼる

(六百六十二)三條高倉通をのぼる

(六百六十三)三條高倉通をのぼる

(六百六十四)三條高倉通をのぼる

(六百六十五)三條高倉通をのぼる

(六百六十六)三條高倉通をのぼる

(六百六十七)三條高倉通をのぼる

(六百六十八)三條高倉通をのぼる

(六百六十九)三條高倉通をのぼる

(六百七十)三條高倉通をのぼる

(六百七十一)三條高倉通をのぼる

(六百七十二)三條高倉通をのぼる

(六百七十三)三條高倉通をのぼる

(六百七十四)三條高倉通をのぼる

(六百七十五)三條高倉通をのぼる

(六百七十六)三條高倉通をのぼる

(六百七十七)三條高倉通をのぼる

(六百七十八)三條高倉通をのぼる

(六百七十九)三條高倉通をのぼる

(六百八十)三條高倉通をのぼる

(六百八十一)三條高倉通をのぼる

(六百八十二)三條高倉通をのぼる

(六百八十三)三條高倉通をのぼる

(六百八十四)三條高倉通をのぼる

(六百八十五)三條高倉通をのぼる

(六百八十六)三條高倉通をのぼる

(六百八十七)三條高倉通をのぼる

(六百八十八)三條高倉通をのぼる

(六百八十九)三條高倉通をのぼる

(六百九十)三條高倉通をのぼる

(六百九十一)三條高倉通をのぼる

(六百九十二)三條高倉通をのぼる

(六百九十三)三條高倉通をのぼる

(六百九十四)三條高倉通をのぼる

(六百九十五)三條高倉通をのぼる

(六百九十六)三條高倉通をのぼる

(六百九十七)三條高倉通をのぼる

(六百九十八)三條高倉通をのぼる

(六百九十九)三條高倉通をのぼる

(七百)三條高倉通をのぼる

(七百一)三條高倉通をのぼる

(七百二)三條高倉通をのぼる

(七百三)三條高倉通をのぼる

(七百四)三條高倉通をのぼる

(七百五)三條高倉通をのぼる

(七百六)三條高倉通をのぼる

(七百七)三條高倉通をのぼる

(七百八)三條高倉通をのぼる

(七百九)三條高倉通をのぼる

(七百十)三條高倉通をのぼる

(七百十一)三條高倉通をのぼる

(七百十二)三條高倉通をのぼる

(七百十三)三條高倉通をのぼる

(七百十四)三條高倉通をのぼる

(七百十五)三條高倉通をのぼる

(七百十六)三條高倉通をのぼる

(七百十七)三條高倉通をのぼる

(七百十八)三條高倉通をのぼる

(七百十九)三條高倉通をのぼる

(七百二十)三條高倉通をのぼる

(七百二十一)三條高倉通をのぼる

(七百二十二)三條高倉通をのぼる

(七百二十三)三條高倉通をのぼる

(七百二十四)三條高倉通をのぼる

(七百二十五)三條高倉通をのぼる

(七百二十六)三條高倉通をのぼる

(七百二十七)三條高倉通をのぼる

(七百二十八)三條高倉通をのぼる

(七百二十九)三條高倉通をのぼる

(七百三十)三條高倉通をのぼる

(七百三十一)三條高倉通をのぼる

(七百三十二)三條高倉通をのぼる

(七百三十三)三條高倉通をのぼる

(七百三十四)三條高倉通をのぼる

(七百三十五)三條高倉通をのぼる

(七百三十六)三條高倉通をのぼる

(七百三十七)三條高倉通をのぼる

(七百三十八)三條高倉通をのぼる

(七百三十九)三條高倉通をのぼる

(七百四十)三條高倉通をのぼる

(七百四十一)三條高倉通をのぼる

(七百四十二)三條高倉通をのぼる

(七百四十三)三條高倉通をのぼる

(七百四十四)三條高倉通をのぼる

(七百四十五)三條高倉通をのぼる

(七百四十六)三條高倉通をのぼる

(七百四十七)三條高倉通をのぼる

(七百四十八)三條高倉通をのぼる

(七百四十九)三條高倉通をのぼる

(七百五十)三條高倉通をのぼる

(七百五十一)三條高倉通をのぼる

(七百五十二)三條高倉通をのぼる

(七百五十三)三條高倉通をのぼる

(七百五十四)三條高倉通をのぼる

(七百五十五)三條高倉通をのぼる

(七百五十六)三條高倉通をのぼる

(七百五十七)三條高倉通をのぼる

(七百五十八)三條高倉通をのぼる

(七百五十九)三條高倉通をのぼる

(七百六十)三條高倉通をのぼる

(七百六十一)三條高倉通をのぼる

(七百六十二)三條高倉通をのぼる

(七百六十三)三條高倉通をのぼる

(七百六十四)三條高倉通をのぼる

(七百六十五)三條高倉通をのぼる

(七百六十六)三條高倉通をのぼる

(七百六十七)三條高倉通をのぼる

(七百六十八)三條高倉通をのぼる

(七百六十九)三條高倉通をのぼる

(七百七十)三條高倉通をのぼる

(七百七十一)三條高倉通をのぼる

(七百七十二)三條高倉通をのぼる

(七百七十三)三條高倉通をのぼる

(七百七十四)三條高倉通をのぼる

(七百七十五)三條高倉通をのぼる

(七百七十六)三條高倉通をのぼる

(七百七十七)三條高倉通をのぼる

(七百七十八)三條高倉通をのぼる

(七百七十九)三條高倉通をのぼる

(七百八十)三條高倉通をのぼる

(七百八十一)三條高倉通をのぼる

(七百八十二)三條高倉通をのぼる

(七百八十三)三條高倉通をのぼる

(七百八十四)三條高倉通をのぼる

(七百八十五)三條高倉通をのぼる

(七百八十六)三條高倉通をのぼる

(七百八十七)三條高倉通をのぼる

(七百八十八)三條高倉通をのぼる

(七百八十九)三條高倉通をのぼる

(七百九十)三條高倉通をのぼる

(七百九十一)三條高倉通をのぼる

(七百九十二)三條高倉通をのぼる

(七百九十三)三條高倉通をのぼる

(七百九十四)三條高倉通をのぼる

(七百九十五)三條高倉通をのぼる

(七百九十六)三條高倉通をのぼる

(七百九十七)三條高倉通をのぼる

(七百九十八)三條高倉通をのぼる

(七百九十九)三條高倉通をのぼる

(八百)三條高倉通をのぼる

(八百一)三條高倉通をのぼる

(八百二)三條高倉通をのぼる

(八百三)三條高倉通をのぼる

(八百四)三條高倉通をのぼる

(八百五)三條高倉通をのぼる

(八百六)三條高倉通をのぼる

(八百七)三條高倉通をのぼる

(八百八)三條高倉通をのぼる

(八百九)三條高倉通をのぼる

(八百十)三條高倉通をのぼる

(八百十一)三條高倉通をのぼる

(八百十二)三條高倉通をのぼる

(八百十三)三條高倉通をのぼる

(八百十四)三條高倉通をのぼる

(八百十五)三條高倉通をのぼる

(八百十六)三條高倉通をのぼる

(八百十七)三條高倉通をのぼる

(八百十八)三條高倉通をのぼる

(八百十九)三條高倉通をのぼる

(八百二十)三條高倉通をのぼる

(八百二十一)三條高倉通をのぼる

(八百二十二)三條高倉通をのぼる

(八百二十三)三條高倉通をのぼる

(八百二十四)三條高倉通をのぼる

(八百二十五)三條高倉通をのぼる

(八百二十六)三條高倉通をのぼる

(八百二十七)三條高倉通をのぼる

(八百二十八)三條高倉通をのぼる

(八百二十九)三條高倉通をのぼる

(八百三十)三條高倉通をのぼる

(八百三十一)三條高倉通をのぼる

(八百三十二)三條高倉通をのぼる

(八百三十三)三條高倉通をのぼる

(八百三十四)三條高倉通をのぼる

(一) 瑞龍山、臨濟宗南禪寺派本山。もと龜山上皇の離宮

(二) 出典未詳

(三) 出典未詳

第四圖

(88)

(88)

(一) 南禪寺 (二) 思ひ (三) 百たび

(一) 僅語 (二) 僅語 (三) 僅語 (四) めぐれや (五) めでた〳〵の

(88)

(88)

(一) 黄粱一炊の夢、邯鄲の夢、盧生の故事

(二) 荘子が夢に胡蝶となりし故事（荘子齊物論参照）

(三) 青柳の糸絶えず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長く傳はり鳥の跡久しくとゞまれらば（古今集序）

もとりたり、二人共にとりたり〳〵とかんに給ふ御こゑ、みゝのあたりにとゞきりて、ねざめのとこにまくらをあげ、つら〳〵これをおもふに、くわうりやうが一すい、せうしがこてう、五十年も百ねんも、うしのよだれのはてもなく、松のはのちりうせず、つきぬ御代こそめでたけれ。

ほうらい物語

上

むかしがいまにいたるまで、めでたきためしにつたへ侍る事、かずくおほきその中に、ことにすぐれてきどくなるは、不老不死のくすりとて、老たるかたちをひきかへして、二たびもとのすがたとなし、もとよりわかきともがらは、よはひをのべていつまでも、かはらぬ色はときは木や、松のみどりのすゑながく、たもつ命はかぎりもなし。

そも〳〵、此くすりのいづるところをたづぬれば、蓬萊山にありといふ。しかるにこの山

(一)藐姑射之山、有二神人一居焉。肌膚若二氷雪一、淖約若二處子一（莊子、逍遙遊）

(二)との誤か

は、大海のうちにありて、諸もろ〳〵の仙人のあつまりすむ所なり。集住或ひはこの山を、(一)藐姑射古はこや唐土の山とも名づけたり。帝もろこしのいにしへ、五帝にあたり、四代のみかどをば唐堯と申す。古帝のみかどみづからこの山にみゆきありて、四人の神仙にあひ給ふ。仙人大きによろこびて、不老不死のくすりを奉り侍りけり。唐堯すでにみやこにかへり給ひて、人にほどこしあたへんと思召おぼしめしけれども、此みかどと申は、これ上代のせい聖人なり。五常の道をたゞしくして、天理のまことをたうとびて、人にをしへて、世をおさめける道をつたへたまひ、すゑの世までも絶たえさじと、つねに心がけ給ふ。もし此くすりを人にあたへ、よはひ久しく命つきずば、この薬くすりをたのみをして、(二)〔マヽ〕恣ほしゐまゝに世をみだし、五常の道をわすれては、天理のまことをや破ぶるべし。しからば國家もみだれつゝ、世のしづまる事あらじと、かねてよりすゑの世を、深ふかくおもひとをくはかりて、不老不死のくすりを世にひろめ給はず、箱の内にかくしつゝ、埋うづみをかせ給ひけり。そのくすりのとく徳ゆへに、山中大にうるほひて、草木はなはださかえたり。又此くすりの箱の上に、黄精といふ草生たり。のちの世の仙人此草をとり得て、丹薬をねりてふくすとかや。長生不死の薬草にて、今の世までも黄せいは、命を養やしなふ三百六十種の草木の中の第一とす。

しかるにかの蓬萊山さんと申すは、これよりなんかいにむかつて、三萬餘里のはたうをへて、

南海向

(二)南冥者天池也（莊子、逍遙遊）

(三)有二巨鰲之龜一負二蓬萊之山一而拝舞二滄海之中一也、（列仙全傳）

列子、湯問篇第五參照

(三)此花是非二人間一種一、菅三品と後江相公とが偶然作り合はせし名句（朗詠集下雑「親王附王孫」但しそは竹の園生の御胤のやんごとなきかた稱へしなり）

(四)琢玕之樹皆叢生、挙實皆有二滋味一、食レ之皆不レ老不レ死（列子、湯問篇）

その次の大海を滄海と名づけたり。水のいろ色くろ黒うして、深ふかき事かぎりなし。このゆ放へに黒海ともなづけたり。風ふく吹事なければ、波常高くたかくあがり、煙まん〳〵としてたゞよへたれども、雲の波けぶりのなみ、そのたかさ百餘丈、日夜にさらにやむ更事なし。世のつねの事には、船筏ふねもいかだもかよふ通事なければ、人げんなが長くへだゝりぬ。天仙神力のともがらのみ、心にまかせてわたる渡放ゆへに、又はこの海を天池とも名づくとかや。かのめいかい溟海をわたる渡事、又三萬里をうち過て、ほうらい蓬萊山の峰にいたる到。此山はじめてあらはれし、そのいにしへを按あんずるに、我朝神代のそのかみ、唐土もろこし三皇の第一、伏羲氏の御時に、大海の底に六の龜これあり。年を重かさねごうを劫つみて、その大さ一萬里なり。或あるとき時六の龜ひととところに所あつまりて、海中にたゞよふところの大山を、甲にのせてさしあげたり載。もとより此山は、もろ〳〵の諸寶のあつまりすむ集所なり。或あるひはこの山を、(一)藐姑射はこや唐土の山とも名づけたり。帝もろこしのいにしへ、五帝にあたり、四代のみかどをば唐堯と申す。古帝のみかどみづからこの山にみゆきありて、四人の神仙にあひ給ふ。仙人大きによろこびて、不老不死のくすりを奉り侍りけり。唐堯すでにみやこにかへり給ひて、人にほどこしあたへんと思召おぼしめしけれども、此みかどと申は、これ上代のせい聖人なり。五常の道をたゞしくして、天理のまことをたうとびて、人にをしへて、世をおさめける道をつたへたまひ、すゑの世までも絶たえさじと、つねに心がけ給ふ。もし此くすりを人にあたへ、よはひ久しく命つきずば、この薬くすりをたのみをして、(二)〔マヽ〕恣ほしゐまゝに世をみだし、五常の道をわすれては、天理のまことをや破ぶるべし。しからば國家もみだれつゝ、世のしづまる事あらじと、かねてよりすゑの世を、深ふかくおもひとをくはかりて、不老不死のくすりを世にひろめ給はず、箱の内にかくしつゝ、埋うづみをかせ給ひけり。そのくすりのとく徳ゆへに、山中大にうるほひて、草木はなはださかえたり。又此くすりの箱の上に、黄精といふ草生たり。のちの世の仙人此草をとり得て、丹薬をねりてふくすとかや。長生不死の薬草にて、今の世までも黄せいは、命を養やしなふ三百六十種の草木の中の第一とす。

しかるにかの蓬萊山さんと申すは、これよりなんかいにむかつて、三萬餘里のはたうをへて、

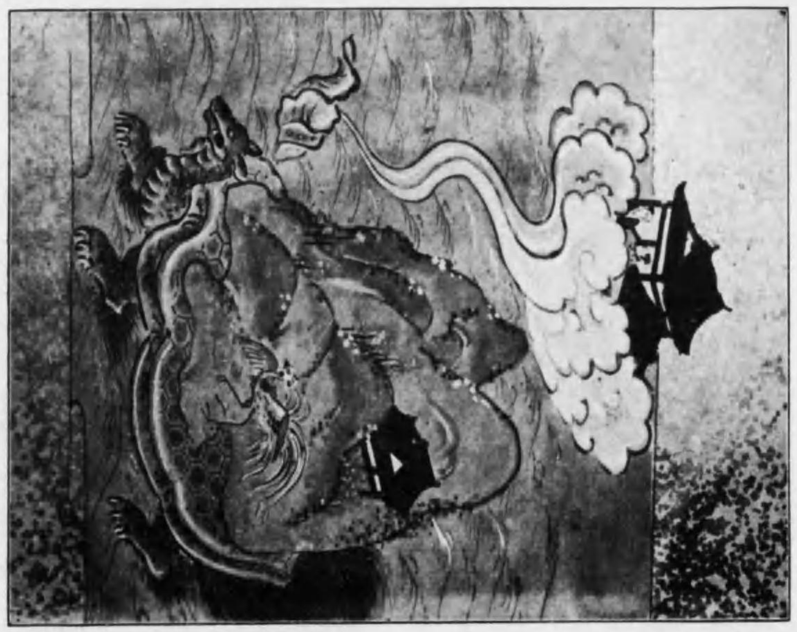
南海向

その次の大海を滄海と名づけたり。水のいろ色くろ黒うして、深ふかき事かぎりなし。このゆ放へに黒海ともなづけたり。風ふく吹事なければ、波常高くたかくあがり、煙まん〳〵としてたゞよへたれども、雲の波けぶりのなみ、そのたかさ百餘丈、日夜にさらにやむ更事なし。世のつねの事には、船筏ふねもいかだもかよふ通事なければ、人げんなが長くへだゝりぬ。天仙神力のともがらのみ、心にまかせてわたる渡放ゆへに、又はこの海を天池とも名づくとかや。かのめいかい溟海をわたる渡事、又三萬里をうち過て、ほうらい蓬萊山の峰にいたる到。此山はじめてあらはれし、そのいにしへを按あんずるに、我朝神代のそのかみ、唐土もろこし三皇の第一、伏羲氏の御時に、大海の底に六の龜これあり。年を重かさねごうを劫つみて、その大さ一萬里なり。或あるとき時六の龜ひととところに所あつまりて、海中にたゞよふところの大山を、甲にのせてさしあげたり載。もとより此山は、もろ〳〵の諸寶のあつまりすむ集所なり。

靈歌
ちあやしきけだもの、珍獣めづらしき鳥かず〳〵生産す。角のかたち形、毛の色、つばさの翼よそほひ、
鳴聲白をのづから天地五行の德にしたがひ從、五つの調子みだるゝ亂事なし。
我朝神代のいにしへ古、天照皇太神あまの天岩戸に閉籠とぢこもらせ給ひしかば、國のうち內常闇とこやみの夜よとなりにけり。その時八萬の神たち、岩戸のまへ前にしてこれをなげき歎たまひ給、いかにもして
二たゞび太神を、岩戸より出し奉らんと、さまざまはかりごと謀をめぐらし給ふ。こゝに思兼金ねの深慮みこと遠慮とをくおもひふかく謀はかりて、天野香久山の眞榊根をねざしにして、上の枝にはかゞみ鏡をかけ懸、下の枝には白幣・青幣をかけ懸給ひ、庭火をたき焚、神樂舞をそうしまひ給ひけり。又はかりごと謀をめぐらして、常世の國のくにによりも長鳴鳥をもとめよせて寄、岩戸のまへ前にて鳴なかせられしに、太神の御心なだまらせ給たまひて、二たび岩戸を出させおはしましけり。されば常世世の國といふは、蓬萊ほうらい山の事なり。長鳴鳥と申すは、これには鳥の事なり。この鳥世の中におほき多物にて侍れば、人さらに更めづらしからず珍思へども、あかつきごとの時毎をたがへず、八こゑをととなふる奇特聲唱のきどくは、又よの餘鳥にくらべ較がたし難。まことに仙境の名鳥なれば、神世にもなをもてなし給ひ、今にいたつてやしろ社にには庭鳥はかひ飼給へり。
又すいにん垂仁天皇の御時、田道間守といふ臣下仰つけて、常世の國の香菓をもとめさせ給ふに、
間守すなはち乃勅命をうけまいり、常世の國に行向むかふて 香菓をもとめ得て 帝みかどにこれを

(一)木火土金水
(二)宮商角徵羽
(三)古事記上・書紀神代卷上參照
(四)故、思兼神深謀遠慮（書紀、天磐戶の段）
(五)世の字 一字衍なるべし
(六)古事記中（垂仁天皇）書紀六、垂仁紀參照
(七)古事記中（應神天皇、天之日矛の條）參照
(八)仰の上 に の字脫か
(九)ときじくのかくのこのみ（非時香菓）
(一〇)まの上 た の字脫か。いはは の誤かうけたまはり

（一〇〇頁參照）



上卷插繪

（九三頁參照）

獻たてまつりき。かくのみと申は、今我てうに植留たり。右近衞のこんのまへ(マヽ)前に、橘をうへらるゝも此ゆへとぎこえしなり。

しかるにこれより天上に、大清宮・大玄宮・大眞宮などとて、そのかみ世界はじまりしその古にしへよりこのかた、長生不死の大仙王天帝の都あり。此内にすみ給ふ天仙・飛仙のともがら、遙はるかに此山をみそなはし、これしやう(淨)〳〵のれい靈地なりとて、或あるひは冥海波路むる事ろく陸地をゆく行がごとく、或あるひは蒼どの空をかける事鳥のとぶがごとくに、天上より天あまくだり降、この山にすみ給へば、十方諸國の仙人は、皆みな此山に行通ひて、樂たのしみをきはむとかや。かゝりければ天仙・飛仙の神力により樓て、宮殿ろうかく重々にして、七寶ほうをちりばめつゝ、自をのづから出生せり。十二の玉ろう、九重のきんしつ、ひだりには珠たまの池なり、右にはみどりのいづみあり。池の内には五色のうろこ魚をあり。そのほかなをはうこゐんたいらうそんたる木をきしれり。又めい海なみのうちに、大蜃のはまぐりありて氣をはく。その氣にしたがひて五色の雲空にたなびき、雲のうへにみつの宮殿あり。鳳のいらかたかくそびえ、かうのうつばりながくわだかまれり。すべてあらゆるくうでんろうかく、ごんじやうきれいさ申ばかりなし。めなうのはしら、こはくのなげし、さんごのらんかん、黄金のたる木、しやこうのすだれにしんじゆのやうらくをかけ、すいりやうの戸、たいまいの頂、るりのかはらをならべたり。

(一) ちの譌寫かちん(陣)なるべし
(二) 金室か
(三) 給一名髮、能吐氣爲二槐峯一(靈苑)
(四) 寶室莊嚴に事を寄せ、奇麗嚴淨を難ど好、僧衆無二慈悲一不正直にして(下略)(太平記二十四、依二山門嗷訴一公卿會議事)
(五) しの譌か。水晶

(一) 或はけの誤か
(二) 庭の砂は金銀の〳〵玉をつられて散妙の錦や瑠璃の欄や瑠璃の階、池の汀の鵝鸛のは、蓬萊山もよそならず、君の憲ぞありがたき〳〵（謡曲、鵜飼）
(三) ぎん（吟）ずる或はき、（嬉々）の誤か
(四) 聞く の誤寫らし
(五) そも天の濃漿とは是れ仙家の酒の名なり（謡曲、邯鄲）
(六) 漢の武帝の築きし柏臺の名、柏を以て梁となすより名づく 元鼎二年春起二柏梁臺一（漢書武帝紀）
(七) れ（煉）るの誤寫か
(八) れん（煉）丹か
(九) 上古有二大椿者一、以二八千歲一爲レ春、以二八千歲一爲レ秋（莊子、逍遙遊）

らんじや・ちんすいのくうのにほひ、長（久）しき、池には八功徳の水をたゝへたり。池のみぎはにはほうわう・くじやく・かれうびん、そのほかいろかもめづらしく、もう〳〵の鳥あつまりつゝ、羽されをならべてきへすることなく、なりしだれたる花のいろ、なりしだれぬる菓のにほひ、四方にくんじくにこゝろぞすみ渡る。さきみだれたる花のいろ、なりしだれぬる菓のにほひ、四方にくんじ蠟類更にたぐひはさらにあるべからず。もう〳〵の仙人花にたはむれ水にあそび、樂をそうし舞をなし、四しゆのしたし・五色のかうり・くわさう・水瓜を食として、きよくれい金漿の天上のこんずの酒、玉のさかづきをかたぶけて、たのしみにほこるありさまは、たとへんかたはなかりけり。

又ひとつのうてなあり、柏梁臺と名付たり。たかさ五丈のはたほこの上に白がねの盤ありて、天にほふさゝげたり。秋のゆふべの白露を、ばんの中にうけとゞめて、これをぬるに糖となる。これをもちひてねんたんのくん薬とせり。又青霜・玄雪とて、雪霜までもところがらに、命をのぶる薬となる。又ひとつのくうでんあり。七ほうをちりばめ、二重に軒をかさへたり。軒の上にがくあり、長生殿とうちたり。御殿の前に門あり、門のがくには不老門と書たりけり。御殿のまへには、白大椿をうへたり。八千ざいをはるとして、又八千歳を秋とするとしるしたり。ちぎりのふかきたとへにも、八千世をこめし玉つばき、かはらぬいろとよみたりけるうた

の心もこれぞかし。かの長生殿のうちには、不老不死のくすりあり。これ天帝のおさめ給ひしところなり。こがねのうてなの上に、るりのつぼに入給ひしまへには、もろ〳〵の花をそなへ、つねにめいかうをたきつゝ、八人の天仙日夜に番をつとめ、又門には十六人の鬼神ありて、かたくこれをまもるとかや。このくすりのにほひ、あまねく四方にくんじて、雲路をさしてさる。のぼる空には五色の雲たなびき、天人つねにやうがうす。此薬をふくすれば、かたちはいつもわかやかに、よはひかたぶくこともなく、命もさらにかぎりなし。さればもろこしの麻姑といふ仙人は、そのかみ織母のざんげんによつて、年十五と申せしとき、父母の家をわけ出て、山にこもりし女なり。をのづから仙じゆつをさとりて、ほうらい山にわたりつゝ、不老不死の薬をなめたり。それより三百餘さいの後、張童花といふ人に山中にして行合て、むかしの事をかたりければ、そのときのかほかたち、さらにいにしへにたがはずとなり。

玉棒かはらぬ色を八千代とも三神の山ぞ常磐なるべき 民部卿經光（新後撰二〇、賀、寛元四年悠紀風俗歌、三神山）

(一) 麻姑山に住みし指の爪の長き仙女、まごの手（爪杖）は此の仙女の故事に出づといふ 五車韻瑞・毅二麻姑山記二云、王方平降二蔡經家一召二麻姑一至、年若二十七八一、女子二指爪長數寸一（下略）（和漢三才圖會、二六、服玩具）

下

(二) 史記六、秦始皇本紀・太平記二六、妙吉侍者事附秦始皇帝事等參照

かゝるめでたきくすりなればきく人ごとにうらやみて、もとむるといへども、たよりはさらになかりけり。(二)もろこし秦の始皇の御とき、天下ことぐ〳〵くおさまり、始皇みづから御身のあ

京都帝大（文學部）本　下卷

(一)かたの下 ぶきの二字脱か

(二)又云ふ 徐帝

(三)　　)内十七字衍

らるゝに、(二)徐福といふ道士ありて、帝みかどへ奏そう
のくすりをもとめえて奉るべし。然しからば此くすり
にいたつてとるべし。但し風あらく波たかけれ
子ども男女をの〳〵五百人を舟にのせて、しゝそん〳〵
やがてとり得てたてまつらんと申ければ、帝みかど大きによろこび給ひ
て、大船をこしらへ、千人の「(三)大海にこそうかびけれ。風あとりのりて」子どもをのせ、ちよ
ふくこれにとりのりて、大海にこそうかびけれ。風あらく波たかく、目にはほうらいの山をみ

筆曙 くわたとへんかたもなかりしに、つら〳〵心
思 におぼしけるは、縦たとひ天下をばたなごゝろ
治 の内におさむるとも、年かさなればよはひか
老 たおひる身のはてしには、空むなしからんうた
果 がひなし。願ねがはくはよはひかたぶかず命か
傳 ぎりなき長生不死の仙じゆつをつたへ、蓬ほう
藥 らい山の不老ふ死のくすりをもとめてあたふ
諸國 る人やあると、天下のうちしよこくをたづね
聞 奏 聞 願 歩 給 ふ 所 なれと、帝みかど大きによろこび給ひ
載 て、大船をこしらへ、千人の「(三)大海にこそうかびけれ。風あとりのりて」子どもをのせ、ちよ
取乘 ふくこれにとりのりて、大海にこそうかびけれ。風あらく波たかく、目にはほうらいの山をみ

(二)又云ふ 徐帝

(三)　　)内十七字衍

れども、岸きしによるべきやうもなし。船波ふねをあぐるとき時は、天上の雲にのぼるべく、波より
下 舟のをるゝ時は、底龍宮のそこにもいたるべし。到しかも鮫龍といふおそろしきもの、其船ふねにつ
きしかば、舟さらにはたらかず。徐福乃ちよふくすなはちこれをしたがへんとて、従舟端にたに五百のき
やうどをしつらひ、鮫龍のうかびあがるをあひまち、或時鮫龍あるときかうりう水の上にうかび出たり。
頭 かうべは獅子のかしらに似て、角生つのおひかみみだれ、鬣逆さかしまにかさなり、重
如 たるごとくなり。うろこさかしまにかさなり、待設まちまふけたる事なれば、五百のれんどの石ゆみを
同 一どうにはなちたれば、鮫龍かうりうこれにうたれ
放 なしくなり、大海の水このゆへに血にへんじて
著 山にはゆきつかで、舟にのせたるどうなん・くわん女はいたづらに老おとろへ、舟は風にはな
方 されて行がたしらずなくなりにけり。
知
(二)唐土漢武帝 又もろこしかんのぶていは、これも長生不死のみちをもとめて、西王母といふ仙人をまねきし
學 やうじて、仙じゆつをまなび給ふ。王母すなはち勅におふじて禁中にさんだいし、七菓の桃を
獻 たてまつり、丹砂・雲母・きよくはくをねり、此芝黄精の仙薬をとゝのべ、つみにほうらいの
不 ふ死のくすりをたてまつりき。それより唐の世にうつりて、(四)玄宗皇帝の御とき、やうきひのた

(二)少女

(三)漢武内傳・唐物語（一六）・謡曲西王母・東方朔等參照

(四)未詳　玉環か

白氏文集一二、長恨歌並傳・唐物語（一八）・謡曲楊貴妃等參照

18151

(一)八方、四海の内に在りていづれも人跡稀絶の處なりといふ。即ち祖洲・瀛洲・玄洲・炎洲・長洲・元洲・流洲・生洲・鳳麟洲・聚窟洲(十洲記・東朔記)

(二)澤上有二三神山一、曰二蓬萊一、曰二方丈一、曰二瀛洲一、謂二之三島一(神仙傳)

(三)七月七日長生殿夜間無人私語時在天願作比翼鳥在地願爲連理枝(長恨歌)

(四)其内綽約多仙子中有一人字太眞(同上)

(五)驪山に在る玄宗の離宮

(六)龍鳴錄云、八月望日唐明皇與二楊貴妃一遊二月宮一(中略)見二素娥十餘人一、皓衣乘二白鸞一、笑舞於庭大桂樹下一、樂音清麗、上皇歸製二霓裳羽衣曲一(書言故事)

行方尋きのゆくゑをたづねさほしくおぼしめして、方士におほせてもとめ給ふに、方士すなはちちよ命承くめいをうけ給はり、十洲(一)・三島(二)の間をあまねくたづね巡めぐるところに、かのほうらいの山のうち、大眞宮にてたづね遇あふ。七月七日ほし合の夜のころ、ひよくれんりのかたらひ、ねん私語ごろなるさゝめごとおはしけりといふ事は、此ときにぞしりにける。やうきひと申すもほうら楊貴妃(三)蓬萊(四)現かれといひこれといひ、まことにたつとき事どもなり。

こゝに紀伊の名草のこほり(安養)に、あづみの安彦とて、つりするあまのありけるが、はるものどかにうらゝかなる波にうかべる小舟にさほさして、おきのかたにこぎ出し魚をつるところに、にはかに風ふきおちて、波たかくあがりつゝ、雪の山のごとくなり。安彦心ちまどひて、舟をなぎさによせんとすれど

も、風はいよ〳〵はげしくふき、波なみはますます荒あらくうちければ、力ちからなくかぜにまかせ波なみにひかれて、南をさしてはせ行ゆく。かくてゆく事とぶがごとく、一日二日とはするほどに、いづくとはしらずひとつの山に吹寄よせたり。安彦少心地すこしこゝちなをりて、舟よりあがり、山のてい體をこゝろしづかに見わたせば、金銀・すいしやうは峯をかざり、草木の花も世に變聞かはり、きゝなれぬとりのこゑ、何となにいつけてもさらに人間のさかひともおぼえず。上いそも九錦・八極をへだてゝけんこんの外なるらんと、あやしくおもひてたちやすらふところに、年のころはたちばかりの女ばうたち七八人、なぎさにそふて岩まをつたひ、あゆみきたりしあり、さまは、雲のびんづら、あすみのまゆ、ひすいのかんざし、たまのやうらく、花をかざりしよそほひ、こゝろもことばもをよばれず、らうたくうつくしうみえけるが、安彦を見給ひ大きにおどろきの給ふやう、そもこゝはほうらいの山とて、はるかに人間をへだてたるしやうの仙境なれば、たやすく人の通べき所ならず。なんぢいかなるものなれば、これまでは來りけるやらんとの給ふ。安ひこうけたまはり、かうべをちにつけ手をあはせて申やう、それがしはこれより大日本紀伊の國名草のこほりにすまひして、うら人ま舟にさほさして、玉藻を拾ひろひいそなをとり、又つりざほをたづさへて、魚をとりて世をわたる、いやしきあまのたぐひなり。しかるに我一ぞふのふねにさほさして、おきに出てうをゝとらんとせしところに、に

(一)かの誤寫なるべし

(二)脫文か

(三)脫字か

はかに大風ふきをちて、波なみにをくられ風には吹落せられて、心ならず此地にきたれり。願はくは恵助めぐみをたれてたすけさせ給へと申。女房たちの給ふやう、みづからお各〳〵よのつねの人間にも侍らず。おなじく仙家の數に有ざれば、なんぢらにことばをかはすべき事ならねども、汝等言葉思ひおもひかけず此地にきたるも、又ゆへありて、生れてより此かた、心にいかりをわすれて慈悲深少直くすくなく、正じきにしてものをあはれみ、ちひふかきそのまこと天理にかなひ、ことゆへなく此ところに來る事をえたるなり。さらば仙境のありさまを見せ侍らんに、まづ溟海の水に浴よくせよとの給ふ。やすひこ水に浴すれば、かじけくろみしはだえは、たちまちに色しろくこまやかにわかやぎたり。又一りうのくすりをあたへてのましめ給ふに、やすひこおろかなるまよひのむね、忽霧露明たちまちにきりはれてさやかなる月にむかふがごとくにて、自然智をぞさとりける。

かくて安彦は七人の女仙にともなひて、蓬萊宮の間をめぐりてこれを見るに、實まことにみめうきれいなり。かゝる所は生れてより此かた、目に見し事はいふにおよばず、みゝにきゝたるためしもなし。見れども〳〵珊珍いやめづらかに、あきたる事さらになし。又かたはらよりひとりの仙人たち出て、こゝろもことばをよばぬほどのいしやうをあたへ、てむのこんず・げんほのなし・こんろんのなつめなど、さしもにめづらしき物をあたへければ、いよ〳〵心もさはやかに、とびたつばかりにおぼえたり。それより不老門のうち、長生殿つれゆきて、此仙人かたりけるは、いかにこれこそはなんぢもさだめて聞をよびけん、不老ふ死の薬は此宮中にこめられて、たやすく人にはほどこしあたふる事なけれども、なんぢが心のちひふかく正じきにしてかんずるゆへに、これをなんぢにあたへんとて、すなはちこれをとり出し、るりのつぼのうちより七はうのうつわ物にうつしいれて、安彦にたびてけり。安彦これを給はりて、いまはいとま申て、二たびふるさとにかへらむと申す。さらば心にまかせよとて、やがてふねよせ給ひければ、七人の仙女はきしまでたち出給ひて、東門の爪南花の桃、玄雪の煉丹をやすひこに給はりぬ。かくてともづなをとき、溟海にうかびけれども、みなみの風徐々とふきて、日本のきしにつきにけり。きのふけふとはおもへども、ふるさとは山川所をかへ、しれる人はさらになし。晉の王質が仙家よりかへりし事・水の江のうら島子がりうぐうよりかへりたりしむかしのためしにつゆたがはず、安彦もやうやく七世のまごにたづねあひたり。今やすひこも三百餘年をすぎにけり。

帝みかど此よしきこしめしをよばせ給ひ、ちよくしをたてゝめされけり。安彦ちよくしにしたがひて、いそぎさんだいつかまつり、ほうらい山のありさまつぶさにそうもん申て、不老ふ死の薬

*崑崙山に在りといふ　崑崙之上、三級、下曰二樊桐一、名板桐、二曰二玄圃一、名閬風、上曰二増城一、名天庭、昇謂二天帝之居一（水経注）

（一）脱字か

（二）瓜の誤なるべし

（三）僑州の人、伐木の爲に山に入り、石室山に至る。石室の中に數童子の碁を圍むを觀て歸るを忘れ、携へ來れる斧柯の朽つるを覺えず、童子に促されて驚き還れば、已に數百年を經、親族復存する者無し。復山に入つて道を得たりといふ（列仙全傳四參照）

（四）書紀一四、雄略紀・丹後風土記（釋日本紀一二、逸義八、第一四雄略天皇）・扶桑略記二（雄略天皇）・日本後紀一八（天長二年）・古事談第一（王道后宮）・詠二水江浦島子一首並短歌（萬葉九、雄）・浦島子傳・續浦島子傳記・浦島太郎（御伽草紙）等參照

（五）漢の明帝の永平中劉晨・阮肇といふ者兩人天台山に入りて藥を

採り、道を失うて仙家に迷ひ到り、二仙女に逢ひ、家に歸れば七代の孫の世なりしといふ傳說に出づ（續齊諧記・列仙全傳三・蒙求中、劉阮天台等參照）

（六）浦島子者、不レ知二何許人一也。釣(雖)過二三百歲一形容如二童子一（續浦島子傳記）

島子乘レ船、如レ眠自叛去。忽以至二故鄉澄江浦一尋不レ値二七世之孫一（浦島子傳）

帝みかどにこれを奉る。帝みかど感歎いかんあさからず、安彦一同（マヽ）に三位の宰相のさいしやうになし下され、みづからくすりをなべ給へば、帝みかどの御よはひわかくさかりにたちかへり、長生不ふ老の御ことぶきをたもち給ふ。安彦は又七世の孫もろともに、通力自在の仙人となり、いま我住は此人界もわがすむ所にあらずとて、空をかけりくもにのりて、天上の仙宮に上りけるこそめでたけれ。

おもかげ物語

一名 辨才天本地

上

（一）植田とも書く。東鑑には於田庄とあり。今の南魚沼郡一帶の地

（二）黃島の井か

本秋津島日ほんあきつしまのうちに、越後國長岡上田莊（一）うへだのしやう、ながをか、うへだのしやう、ましまのおといふところにましますごんのかみむねたゞ、天下になびなきちやうじやとこそきこえけれ。六十六かくにたてをきたるくらの數、ほけきやうのもじのかずとぞきこえける。門まへにめしつかはれしさぶらひ、いゑのこにいたるまで、ゆゝしくぞおはしましける。ごんのかみのたまふやう、みな人はするがの世をたもつべき子一人もなく、すぎわびたるもあるならひぞかし。此むねたゞありなむ事も、いまいくほどぞとあぢきなくおぼえ、あるときはしいかくわんげんのあそびをそうし、又ある時は山々寺々のたつときみのりのこゑをきゝしかば、さながらごくらくじやうどもかくやらんとぞおぼえし。

寛治三年板（帝國圖書館蔵）上巻

さるにてもわれらこんじやうのたのしみ、今幾程さりながらごくらくの七日は此世の七ねんにてありときく。さても何事かごしやうのためにとおもひて、御堂をぞつくらせ給ひける。きんごくをふれさせ、人數をあつめて、れんこんのちをひき、こん〳〵をのべ給へる御だうをぞたてられける。

さるほどに御とし六十一と申ける正月上じゆんのころ、なにとなくまどろみたまへるゆめに、天人いづくともなくきたりたまひ、むねたゞはやくごしやうのいでたちをさせたまへ。七日といはん夜半には、かならずむかひにまいるべしとのたまひて、ほどなくゆめわさめにけり。むねたゞうちおどろき、をびたゞしくぞ見えにける。ごつねにまいりたまひて、花かうをまいらさるほどに此御だうにまいる人、きせん上下にいたるまで、かのかみ此よし御らんじて、御よろこびかぎりなし。

せ、らいはいくぎやうしたまひ、まことにごくらくじやうどもかくやとおもひ、たつとき事かぎりなし。かのみどうをひかりだうと名づけたまひけり。さても御くやうには、みやこにきこえ給へる上人をしやうじ申べしとのたまひければ、ごんのかみをとゝに、まのゝ三郎と申ける人あり。此人申されけるは、此ごろみやこにきこえさせたまふてんだいくわしやうこそ、ふきいだしたまへる御いきより、三世のしよぶつをあらはしたまふときこゑしほどの、たつとき上人にておはします。これをしやうじたまへと申されけれ。

むねたゞ、さやうの上人は、らくちうにて、十せんていわう、あるひはくぎやう・てんじやう人の御中へこそしやうじたまはめ。かゝるをんごくまでくだらせたまふ事あるべしともおぼえず。さりながらしよぐはんむなしからざるものならばと思ひ、ちやくしまのゝ太郎をめして、なんぢはてんだいくわしやうにまいり申べし。おそれおほき申事にて候へども、いんぐわれきせんと申ながら、みらいの事もおそろしく候へば、御げかうありて一こうのつみをもかろめさせ給へと申べしとて、まのゝ太郎二百よきにて、てんだいくわしやうへまいり、いさいのむねを上人へ申あげければ、上人、ありがたくもおぼしめしよらせ給ふ物かな。いそぎ御くだりあるべしとのたまへば、太郎うれしくおもひ、いそぎくだりて此よしを申ければ、ごんのかみ大きによろこび、ざしきをしやうごんして待たてまつる。

さても上人いで立給ふ。同僧逢おなじくそうたち七十よ人あひぐし、侍さぶらひいげにいたるまで、そ
の數知かず召具をしらずめしぐして、御山を下くだりたまひけり。あふちの中山うちすぎて、つるが敦賀津
にぞつき給著たまふ。それよりさきに、越後ゑちごへ人を遣つかはしたまふ。ごんの頭かみよろこび迎むかひにまいられける。さるほどに七日の御せつ法始ぼうはじまり給ふ。御ふせ布施をば、子ど
もよりあひて一日づゝつかまつりけり。一日はまの〻太郎、二日は二郎、三日は三郎、四日は四
郎、五日わ五郎、六日はごんのかみ權頭おとゝにまの〻三郎、七日の御ふせ布施はむねたゞ參まいられけ
る。むま馬百疋白反びき・しろぬい千だん反・くろぬい千だん黑・こがね金千兩・しろがね銀千兩・ゆみ弓・やな胡
錄箙ぐゐ・たち太刀・かたな刀・れう綾錦羅きんしう錦繡・あや綾にしき錦をよび、きせん貴賤上下にいたるまで、參まいらぬ人は
らせられける。きんごく近國をんごく遠國の人々きゝ聞及ならせ給ふ。三日はさ
なかりけり。くわほう果報ういみじきむねたゞの、ごしやう後生までもめでたからんとて、仰あふがぬ人は
なかりけり。
*かうほう康保か五年、三月中じゆん旬のくやう供養とぞきこえける。さても上人御だう堂にうつり、法ほうざ座に
直なをりたまひて、一日とうばう東方やくし藥師いわう醫王せんぜ善逝いの十二ぐはん願をぞ說給きたまふ。二日はな
なをりたまひて、一日とうばう東方やくしいわう醫王せんぜ善逝いの十二ぐはん願をぞ說給きたまふ。二日はな
んばうふだらくせかひのくはんせおん、大じ大悲ひの三十三身のことはりをのべ給ふ。三日はさ
いはうじやうど西方阿彌陀佛のあみだぼとけの四十八ぐはん願、四日はほつぱうのしやかむに釋迦牟尼如來、五日はほ

(一)谷の苦か

(二)はなだ(縹)か

つけ二十八ほん品說給たまふ。六日は大しやう聖不動ふどう明王、七日はたに(一)のこけ地藏菩
薩さつ、むぶつせかひのしゆじやう無佛世界衆生を救すくはんと、ちかひたまふことをときたまふ。一どまいり
し人々は、みな五ぎやく逆のつみ罪消きえぬべし。いはんやかゝる大ぐはん願をおもひたつむねたゞが
まさしく天にしやうせん生ことうたがひなしとぞ說法結願けちぐわんなりしかば、むねたゞ申されけるやうは、かほど見ぐるしきゐ田舍な
かまで、上人をしやうじ請申、いみじき御せつぽう說法のありがたさ、申ばかりもなし。さらば此御
よろこびに、ぶし武士のあそび遊をつかまつりて、上人に見せたてまつらんとて、千萬人の中より、
美男びなんを三百人えらび擇、又そのうちより八十人すぐり、又そのうちよりゑぼし烏帽子のきぐは著際、はか
まのけはしじんじやうなるおのこ男を十人えらびいだし擇出、又そのうちよりむねたゞがおとご子、
まのゝ五郎むねみつにましたるおとこはなかりけり。むねみつ其日のしやうぞく裝束は、はだにか肌
らあやのこそで綾小袖、びせいがうの大くちにあをぢ青地のひたゝれ直垂をき著、くろの黑こまにきんぷ金覆
くりんのくらをかせ、(マヽ)をしまるのくつわ、(青毛)面繋(二)轡馬鞍置、あをげのおもがひ眉目、いればなたの手綱たづなゑりてつけ捌常
られける。見めよきおとこ、むまくらの都しやうぞくにいたるまでもじんじやうなれば、おそ
らくはみやこのうちにも、ありがたからんとぞみゑし見。
さてもごんのかみのたまふやう、おとこのあそびはさてをきぬ。今いまは女のあそびあるべしと

て、大とのゝ中よりびちよ(美女)を六十人えらびつゝ、女のあそび(遊)には(絵)ゑかき・花むすび(結)・貝おほひ(覆)・すご六・ご(碁)・しやうぎ(将棋)のあそび、さうし(草子)ぞろへ(揃)には(何)なに〳〵ぞ。こきん(古今)・まんよう(萬葉)・いせ物(伊勢)が(物語)たり・身(み)をつくしにいたるまで、あまた(数多)のさうし(草子)ぞろへけり。さるほどに、あそび(遊)なかばなりけるに、いづくよりともおぼえず、女ばう(房)とし(年)のよはひ(齢)十七八ばかりと見えたるひめぎみ(姫君)一人おはしましけり。御せんたち(前達)これを見たまひて(給)、あれにおはしますひめぎみ(姫君)は、いづくの人にてましますぞととひたまへば(問)、此人のたまひけるは、みづからは此世のものにてさふらはず。めでたき御せつほう(説法)のみぎり、びちよ(美女)ぞろへ(揃)のあるなれば、みづからもあそび(遊)のくわい(會)のまへにまいりて候ぞとのたまひける(宣)。

さるほどに、天よりぶたい(舞臺)のふりくだり(降下)、六十人の御せんたち(前)をぶたい(舞臺)のうへ(上)にあげて、みづからもあがり給へば、をの〳〵(各)まひ(舞)あそび給ふ。其とき(時)かのひめぎみ(姫君)のたまふやう、たゞいま御せんたち(前)何事をおがみたまふ(拜給)とのたまへば(宣)、何事をも見まいらせ(參)ずと申せば、かのひめぎみ(姫君)のたまひけるは、御せんたち(前)はいまだぼんぶ(凡夫)の事なれば、見させたまふ(給)事あるまじ。三世のし(諸)よぶつ(佛)これより(西)にしにしゆご(守護)してくだらせ給ふ(降)なり。大殿(住)すみたまふ(給)ところなりとのたまひけり。大殿ぶがく(舞樂)をそろへ、三日のあひだ(間)まひ(舞)給ふ。三日と申ひつじ(未)のこく(刻)に、ひめぎみ(姫君)のたまひけるは、ふやう、みづからはいとま(暇)申てかへる(歸)べし。ふしぎ(不思議)に此三日の間はうちあそび(遊)まいらせて、いま(今)

まはなれん事こそなごり(名殘)おしけれ。此世のえん(緣)つきさせ給ひて(盡)、いかなるみち(道)にもまよひ(迷)給はゞ、みづからみちびき(導)せんとて、くはんぎの(歡喜)なみだ(涙)をぞながされける(流)。

上人わてんだい(天台)山へかへら(歸)せ給ふ。ちやうもん(聽聞)の人々も、すなはちかへり(歸)給ふ。其中にむなしくのこりて人しれず心をつくしけるは、その日のびなん(美男)、まのゝ五郎むねみつなり。ひめぎみのおもかげ(面影)を一め見しより、わりなきこひ(戀)のはじめとなり、人しれずあこがれ(憧)けるむねみつの心のうち、おもひやられていたはしや。おもはじ物とは思へども(思)、こひ(戀)のやまひ(病)のならひにて、いよ〳〵心もそゞろになり、身にはおもひ(思)ま(增)さりけり。せめておもひ(思)のあま(餘)りには、春くれば(來)うぐひすのこゑ(聲)をきゝ、あをやぎ(青柳)のいと(絲)ふきみだし(亂)、ちり(散)のこり(殘)たるさくら(櫻)ばな(花)、見ても心はいまさらに、なぐさむかたもなかりけり。おもかげ(思出)のことのみおもひいだし、あぢきなき事かぎりなし。むねみつ心のうちに、なつはいづみ(泉)に心をすまし、川水のながれ(流)に身をやしづめ(沈)まし。秋にもなりければ、まきのいた(板)どのひま(隙)よりも、もりくる月をうらみつゝ、たれまつむし(鹿)のしのびごゑ(忍聲)、わが身のうへとしられけん。

かの、こゑ(聲)きくからにいとゞなを(增)、わすれ(忘)ゝひまもなかりけり。あらしはげしき冬の夜は、あかつき(曉)がたのをしのこゑ(鴛鴦聲)、こずゑにつもる白雪(積)を見て、なをきえぬばかりなり。水のこほり(凍)つゝ、人の心もいつか又、とけておもひ(思)のはれてまし。あらしも(嵐)たかき(高)しばの(柴)をと、

しばしがほどもおもかげを、忘れぬ身こそかなしけれ。俤つたへきく耳部が、わがごとくこひをして、四國波こくにわたらせ給ひて、戀こひしき人にはあわずして、つねにむなしくなりたまふ。われもこひゆへに、むなしくなるならばいかゞせん。きよみづの觀音きよみづのくはんをんこそ、しゆじやうのねがひをかなへ給ふべしと、御ちかひあらたなるよしうけたまはる。まいりてきねん申さんとて、きよみづへこそまいりけれ。

下

去程に、一七日さんろう申に、御むさうありて、夢想なんぢがこふるおもかげのありどころ、われは知らぬ也。越後國藤井親音ろちごのくにふぢゐのくはんをんこそ、ちかひふかきほとけにてまします。その御前まへにありと聞、をかざきのはまゆふけのうちをたづねよと御むさうあり。御つげにまかせあゆみをはこぶ。月くまなくかゞやきていそのまさごに身をしづめ、はまのちどりのこゑ〴〵に、ねをのみなくあはれさよ。夜もはやうく明方あけがたになりければ、いづくともなく女の三人とをるが、物がたり申やう、人のはかなきこひをして、夕暮方ゆふぐれがたになりぬれば、吹風ふきくるかせの身にしむほどもなく、物をなに

(一)俚諺

ぞといふ。今一人いまひとりの申やう、御前ごぜんたちの物がたりかな。(二)石口いしにくちあり、壁耳かべにみゝある世の中に、人もこそきけ。さりながら、源氏げんじ六十帖でうの其中に、戀こひのみちにこそなさけあれ。戀こひと申わ人しれぬ事ぞ。逢あふてあはざる戀こひもあり。うき人をよそに見て、戀こふるもあり。よそにきゝて一め見ばやとおもふもあり。これはたねあることゝてさてをきぬ。戀こひといふは、扇あふぎのかなめといふこひあり。今いまこゝに人を見て戀こふるもあり。かやうにこひはむかしよりあるぞかし。こゝに(三)越後國のくにゝおはしますごんのかみのおとごに、むねみつと申人こそ、天よりあまくだり給ひしおもかげとやらん申きみを見そめしより、こひのやまふとなり、あけくれなげかせ給ひけり。さやうの人は此世の人にてもあらばこそ。歎なげくともかなふまじ。今いまにをきてかみほとけをたのみ、六十よしうをまはり給ひて、これこそ佛神の御をしへなれと、喜よろこびたまふ事なのめならずうれしくて、とし廿と申八月なかばに、(三)越後國ろちごのくにゆするぎのごんげんにまいりてさんろうし、きねん申せ共其かひなし。それよりろつちうのくにたて山にまいり、又ろちせんのへいせんじ、それよりつるがのいけの大みやうじん、さてはきいのくにくまのゝ三しよごんげんにまいり、又それよりやまとのくにかすが・みわのみやうじん、山しろのくにくらまのびしやもん・六はらじやうらくじ・さがほうりんじ・にんわじをおがみ、伊勢のくにゝ立こえ、しんめいにきねん申せども

(二)此の邊脫文あるべし
(三)越中國石動（いするぎ）か

(一)ナ詳

(二)かくも 脱か

(一)一字不明。すか

(二)未詳

かく行て見れば、ひだりはけん〳〵として高き山あり、みぎをみれば嵯々としてけはしきたにあり。そのおくにこぼれたる御だうのかたちと見えて、いしすへのあとばかり、松もはやく千ねんのほどもかぎりあり。此あたりを世になつかしく、木のはをかきわけて見れば、ほとけのめもはなもみえわかぬふるきほとけあり。人もあがめてまいるにこそあれ、このとし月物さびしくましく〳〵けんと、其夜はつや申て、あふぎねがはくわ、むねみつが思ひをやめてたび給へと、たねんなくきねんして、たつきもしらぬ山中に、心ぼそくふしたり。まことに物すごくおぼえて、あかつきのねざめに、五郎かくなむ

はかなくもうはのそらなる戀をして しらぬ山ぢにたびねするかな

とえいじて、なみだをながし、すこしまどろむゆめに、おもかげたちそひて、返歌に

こひしくばたづねてきませわがすみか にしのくになるみだのじやうど へ

とよみ給へば、御こゑにつきたちよりけれども、やさしく御すがたも見えざりけり。

いかにもして、うつゝになりとも見たてまつらんと、人しれずあこがれければ、おもかげのきみたちそひて、ありしすがたすこしもたがへずしてみえ給ふ。御めばかりあはせて、おもかげのたまふやう、いかになげきます共、此世にてはかなひがたし。おもひとゞまれとのたまひける。五郎あまりのかなしさに、かくなん

かりそめにきみをみそめし其日より そではなみだにくちはてぞする

おもかげ返歌に、

こふるともつゐにあはじな此世にて おもひとゞまれ心づくしに

とあそばし、たちかへらんとしたまひけるを、五郎はしばし御物がたり候へとて、御たもとをひかへければ、おもかげのたまふやう、しばしみづからも御物がたり申てきかせ申さん。わがちゝわみやこにてかくれなき、ほしのちやうじやとてありしが、ゑちごのくにゝくだり、九けん四めんのだうをたてたまふとき、山のかみのかよひたまふ木をきりて、むな木にさせ給へば、其時よりちゝ母をさきとして、一るい三百人あまり、みな〳〵うせはてゝ、みづから一人のこり、物おもふ事はなはだしくかなしくて、つねに此御だうにありて花かうをまいらせ、ちゝ母のごせをとぶらひ、木のみをひろひて世をわたり、七ねんのあひだおこなひしゝりきによりて、ちゝ母のごせをとぶらひ、又のちの世をふかくなげきし物なりとて、じやつくはうじやうどへめされ、花かうをまいらせ、めしつかはれひまなきわれなり。ふさいにはなるべからず。ごんのかみ御だうをくやうさせたまひしとき、てんだい山の大くわしやうは、ぼんぶながらほとけにつかへたてまつる人なれば、三世のしよぶつもやうもんにあまくだり給ふ御とも申て、あそびにまいり候。われ故にくにをまはり給ふ事、

あまりにいたはしく見まいらせ候へ共、へんしもひまなきわれなれば、おもひながらにて候。
いまははぐろさんのわがひまにかはらせ給ふにこそまいりて候。夜もあけば、むなしかるべき
とのたまふ。五郎なみだにかきくれて、かくなむ

とし月をふるともきみをわすれめや あはんいのちのあらんかぎりわ

おもかげなみだながらかくばかり

いつとなきこひにくもれるうき人の たびねのかずぞおもひしらるゝ

とよみて、夜もあけければ、かきけすやうにうせ給ふ。きぬのしたにいだきたるをみれば、
こけむしたるほねなり。こはいかに、いま一たびありしおもかげ見せたまへと、なげきかなしめ
どもかひなくて、さてあるべきにもあらねば、はだのきぬにしやりをとりあつめつゝみもちて、
あるたきつせに身をなげばやとおもへども、ちゝ母を一め見まいらすべしとて、わが子のこゝろ
にだにもにたるならば見るべしとて、五郎は手をあ

わせちゝをおがみ給へば、ごんのかみむねたゝは、なにものなればわれをおがむぞとたづね給
へば、御子にむねみつと申ものにて候。ありし事かたりて、又はなれ候とも、御なげきある事
あるまじきなり。ちゝ母もやがてむかへたてまつるべしとて、御いとま申されければ、ちゝ母
をさきとして、みなごりおしさに、そのひはやう〳〵とゞめ、夜もすがらもてなしかしづき
給へども共かひなくして、あけがたになりければ、行がたしらずうせ給ふ。こはいかにとかなし
み給へどもかひぞなき。

五郎はとし月ひとへにおもひしかば、佛神もあはれとおぼしめし、すなはちじやうどへめされ
ける。ほとけたちのたまふやう、むねみつはつみあさきものかな。やすくじやうどへまいりた
るよと、よろこび給ひけり。五郎申やう、われらがおもかげは、はぐろのくはんをんの御をし
へにより、一夜はそひみて候へ共、じやつくはうじやうどに候よしうけたまはり候。御をしへ
候へと申ければ、ほとけたちおほせあるは、下かひの御ほとけはそれまでまいりたまはず。こ
れより三月ほどゆきて、あいまいらせたらん御そうにとひ申せ。ひろきみちに御をしへのまゝ
廿四五なる御そうにまいりあひて申やう、是よりじやつくはうのみやこへ御をしへ候へと申け
れば、われらはしらず候。これより百廿日ゆきてあいたらん人にとひ申せとあり。御をしへに
まかせ、又はるゝ〳〵の道をなみだながらにゆき、*いぬかいぼしにあひまいらせてたづね申せば、

*ひこぼしのこと、豪牛星

(一)すばるぼし(昴星)の訛なるべし

(二)金星

(三)脱文か

未遠いまだはるかのみちなり。これよりも五月ゆきて、〔マヽ〕星教をしへにまかせ、幾数いく日かずともなくゆきてとひ申せば、これより九月ゆきて、すまるぼしに問参とひまいらせよと御教をしへあり。又はる〴〵のみちのほど、なみだとともにふみゆきてとひ申せば、(二)明星尋みやうじやうぼしにたづね申せとあり。又それより行てとひ申せば、未遠いまだはるかのみちなり。これより三百日ゆきて見させ給へとあり。五郎はき(三)〔マヽ〕波のなみたつ河のほとりにて、八十翁教ばかりなるおきな、しろがねのつりばりにてつりをし給ふべし。その人にとひ申せとありければ、又をしへにまかせたづね行ほどに、そのとしごろのおきなにゆきあひてたづね申せば、われはこれあまの川のつり人なり。これより十三月ゆきて、いつくしき上らうにあふべし。そ知給の人しらせたまふらんとありしかば、さてもいつをかぎりのほどぞ。今早いまははやこれまでなり。尋たづねまじきと思へども、流石さすが人だめならぬなげきをして、これまでまいるもえんぞかしと落涙おつるなみだをかきとゞめ、かの人のをしへのまゝにゆく行ほどに、日かず數やう〳〵ふりければ、げにもをしへのごとく、十七八と見えし上らうの、たまのこしにのり給ひ、五十よ人に圍繞通ねうせられとをり給ふ。五郎さしより、じやつくはうのみやこをたづね申ものにて候と申せば、奥しこしのうちよりひめみやきこしめし、御たづねあるは、おもかげをこひたまふむねみつかとをほせければ、それがしが事にて候と申なり。

(一)宿二樹下一済二一河流一(中略)皆是先世宿縁也(說法妙眼論應身品)

(二)此の邊脱文あるか

汲け、御物語がたりさせ給ふ。(一)河流のながれをくむ事も、皆是みなこれ多生陰のかげのやどり、一村むら雨宿あまやどりも、皆是みなこれ前世宿縁のしゆくえんときく。おもかげ戀をこひたまひ、くに〳〵遍をまはり給ふ事、返々も一夜のちぎり契をたのみ、(二)来又くる秋のはじめの七日をまち候へども、空逢あはでむなしきとしもあり。遂あふてわかるゝ年としもあり。くれ〳〵尋たづね給ふみやこは、普賢ふげんのおはしまする所なれば、遂あふべき心を尋たづねとして、心に心をなぐさめて、それよりかの上らうの御教をしへにまかせ、遂あふべき心を尋たづねとして、心に心をなぐさめて、文珠もんじゆ・普賢ふげんのおはしけるところまでたづね參まいりしが、獅子しゝやざうに象にめされてとをり給ふにとひたてまつれば、いざゝらば導みちびきせんとて、寂光じやつくはうじやうどへこそ送おくり給ひけれ。八功徳水池くどくすいのいけのはたに、くわん觀音をん・せいし勢至おはします。御まへにまいりつゝ、まことにかの蓮華のくにへ參るべきならば、かのいけのそこを見させ給へ。なにものがあるぞとおほせければ、五郎うけたまはりて見れば、七寶〔マヽ〕蓮華のしれんげこそましませと申す。なを〳〵見よとのおほせなり。くはしく見たてまつれば、くわこ・げんざい・みらいの三世のしよぶつ三ちうの花のうへにげんじ給ふと申せば、きこしめして、まことにめでたきむねみつが、こひゆへにあまたのとし月をおくり、しやう〳〵ちかひの身となりて、ほとけかみの御まへを見るぞとて、花かうをまいらせ、ごしやうぼだいといのりしくりきにより、ちかきほとけになりた

るめでたさよ。おもかげのありどころに（在處）送（遣）をくらんと、紫磨黄金（紫磨黄金）臺（臺）載（載）のせ、寂光（寂光）はうのみやこへつけ（都）給（給）たまふ。

如來（如來）前（前）のいさごのうへにをろし（下）置（置）き給へば、おもかげはしろがねの（銀）花（花）を摘（摘）みて、如來（如來）供（供）參（參）によらいにそなへまいらせられけり。五郎はこれをみて（見）、いかにこれまでたづね（尋）參（參）まいりて候。これまでおはしましたるかと、咽（咽）涙（涙）にむせびたまひ（給）けり。如來（如來）によらいこれを御覽じて、いみじくこれまで參（參）まいりたるものかな。おもかげまいりて、早（早）はやみとせに餘（餘）あまるなり。深（深）ふかき契（契）ちぎりを結（結）むすびけると、佛（佛）ほとけも感（感）御かんありて、五郎はすなはち乃（乃）いせんみやう王（王）わう、おもかげはべ辨（辨）明（明）染（染）んざいてん天（天）とあらはれ現（現）給ふ。越（越）ゑちご後國（後國）眞言（眞言）寺（寺）のくにしんごんじと申は、此二本（本）人のほん地なり。

世の人につたへ、遍（遍）おまねく道（道）心（心）をおこさしめ、佛（佛）ほとけになさん方便（方便）はうべんなり。此物がたりよく讀（讀）むるところには、十方（十方）諸（諸）よ佛（佛）あまくだらせ給ひ、護（護）まもり給ふとなり。他念（他念）たねんなく一心（一心）しんふ亂（亂）らんにし信（信）んせば、即（即）すなはち佛道（佛道）ぶつだうなるべし。必（必）かならず其願（其願）そのぐはん成就（成就）せずといふ事なし。ゆ疑（疑）めうたがひの心あるべからず。越後（越後）ゑちごの國眞言寺（眞言寺）しんごんじの本地（本地）の一卷（卷）也。

帝國圖書館本　下卷

萬治三歲庚子二月吉日

福森兵左衛門版行

さよひめ

上

さるほどに、近江あふみの國ちくぶしさのべんざいてんのゆらひをくはしくたづね奉れば、昔むかし

京都帝大文學部藏寫本（奈良繪入）上卷

やまとの國(一)まつたにつぼさかといふ所に、まつら長じやと申て、くわほういみじき人おはします。御名をば京ごく殿と申て、こま・もろこしにもかくれなく、めでたくさかへ給ふ事、つたへきくにしへのしゆだつ長じやと申とも、これにはいかでまさるべき。四はうにくらをたてならべ、かずのむね

(一) 未詳　まつらだに（松浦谷）か

(二) 天竺二舍衛國の長者祇園精舍を造りし人

門かど玉をみがき、七ちん萬寶珍ぼうさながらに、ひとつかけたる事もなく、春は花のもとにて日を暮くらし、秋あきは月のまへにて夜をあかし、明前樂榮華かゝる榮いぐわのめでたきに、ひとつことのかけたるは、なんしにても女子にても、御子一人もましまさず。これのみふそくに覺しめしければ、北のかたにむかひてのたまひけるは、いざや利瀬觀音へ參り、歎財寶世音かずのたからをまいらせて、なげき申さんとの給へば、北の方思かたきこしめし、我らもさこそおもひ候つれとて、ふうふもろともうちつれて、夫婦諸共長谷詣はせにまうで給ひけり。三十三度のらいはい禮拜し、南無大ひくわんせおん悲觀世音、*枯れたる木にだにも花さくべきとの御りやく利益遠授かれたる木にだにも花さくべきとゆするならば、にしきの錦斗帳とちやう月に三十三づゝ、三年かけて參らすべし。緣日每成就うるを、三年をこなひ參行らせん。月に御きやう經をこそたてられけれ。立

あらありがたや、夜はんば半かりの事なるに、くわんおん觀音はまつらの松浦夫婦（マヽ）枕上たまひ、いかになんぢらがあまりなげくもふびん不憫なれば、じひを以もつてとらすると取て、金がねのさいを一（賽）賜ひとつたまはりて、かきけすやうにうせさせたまふ。まつらふうふの松浦夫婦人々は、夢さめうちおどろきて、あらありがたの御りしやう利生と、又らいはいをたてまつり、急いそぎやかたへ館下

*念二被觀音力一、枯木華更開（千手陀羅尼經）雪降れば雪頼もし利瀬山枯れたる木にも花咲きにけり 覺延法師（續詞花集一〇、釋教）

京都帝大（文學部）本 上卷

（節）せつになぞらへて、さよ小夜姫御前とぞ申ける。乳母めのとかいしやくいかめしく、いつきかしづき給ふ。

かゝるめでたきおりふしに、さだめ定なき世とは申ながら、ひめぎみ姫君四さい歲のをん御時とき、きやう京ごくどのいとかりそめの風邪かぜのやまひ病をうけたまひ給ひ、しだひ次第に重おもらせたまひ給ひしかば、みだい御臺所どころをはじめとして、いつか一家・いちぞく一族後あとやまくら枕にたちよりて、いろ〳〵御事どもあり、いたはりたてまつらせたまひける。いまはのとき臨終にもなりしかば、みだい御臺所どころをちか近向かうあり。いちもん一門しつどひ、集よろこびはかぎりなし。さるほどにきたの北方かたやがてくわい懷姙にんまし〳〵て、九月のわづらひ、十月と申には、御さん産月のひもをときたまふ。まことにあたり逸もかゞやくばかりなる、玉のやうなる姫君にておはします。京ごくふうふの極夫婦悦御よろこび、なににたとへんかたもなし。すなはち御名をば、御むさうのじ夢想（時）賜ひ。

づけてのたまふやう、宣われ一人の子を持つといへども、女子によしなればいひがいなし。あとの事のみおぼつかなし。いかにもして、あのひめぎみを姫君をよきにもりたて、いかなるひとをもむこにとり、わがあとをとりそだて給へとぞ、泣く〳〵かたりたまひける。きたの御かたさめ〴〵とぞなきたまひ、ひとのこゝろのたのみがたきよの中に、きみにをくれて、みづからがをんなの身としてあとをばなにとはからふべき。たゞひとへにおなじこけのしたにもとこがれたまへどかひもなし。さるほどにしだひによはくなりたまひて、いまはかうよとおぼしめして、にしにむかひて手をあはせ、南無あみだ佛〳〵とのたまひて、四五へんとなへたまひつゝ、おしかるべき御よはひかな、三十六をいちごとして、あしたのつゆときえたまふ。人々ゆんでめてにすがりつき、天にあふぎ地に臥て、かなしみたまへどかひもなし。されどもかなはぬ事なれば、野べのをくりをいとなみ、御さうあまたくやうして、七日〳〵の御ついせん、申も中〳〵をろかなり。

かくてとし月ふるほどに、次第に財寶からもうせちりて、乏とぼしくのみ成行ければ、下人けらいもみなちり〳〵になりはてゝ、たまたちよる事もなし。あらいたはしや、やかたにはうへと姫君とたゞ二人のみになりはてゝ、明暮あかしくらさせ給ひしが、あまりの事のものうさに、姫君をいだきとり、後髪をくれのかみをかきなでゝ、さても〳〵くわほうつたなき御身かな。せめては十にもならんまで、父ちゝうへにもそはれなば、いかなる人にもいひなづけ、有德うとくのあとをもおさむべきに、まだいとけなきその程に、ちゝうへにをくれて、かゝるうき身となりぬるぞや。いまはこのみもおしからねど、御身のゆくゑのおぼつかなさにとて、あけくれそでをしぼりつゝ、月日ををくり給ふほどに、姫君七才に成給ふ。此姫君と申せしは、ひとつをきいて十をさとり給ひけるが、ことさらみめかたちならびなくをひ出給ふが、天人の此どにあまくだり給ふかとうたがふほどにぞ見え給ふ。さればうとくの人々も文たまづさをかよはせども、身のひんなるを思ひはぢ、あからさまにみ入る事し給はず。扨も思ひ詫しきうきすまゐ、世わたるたよりのなきまゝに、さはべにおりてはねぜりをつみ、さへと出ておちほをひろひ、露の命をつながるゝ。

かくて姫君は十六才に成給ふに、父上ちゝうへの十三くわいきぞきたりける。いかにもしてこのつぎいせんをいとなまんと、とかく思ひめぐらし給へども、せんかたもなくおはしける。姫君つく〴〵と思しけるは、誠にものゝ心を思ふに、おやのをんはたかき山ふかきうみにもすぐれたり。おやのぼだいをとぶらふ事は、身をうりてだにとりおこなふ事なるに、みづからかくてありながら、いかでかよそに思ふべき。わしくまたかの゙に成ても、身をうりてぼだいをとはんと覺しめし、うつら〳〵とはゝごのもとをたちいでゝ、かすがの明神にまいり給ひ、みづからちゝ

*父恩者高ㇾ山
須彌山尚下、
母德者深ㇾ海
滄溟海還淺
（童子教）

*本のまゝ生貲の借字か

のぼだひをとはんため、身をうらばやと思ひたちて候へば、さるべき人にひきあはせてたべと、かんたんをくだきいのられける。そのころこうふくじよりひじりのおはしてせつぽうあり。さよ姫此よしきゝ給ひ、たちよりちやうもんありけるに、おやのぼだいをとはんには、身をうりてもおこなふ也とのたまへば、さよ姫これを聞とげて、いよ〳〵心にかけ給ふ。

さる程におくむつの國あだちのこほりに大なるいけあり。此池にはとしへたる大じやあり。これはすなはち八がう八むらのうぢがみとて、いろ〳〵あがめ奉り、をこないまつるその中に、ふしぎなるしさいありて、としに一度づゝみめよき姫をいけにそなふる事有。すなはちこれを八がう八むらのものどもが、ばんにまはりてつとむるなり。あるとしそのさとのつかさ、こんかの大夫と申て、うとくの人有。たうばんにあたりてこれをなげき、女ばうにいひけるは、われ一人の姫なるに、大じやのゑにそなへん事いかゞはせんとぞかなしみける。女ばうこのよしきゝ給ひ、なふ、いかに大夫殿、かみのことをさのみになげき給ひては、御とがめもおそろしや。なにとなげくともかなふまじ。さりながら、わが身にかへて思ふひとり姫を、池にゑにはそなへがたし。御身は都へ御のぼりありて、行衛もしらぬ人をかいとりくだらせ給へとのたまへば、大夫なのめに覚しめし、そのぎもつともしかるべしとて、しのびてみやこへのぼりける。みちすがらのしゆく〳〵にてもたづねけれども、思ふやうなる人はなし。扨都につき、一條小川

(ママ)衍文なるべし。

きくやにやどをとり、らく中をたづねけれども、思ふやうなる人はなし。おつとにはだをふれぬみめよき姫あらば、あたひをかぎらずかふべしと、しのび〳〵にたづぬれども、うらんといへる人はなし。さらばこれより、やまと・河内をたづねばやと思ひ、ならのみやこにたこゝかしこをたづぬれども、うらんといへる人はなし。せんかたなくして、たかふだかいてこうふく寺のなん大門にたてたりける。いたはしやさよ姫は、せつぽうはてゝげかうあるに、たかふだのありければ、なに事やらんと見給へば、男にはだをふれぬ姫あらば、あたいをかぎらずかふべきなり。所はてんがいつるやの五郎太夫とかきとめたり。さよ姫此よし御らんじて、あらありがたの御事や。これぞかすがの御はらひぞと、たうとく嬉しく覚しめし、これよりすぐにたちいでゝ、身をうらばやと覚しけれども、はゝうへのいかばかりまちわびさせ給ふらん。今一たびたち歸り、はゝの下かの字脱計らひ

前圖

〳〵子に御いとゞ申さんと覚しめし、京ごくどのにぞかへらるゝ。
（*〔マヽ〕暇）（極殿）（歸）

さてこんかの大夫は、ふだをたてゝも、たづねも来らんといへる人なければ、今いまはこれにもよ
（札）（立）（尋）（円）

うなし。いづくへもたちこへたづねばやと思ひ、やどをたち出、こゝかしこおにたちやすらひ
（立越）（尋）（宿）（立）（〔マヽ〕休）

たづねけるに、春日のみやうじんはこれをふびんと覚しめし、八十ばかりのらうおうとげんじ
（尋明神）（不憫）（老翁）（現）

給ひ、たちむかはせ給ひ、いかに御身はなにをかたづね給ふらん。きかばやとのたまへば、か
（立向）（何）（尋）（聞）（宣）（新）

う〳〵申ければ、これよりはるかあれに見えたる山のこなた、まつらだにといふ所に、いにし
（遙）（此方）（松浦谷）

への長じやのあとあり。その外にはいかゞあらんとのたまひて、かきけすやうにうせ給ふ。
（者）（跡）（世）（者）（宣）（消）（失）

ともあらん。その外にはいかゞあらんと
（不思議）

太夫此よしうけたまはり、さてもふしぎのしだひかな。いかさまこれはほんごくのうち神の、
（承）（次第）（本國）（氏）

我をあはれと覚しめし、これまであらはれ給ひけるかと、御あとをふしおがみ、まつらだにに
（現）（後）（伏拜）（松浦谷）

尋たづね入、にしをはるかにみわたせば、誠にいにしへのちやうじやのすみかと覚しくて、ほり
（遙）（西）（見渡）（長者）（住處）

深ふかく掘廻し、棟門高館ふかくほりまわし、むねかどたかきやかたあり。もんはあれどもとびらなし。築地はあれど
（門扉）

覆軒瓦もおほいもなし。かわらものきもこぼれ毀落おち、ちり〳〵水はもりゆけど、むすびてとむるふせ
（〔マヽ〕）（漏）（掬）（風情）

ひはなし。さもあさましき有さまは、むかしおぼえてあはれなり。太夫はあづまおとこの心な
（様）（昔）（東男）

き身なれども、いたはしく思ひ、なみだとゝもにほりのふなばしうちわたり、大手の門を入、
（共）（渡）（堀）（船橋）（涙）

廣庭ひろにはにまはり、物申さんといふおりふし、さよ姫たち出て、たぞよとこそはこたへける。
（苦）（誰）（答）

いやくるしうも候はず。みやこは一條小川わたりの物にて候が、もし此ほとりにいまだおつと
（都）（者）（未夫）

のはだふれぬ女ばうの候はゞ、をしへて給り候へ。あたひをかぎらずかいとり申べしと申給へ
（肌）（觸）（房）（数）（買）（価）

は、姫君此よしきこしめし、こはいかに、かのふだたてたる人かとよ。これしかしながら、春
（札）（立）

日の大明神のはからひぞと覚しめし、なふ、いかによそまでも候はず。みづからかい取給ふべ
（計）（買）

し。うう申さんとのたまへば、太夫嬉しく思ひ、あらいたはしの仰やな。そのぎにてあるなら
（實）（宣）（其儀）（賣）

ば、身のしろいかほど参らせんと有ければ、みづからはおやのぼだひをとはんため、身をうり
（代）（孝養）（身代）（菩提）（弔）（賣）

候へば、とてもけうやうのみのしろ、太夫どのゝまゝよとのたまひて、きえ入やうになき給
（宣）（盡）（消）（泣）

ふ。

太夫此よしきくよりも、扨も御身はやさしくもおさなき人にてましますか。おやのぼだいと有
（聞）（稚）（親）（菩提）

れざる意

ならば、（假）あたいをばこざるまじ。（砂金）しやきん五十りやう（兩）参らせん、姫君、（宣）とのたまひて、（肌）はだよ（黄金）りこがね取出し、姫君にわたさるゝ。あはれなるかなさよ姫は、（渡）こがねをばうけ取て、いかに申さん太夫殿。（暮）みづからに五日のひま（暇）をたび候へ。ちゝ（父）ご（御）の御あと（跡）を心のゆく〳〵とぶらひ申、今日けふより五日のくれほどに、御身のかた（方）へ参るべし。その時、むかひ（迎）を御こし（越）あれと（泣）なく〳〵仰ければ、太夫もなみだ（涙）をながし、そのぎ（其儀）にてあるならば、五日と申くれ（暮）程に、かならず（必）むかひに参るべし。それがしがしゆくしよ（宿所）は、天がいにては（寰宇）つるや（鶴屋）の五郎太夫にて候ぞ。御ようあらば御申あれ、かへす〴〵（返）とやくそく（約束）し、しゆくしよ（宿所）をさしてぞかへりける。

さるほどにはゝうへ（母上）は、ちぶつだう（持佛堂）にて（鉦）鼓鳴らし、念仏申ておはしけるを、さよ姫はたちよりて、いかにはゝうへ（母上）きこしめし候へ。たゞいま此もんぐわ（門外）にて、こがね（黄金）をひろひてさふらふぞや。これ〳〵御らん（覧）候へとのたまへば、母此よしきこしめし、さてもありがたの事どもや。此こがね（黄金）と申は、よのつねのものならじ。御身女の子なれども、ちゝ（父）の後世をかなしみて、とぶらひ（弔）たく思ひける心ざし（深）のふかきゆへ（故）、天よりあたへ（與）給へる也。これひとへにちゝ（父者）長じや殿の御おんぞ（恩）とて、御よろこび（悦）はかぎりなし。さらばちゝ（父）ご（御）の御ねんき（年忌）、よきにとぶらひ申さんとて、いにしへのけらい（家來）のものども（者共）をめしよせて、さま〴〵（召寄）のいとなみ（營）と（調）ゝのへて、御そうあまたくやうして、かの御ぼだい（菩提）をねんごろに御とぶらひ有ける。御心ざしの程

（＊）その誤寫か

こそ有がたけれ。

さそ（＊）その日も過ぬれば、いたはしやさよ姫、（母上）はゝうへ（宣）のたまふやう、さてもちゝ（父）ご（御）の御ぼだい（菩提）をねんごろ（懇）にとぶらひ申し事、（マヽ）（以）何なによりもつてうれしけれ（嬉）。又わづかにも殘れるこがね（黄金）の候はゞ、（母上）はゝうへのしばしの御いとなみ（營）とも覺しめせ。今はなにを（何）かつゝみ候べき。みづからは身をうりて（賣）候ぞや。あき人（商）の手にわたり（渡）候はゞ、いづくの國へかまいりなん（參）。たとひわし（鷲）くまたか（鷹）の爲（爲）にもなり候とも、おやの（親）御ためにて候へば、すこし（少）のうらみ（憾）も候はず。もしながらへても候はゞ、いづくのうら（浦）はに候とも、たより（便）の文はまいらせん（參）。みづからが身のうへ（上）の思ひいで、これに過ば、覺しめしきり給ひ、ふかく（深）なげか（歎）せ給ひそよ。みづからが身のうへ（上）の思ひいで、これに過たる事はなし。たゞさりながら御のこり（マヽ）こそおしく候へとて、りうてい（流涕）こがれてなき給ふ。はゝ（母）このよしきこしめし、これは夢かやうつゝ（現）かや。扨も御身は、さやうのなさけなき事し給ふかや。さきだつ（先）ちゝ（父）のぼだい（菩提）をとぶらふ事はさる事なれども、此世にいまだいきのこり（殘）たるはゝ（母）が身に、おもひ（思）をかけ、こゝろ（心）をいたましむる事、これかう（行）〳〵といふべしや。めいど（冥途）のちゝ（父）はゝ（母）はおやにて（親）、此世のはゝ（母）はおやにてなきかとよ。あらなさけ（情）なの姫が心やとて、りうてい（流涕）こがれてかなしみ（悲）給ふ。はゝ（母）さてやくそく（約束）のころ（頃）にもなりしかば、こんかの大夫はむかひ（迎）にきたり（來）、もんぐわ（門外）いにたち（立）給ふ。

いたはしや姫君は、母上はゝうへにちかづきて、いかに申さんきこしめせ。今歎召聞近
も、かひなき御事にて候へば、前世せんせの事と覚しめし、御なげき候ひそ。いかなる所に候とも、
やがてをとづれ申べし。はやあき人も参りつるに、御いとま申てさらばとて、名残惜なごりおしげに
おもてをさして出給へば、母上はゝうへあまりのかなしさに、これはいかなるいんぐわぞや。御身
父御別のちゝごにわかれつゝ、かゝるわびしきすまゐをするも、ひとへに御身になごりおしまれて、
今までながらへてもあるぞかし。御身には離れてみづからは、一日へんしもながらふべきか。
しゝたるちゝをかなしみて、いきたる母をくるしむる、子の心のうらめしや。よの中に、神も
佛もましまさぬか。いかなる國へも、みづからをもつれてゆき給へや。はなれてはいかでやる
べきぞとて、いだきつきてぞなき給ふ。うつゝなきありさまを、見るめもあはれなりけり。そ
の時さよ姫の給ふやう、なふ〳〵、いかにもあるべきかや。御なげきはことはりにてさふらへども、今はさら〳〵かなふまじき御事也。
又いかにしたはせ給ふとも、あき人がともなひ申事もあらじ。たゞ〳〵覚しめしきり給ひ、ゆ
るさせ給へとのたまへども、さらにはなしもやりたまはず。
さてもこんかの大夫はもんぐわいにたちてまちけるが、じこくはるかにをしうつりけれども、
出もやらせ給はねば、大夫おほきにはらをたて、扨もにくきしだいかな。くわぶんのみのしろ

とり、固契約かたくけいやく申ながら、待までどもへつつと入、大音揚呼おんあげてよばゝれども、人をとのせざりければ、太夫いよ〳〵腹立はらをたて、面廊廻廊めんらうくわいらうをうちすぎ、寝殿過しんでんにさし入てみれば、おや子の人〳〵平伏ひれふして、泣なき
悶眼もだへてましますを、大のまなこにかどを立てたて、なふ、いかに姫ごぜ、何御前なにとておそく出給ふ
に、する〳〵とは走はしりより、いたはしげもなく姫君のこがいなとつて引立ひきたてゝ、表おもてをさ
してはしりいづる。おそろしかりしけしき氣色也。
母上へ此よし御覧じて、なさけなしとも太夫殿、あの姫がとが科ならず。みづからがとゞめし也。
姫宥ゆるしありてたび給へとて、りうてい流涕いこがれてなきたまふ。大夫このよしきゝ、をろかの愚は
ゝのおほせかな。くわぶんの身のしろにてかいとりたる事なれば、何となげかせ給ふとも、
さら〳〵かない候まじ。あら〳〵と申ければ、いたはしや姫ぎみは、もとよりの御かくごなれ
ば、太夫の手にぞわたらるゝ。母上はゝうへあまりのかなしさに、あらなさけなきしだいかな。み
づからあとにのこりゐて、かやうにものをおもはんより、あとをしたひていづくへも、いのち
のあらんかぎりに、行死ゆきじにせんとおぼしめし、かちはだしにては走出しりいで、さよ姫にすが
りつき、猶慕なをもしたわせたまへば、大夫は腹立はらをたて、いかにはゝごきこしめせ。猶慕なをしたはせ

給たまふならば、姫ぎみをあらけなく痛いため申さんと、大の眼まなこに角かどをたて、さもあらく荒
におどしける。いたはしや母上はゝうへは、このよしをきこしめし、なさけなき大夫どのや。親おや
と子のいきわかれにて候へば、さやうに荒あらくなのたまひそ。あとをしたふがいやならば、國
はいづくぞ、いかなるところへ、つれてゆかせたまふぞや。御申ありてたまはれや。いかに〳〵
とのたまへば、太夫このよしきくよりも、こゝはひとつたばからばやとおもひ、なふ、いかに
母御方はゝごぞ、それがしはおくがたのものなるが、あのひめをやうしにして、いかならん大みやうを
もむこにとり、わがたよりにもとおもふなり。そののぞみかなひなば、やがて御身をもむかへ
に人をまいらせん。はや〳〵御かへり候へとて、ひめぎみをさきにたて、みやこのかたへぞの
ぼりける。いたはしやはゝうへ、おつるなみだのひまよりも、なふ、いかに大夫どの、いまは
歎なげきてもかひなきぞや。そのぎにて御座あらば、おさなきものゝ事なれば、うじのほどをも
よきにいたはりたびたまへ。大夫きゝて、いまはやこゝろやすしとおもひ、さきにも申せし
如ごとく、それがしは子をもたぬ身にて候へば、わがたよりにもたのまんと、思ふこゝろに候へ
ば、その事は御心やすかれと、なさけがほにぞたばかりけり。

中

いたはしや母上へ、これをまことゝ思しめし、なふ、いかにさよ姫、大夫殿をばちゝまつら殿
と思ひ、よきにみやづかへ給へや。これが別かぎりわかれかかなしやな。又あふ事もあるべきかと、す
そやたもとに取つきて、きえ入やうになき給ふ。げにことはりとぞ聞えける。大夫きゝてはら
をたて、これはいはれぬことどもかな。くわぶんの代物にてかいとりて、行末たのむ姫のかど
いでに、なにとか思ひてかほどまでなげかせ給ふぞや。はる〳〵の下るかどいでに、いまはし
くさやうになげかせ給ふならば、姫をあらけなくいため申さんとて、もちたる竹のつえをとり
直なをし、雪のやうなる御はだへを、ちやうく〳〵と二つえ三つえぞうちたりける。哀なるかな北
のかた、大夫がたもとにすがりつき、なふ〳〵、いかに大夫殿、みづからかへり申なり。御ゆ
るしあつてたび給へ。やあ〳〵、いかにさよ姫、いまの別れのかなしやな。わかれのほどのか
なしさに、あとをしたへば御身がうきめをみる。いづくのうらはにすむとても、風のたよりの
音信をとづれあれ。それたのみになからふるぞ。なふ、わすれたりさよひめ。御身のはだのまぼり
にかけたるは、ちゝごのかたみの御きやうなり。ほとけの五十ねんのあひだ、とかせ給ひし御

*娑竭羅龍王（八大龍王の一）の女、年始めて八歳、智慧利根にして法華經の教を聽いて忽ち成佛の悟を得たり（提婆達多品第一二參照）

經きやうの中に、法華經 以 ほけきやうをもつてかんじんとす。肝腎 そのほけきやう一部八くわんのうち、五巻 提婆品 のまきだいばばんと申は、女人じやう成經 佛の御きやうなり。*八歳龍女 ながら現世後生 御きやうなり。げんせごしやう 浮 とも、命全 持 いのちをまたうもち給へ。命 いのちのながきかめは、蓬萊山 到 聞 ほうらいさんにいたるときく。又も 巡會 めぐりやあひもせん。あらなごりおし 惜 宣 やとのたまひて、たがひにみおくりかへりみて、後見送 うしろ 影 かげもなくなれば、泣 なく〳〵館 立 やかたにたちかへり、悲 歸 ちぶつだうにたふれ臥 ふし、流 りうてい淵 こがれ 泣 てなき給ふが、いつしか心きやう亂 狂 らんし、よるひるとなくなきさけび、狂 出 りやうがんをなきつぶ 館 内 やかたのうちをもくるひいで、嬰 泣 ならのみやこにおもてをさらし、わらんべどもにはやされ 踊 走 をどりはしりなきかなしみ、あさましき身となり給ふ。申も中〳〵をろかなり。

措 これはさてをきさよ姫は、こんかの太夫とみやこをば、まだよをこめてたつなみの、白表 しら河おも 過 もてうちすぎて、ぎおんばやしの むら群 がらす、うかれ出たるわが心、知鴉 しらぬたびぢの行末なを も、憂 うき事にやあはだぐち、誰 たれ松むしのこゑはして、朝 あさかげくらきやましなや、四の宮のみや・ 霧 寺關 明 伏拜 生(行) 別 十せんじ・せきのみやう神ふしおがみ、いきてわかれじまたあふさかといのりつゝ、打越行 けばうちでのはま、曠 いそのちどりとも千鳥 諸 なきてぞわたるせたのはし、泣 波 勢多橋 はるぐ〳〵とをきた 末 びのすゑ、思ひやるこそかなしけれ。悲 篠原 しのはらこえて行袖は、露 越 もしぐれ時雨 もり山や、やつれ守

果 はてたるたびすがた、旅姿 鏡 かがみの山とき 聞 くからに、向 むかふこゝろも はづかしく、恥 嵐 あらしはげしき 烈 番場 宿 ばんばのしゆく、寢覺 ねざめの夢はやがて 醒 さめがひ、井 小野 細 をのゝほそみち 道 ふみわけて、踏分 すりはりたうげ 磨針峠 にさしかゝり、後 遙 あとをはるかにかへりみる、雲 遙 はるぐ〳〵とたち 立 へだて、隔 こひしきやまとは 戀 大和 なごりもなし。あらいたはしやさよ姫は、幼 おさなき人の事なれば、思ひもよらぬながたびにつかれ 疲 名殘 はて給ひ、或所 あるところにたふれ 倒 ふし、臥 あらくるしやとのたまひて、宣 さめ〴〵とこそなかれける。苦 泣 べきに、今 いまからさやうにいふならば、長旅 遙 いくはるぐ〳〵のながたびを、何 なにとか 見 大夫此よしみるよりも、憎 にくき女の ふるまひかな。振舞 せめて廿日も行てこそ、橋 あはれみをもなす 叶 べけれ。

京都帝大（文學部）本　中卷

甲斐がひなきに、步あゆめ〳〵と引立てゝ、行けども〳〵かなはねば、持もつたる杖つえをつとつて、散さん〳〵にちやうちやくす。うたれてもはたらかずゆかざれば、力ちからをよばず山中のしゆくに三日とうりうしけり。又たち出て行程に、荒あれたるやどのいたまより、露もたるひもきくなれば、しぼりかねたるたもとかな。よはほの〳〵とあかさかや、美濃みのならばはなやさきなんくんせ河、大くまがはらの松風に、きんの音ねをやしらむらん。あらむつかしのしゆくのなや。わが身はいまぞをはりなる、あつたのみやをふしおがみ、行末なにとなるみかた、みかわのくにゝ入ぬれば、あすけの山もちかづくや、妻つまこひかぬるしかのねに、わがふるさとかす事を覚しめし、ともになきてくだらるゝ。日かずつもればやう〳〵、名に聞えしやつはしといふ所につき給ふ。

伊づのみしまやうらしまが、あけてくやしきはこね山、のぼるもつらしあしがらの、山をもあとにみなしつゝ、こゝろのかぎりのぼれども、いまははや一あしもひかれねば、とある所にたふれふし、たちもあがり給はねば、大夫此よしみ参らせ、あらいたはしや、おさなき人の事なれば、ことはりとは思へども、なさけがほにてかなはじと、大のきなこをみいからかし、なにとてさやうにゆいがひなくはみゆるぞや。ゆきゝの人〳〵の、ゆびをさしてわらふはしらざるかと、とうりうせんもやすけれども、これよりさきへはひにちをさだめたる道なれば、たゞ一

(一)美濃國垂井宿に掛く

(二)未詳

舞曲景清にもみのならば花もさきなんくんせがは、おほくま河原の松風は、きんの音をやしらぶらん

(三)「がの」二字脫かかすが(春日)の事

(二)流れ落つる 意

(三)梅若傳說木母寺緣起・謠曲隅田川・柳亭記上・江戸名所圖會七等參照

時もかなふまじ。叶はや〳〵と引立てゝ、いたはしげもなくあゆませける。無慙なさんやなさよ姫、裾露すそはつゆ、袖はなみだにうちしほれ、御あしよりもあゆるちは、血路みちの草葉もそめぬべし。

やう〳〵たどり給ふほどに、相模國さがみのくにゝ入ぬれば、なをうき事は大いそや、さがみがはらをうちすぎて、鎌倉かまくら山をめてにみて、うつら〳〵と行程に、隅田すみだ川にもつき給ふ。(二)昔むかしがたりにつたへきく、むめわかまみち、うつら〳〵と行程に、隅田すみだ川にもつき給ふ。(二)昔むかしがたりにつたへきく、むめわかまるのはかじるしと、見る事のふしぎやな。柳さくらをうへをきて、ねん佛申せし跡までも、よそのあはれと思はれず。みづからもこれまでまいりしかば、跡にてはゝうへのなげかせ給ひつゝ、もしやあとをたづねつゝ、かやうになならせ給ひなば、何にとかあらんかなしやと、なみだにくれてたち給ふ。

大夫此よしみるよりも、末すゑはちかきぞさよ姫、いそげ〳〵といふほどに、しのゝめはやくしらせ給ふほどに、日數つもればいまはあふしうにきこえたる、あだちのこほりにつき給ふ。さよ姫のこゝろのうち、なにゝたとへんかたもなし。こんかの太夫はやかたに入ければ、女ばう子どもさしつどひ、あらめづらしやとさゞめきける。太夫女ばうにむかひ、扨もゝ此たびは、いろ〳〵しんらうしたりしに、そのかひありてびじんの姫を、かいとりてくだりたり。よにた

ぐひなきひめなれば、神かみもよろこび給ふべき。急いそぎおもてへたちいでゝ、對面たいめんありて
もてなし給へとありければ、女ばう表おもてへたち出て、あらいたはしや姫ぎみや。なが〳〵の
御たびにて、さぞやくたびれ給ふらん。こなたへいらせ給へとて、奥をくのざしきへ入申、いつ
きかしづき奉る。

あらいたはしやさよ姫は、一間ひとま所にしのびいり、館やかたのていを御覧じて、恥たもとをかほに
あてゝ、さめ〴〵とぞなき給ふ。零こぼるゝなみだのひまよりも、あらうらめしのうき世やな。
みづからはやまとのつぼさかにて、父ちゝのやかたはこれにすぐれて有つるが、そのいにしへの
おもかげのゝこるぞと、見るめもいとゞかなしくて、あけてもくれてもなみだの雨のひまもな
し。太夫此よしみるよりも、憎にくき姫がふるまひや、ろじにてなげくはことはりと、あはれむ
こゝろもありつるが、これ程いつきかしづくに、なにとてさやうになげくらん。めにものみせ
てくれんとて、さん〴〵にいからるゝ。女ばう此よし御覧じて、なふ〳〵、いかに大夫殿、あ
の姫のすがたありさまをみるに、たゞよのつねの人にてなし。中〳〵に身をうるべき人とは見
えず。ぬすみかどはかひても御こしなきか。おぼつかなしとのたまへば、大夫大きにはらをた
て、そこつの事をいふ人かな。かやうのしさい有し人にて、かい取たり。さら〳〵ぬすみいた
ひても、かどはかひても參らぬぞ。女ばういかにとかたりけり。

其後太夫はらうどう共にいひつけて、屋のうちのさうぢして、座敷ざしきをきよめ、七えにしめを
かざり、あらごもなどいふ物をしき、十二のへいはくきりたて、これを姫君のきよ所とさだめ
けり。扨姫の身をきよめさせよとて、湯垢離ゆごり・潮垢離しほごり・水垢離みづごりなどいふて、七度づゝ廿一どの
垢離取こりとらせ、かのきよ所にうつさんとなり。いたはしや姫君は、にえにそなはる事をばしらず、
これはいかなるしだいぞや。みやこのかたざまにては、かやうの事はきゝだにをよばぬ事也。
おくかたのならひには、ふしぎのことやと覺しめし、いかに女ばうたち、かやうのしだいは
此所のならひかや。ふしぎの事やとのたまへば、女ばうたちなみだをながし、扨はしろしめさ
れぬや、いたはしの事どもや。かたらじとは思へども、はや日かずも候はねば、御心えのため
に申なり。此所にはふしぎのしんじの御ざあるなり。これより八ちやうきたに、さくら井がふ
ちと申て、まはり三里のいけあり。此いけに大じやのすまれ候。それぞ此所のうぢ神にて御座
あるが、としに一どのまつりを、八がうむらよりて、ばんにまはりてつとむる。うつくしき
姫を一人、いけにへにそなへ奉るなり。ことしはこれの大夫殿のばんにあたらせ給ふゆへ、み
やこへのぼり、御身をかいとりますぞ。なに事もせんせのむくひと覺しめしきり給ひ、ご
せを心にかけ給へとて、なみだをながしかたりける。

さよ姫此よしきこしめし、これは夢かやうつゝかやと、御袖をかほにあて、きえいるばかりに

泣なき給ふ。こぼるゝなみだのひまよりも、扨も〳〵親おやのために身をうりて、知しらぬあづまに來きたりしは、思ひまふけし事なれど、猶ふるさと戀しく、又はわかれし母うへの、歎なげかせ給はん事を思へば、立たちてもゐてもかなしきぞや。さりながら、かゝるをんごくのはてにすむと も、いのちだにあるならば、又めぐりあふ事もやと、それをたのみてこそ、すこしなぐさむかたも有けるに、扨は大じやのゑと成て、あすをかぎりのいのちかや。我身のうへの事よりも、いたはしや母うへの、かゝる事をばしろしめさで、風の便りのをとづれも、今や〳〵とまち給ひ、なげき給はんいたはしやと、宣の給ふこそたえ〴〵に、りうていこがれ給へるは、見る人きく人共に袖をしぼりける。

大夫の女ばうきこしめし、げにことはりと覚しめし、さよ姫にちかづきて、なふ、いかに姫君、御なげきはさる事や。ことはりなり〳〵。國はいづく、いかなるさとにてましますぞ。みづからしゆくぐはんの事ありて、明年の春の比、くまのへさんけい候へば、そのおりからかたみを とゞけて參らせん。御文などもかき給へ。たしかにとゞけ申べしと、なみだと共にのたまへば、おりふし大夫はきゝつけて、いかにこは何事ぞ。所はんじやう家はんじやうのいのりのため、いわゐてそなふるみごくのひめのそばにて、何をかさのみなげくぞやと、大のまなこを見ひらきて、はつたとにらみて立たりける。なふ〳〵、いかに大夫殿、我らふうふが中に、一人もち

たる姫をみごくにそなへて御覽せよ。なんばうかなしくあるべき。あの姫の心のうち、又は親のなげきの程、思ひやられていたはしやと、なみだとゝもにの給ひける。大夫もことはりとは思へども、はらのたつきしよくして、やあいかに女ばう、わが子をにえにそなへてなげくべしと思はゞ、なにしにはるゞ〳〵みやこまで、人かいにはのぼるべきと、ざしきのしやうじをはたとたてゝぞ入にける。

下

さる程に、こんかの大夫せんれいなればや、御しんじを八がう八むらへふればやと思ひ、けふをはれと出立、くつきやうの馬にのり、らうどうあまた引つれて、こゝかしこにはせまはり、たうねんの御しんじをば、こんかの大夫がつとむるなり。いつものごとくみな〳〵御參り候べしと、八がう八むらをのこりなく、へんしの程にふれとをりて、あらめでたやとぞよろこびける。

さる程に、所の人々此ふれをきくよりも、池のほとりにさんじきをかまへ、みな〳〵つどひて けんぶつせんとさゞめく。さてその日にも成しかば、大夫はさよ姫の御そばに參り、いかにや

姫君聞き〳〵給へ。此所にはむかしより、年に一どの御神事に、いけにへをたてまつる事、さだまりたるほうにて、八がう八村がばんにまはり、此たうをつとむるなり。ことしはそれがしが番にあたりて候へども、たゞ一人もちたる姫にて候へば、あまりにふびんに思ひ、みやこへのぼり候ひしに、うり人おほきその中に、御身にめぐりあひし事、いたはしくは候へども、ひとへにさだまるごうなれば、御なげきありてもせんもなし。たゞ一すじに思ひきり給へ。御なげきのところもあまりにふびんに候へば、ふるさとへ御かたみまいらせ給へ。わざと人をのぼすべし。その事は御心やすく覚しめし、なふ〳〵、いかに大夫殿、はじめよりや。いかに〳〵と申さるゝ。姫君此よしきこしめし、はや〳〵ようい候へ申せしごとく、ちゝのぼだいをとはんため、身をうりすつるうへからは、うきめにあふ事もおやのためにて候へば、なげくべきには候はねども、御覧ごとくふるさとのはゝうへの、ふかくなげかせ給ひしを、いづくのうらにすむとても、たよりの文をまいらせんと、さま〴〵なぐめ参らせをきて候へば、風のたよりのをとづれを、いまや〳〵と御まちあらんもいたはしや。よしそれとても、いまはなげきてかひもなし。はゝごさまへのかたみをば、よきにたのみたてまつると、おとなしやかにのたまへば、おにのやうなる大夫も、しのびのなみだをながしければ、みる人きく人袖をしぼらぬはなかりけり。

さて姫君は、かたみの文をかゝんとて、ぼるゝ泪にめがくれて、筆のたてども見えばこそ。しどろもどろにかきちらし、筆をかしこへからりとすて、りうてういこがれてなき給ふ。いたはしやとも中〳〵申ばかりもなかりけり。やう〳〵心をとりなをし、びんのかみをすこしきり、御文にまきこめて、きたのかたへまいらせ、よきにたのみ奉ると、こゑもたへて〳〵にのたまへば、北のかたもともになみだをながしつゝ、たしかにとゞけて参らせん。御心やすく覚しめせとぞのたまひける。大夫此よしみるよりも、をとなしき姫君やと、なのめならずによろこびて、そのじせつにも成しかば、御いでたちをせさせたてまつり、しらきのこしにしめをはり、姫君をのせ奉り、大夫が一門けふをはれと出たち、さゞめきわたつて十八ちやうをねりつれて、池のはたにぞつきたまふ。きせんくんじゆの

(一) 池か 已下(いげ)

(二) 屋形船

けんぶつは、中〳〵申もをろか也。池のみぎはにはかざり舟三そううかべたり。一そうには所の地とう・まん所、一そうには大夫の一家一門、いま一そうにはしめをかざりごへいをたて、かんぬしいけのやくにん、とうにんなればこんかの大夫、(二)やかたのうちにひめをのせ、さゝめいてこぎ出す。いけの中じまにこぎよせ、三ぢうのたなをかざらせ、四はうにしめをかざり、ごへいをきりたて、うへなるたなにさよ姫をそなへ奉り、中なるたなに、かんぬしごへいをおつとりさいはいしてのつとを申す。下のたなにはこんかの大夫あがつて、しよぐはんじやうじゆといのりけける。

のつとはてゝ後、神ぬしかうべをちにつけて、此姫と申は、こんかの大夫所はんじやう家はんじやうのいのりのために、たて奉る御くう也。かならずなふじゆたれ給ふ。やうがうあれとじゆすさら〳〵とをしもみて、しんかんにそみていのりける。扨ことおはりければ、とる物も取あへず、めん〳〵舟に取のつて、いまや大じやも出るかと、氣も玉しゐも身にそはず、我さきに〳〵と、ろかいをはやめてこぎもどす。やう〳〵いそへつきしかば、かんぬし・大夫をはじめとして、とらのをゝふみ、どくじやのひげをなでたるこゝちして、やう〳〵いそへぞあがりける。さてみぎはになみゐて、今や〳〵とやうがうをまちゐたり。あらふしぎの事どもや、一時までどもやうがうなし。二時までどもみえ給はず。さる程にさよ姫は、心ぼそく三ぢうのたな

一人にたゞひとり、涙なみだにくれておはしますが、今いまはなげきてかひなしと、此世の事はふりすてゝ、一心ふらんにほけきやうの五のまきだいばばんをあそばして、此御經のくりきにより、たとひ我身大じやのゑじきとなるとも、すみやかに佛くわのゑんとなし給へとねんじ給ふ。

さる程に、くがになみゐる人々、こんかの大夫・かんぬしをはじめとして、これはいかなる事どもぞや。いつもよりことしは、ことにすぐれてみめかたちよきにえなれば、さだめて御なうじゆあらんと思ひしに、いまゝでやうがうなき事は、たゞ事にてはよもあらじ。いかさまこれは、神ぬしのゝつとがしんりよにかなはぬやらむ。こはいかゞせん。御きげんをそこなひなば、八がう八むらのうせはてなくならん。のがれぬまでもこゝをば引のひて、めん〳〵御わびごとのきせい申さんとて、あはたゞしげににげかへる。おいたる人やおさなき子は、こゝやかしこに倒ふれふし、堀溝たふれふし、ほりみぞにまろびおち、なきさけぶ叫も哀也。やう〳〵にげかへり、めん〳〵わやゝ久しくありて後、てりはれたるそらかきくもり、雨風はげしく、はたたがみなりて、池のおもてどうようして、そのたけ十ぢやうばかりなる大じやの、まなこは日月のごとくひかりかゞやき、九萬九千のうろこ、一萬四千のひれをさかだて、くちよりくわゑんのいきをはき、くれなひのしたをふりたて、おをもつて水をたゝけば、しらなみたかふ雪の山のごとく也。さよ

姫をみかけて中島にうちあがり、二のたなにかうべをもたせて、既頭早服けり。いたはしやさよ姫は、かねてより思ひさだめし事なれば、すこしもさはぐけしきもなく、高聲揚たからかなるこゑをあげ、いかに大じやたしかにきけ。みづからと甲は、國はやまとのものなるが、今年父御離おさなくしてちゝにはなれ、便たよりなき身となりて、母ごにそだてられ年月をおくりしが、ことしちゝご十三年にあたりしが、菩提弔ぼだいはとひたし、便たよりはなし。さらば此身をうり、身のしろをもつてとぶらはゞやと思ひけるおりふし、この國のこんかの大夫にめぐりあひ、所以下賛不思議今このところにくだり、いまふしぎになんぢがにゑになる事よ。よしやこの身は露霜つゆしもの消きえはつる事も、親孝行おやかう〳〵のためなれば痛歎いたましむる心なし。たゞなげかしきは、此世にまし母上ますはゝうへの事、又は我身のぼだい菩提得なりたなし。今暫いましばしのいとまをゑさせよ。聞暇きゝやうもんせよ。此御經のくりき功力にてちやう成汝じやう佛せよかしとのたまへば、その時かうべをうなだれしたを引、心ありげにみえければ、さよ姫なのめに覺しめし、法華經ほけきやうの五の巻高巻まきたかからにあそばして、(二)云何何身速得しんそくとくじやう佛と、回向しんかんにそみて御ゑかうあり。(三)天龍八部人非人皆見成龍女成佛んちもじやう佛すべしと、てんりうはちぶにんひにんかいようけんぴりう女じやう佛、名文めいも

(152

(一)天王如來となる記別は成佛を許さるゝこと
但し天王如來となりしとは實は提婆なり(提婆品參照)
此御經にひかれて、五逆の逮多は天王記別を蒙り、八歳の龍女は南方無垢世界に生を受くる(謠曲、海士)

(二)云何……成佛(提婆品の句)

(三)天龍八部……成佛(同上)

下卷插繪

(一五一頁參照)

下卷插繪

(一五一頁參照)

讀んよみかけ大じやのかうべにあて給へば、あ蛇頭有難らありがたや、不思議ふしぎやな。十二のつのは一どに落おち、はらりとくだけてちりければ、なを〳〵よく〳〵たもつべしとて、かみからしもへなで給へば、一萬四千のひれ、九萬九千のうろこがあらしに花のちるごとく、はら〳〵とおちにけり。

大じやなのめによろこびて、あらありがたや、この御きやうのくりきにより、じやう佛とくだつうたがいなし。たゞいまのふせもつに、なにをかさゝげ申さんとて、そのまゝ池に入とみえしが、しばらくありて十七八女ぼうとげんじ、さよ姫にげんざんし、いかに姫君それがしは、さるしさいの候て、此池にすむ事九百九十九年也。そのあひだに、人をにえにうしなふる事八百人にあまれり。されども、御身のやうなるたつとき人に、いまだあふ事候はず。かゝるめでたきおりふしに、ざいしやうざんげして、じやう佛とくだつうべきなり。そもゝ〳〵みづからはこの國のものならず。いせの國ふたみのうらのものなるが、いとけなくしてはゝにおくれ、まゝ母ににくまれて、行衛もしらずまよひ出、人あき人にたばかられ、かなたこなたとうられきて此所にかくれなきくりはらの十郎に、かいとめられていたりしを、そのころ此いけわづかの川にて、はしをかくれどもつゐにそのはしじやうじゆせず。人々せんぎあつて、いかゞはせんと申ける。その中にある人のいひけるは、はかせにうらなはせよといふ。もつともとどうじて、

占うらなはせてみれば、眉目みめよき女を人ばしらにかけよといふ。さらばとてみめよき女をえらみて、籤取くじどりにしてしづめんとさだむるに、みづからみくじにあたりしかば、人ばしらにかけんとて、此川ばたに引出す。みづからその時おどろきて、八郷がう八村のうちにみづからをえらびいだし、しづめにかくるははらだちやと、一ねんのたけきにひかれて、すなはち此かわのぬしとして、たけ十ぢやうの大じやしんとなり、きのふけふとは思へども、九百九十九年になる。はや千年にをよぶまで、所の神とあがめられ、たのしむにはにたれども、三ねつのくるしみひまもなき。たゞいまの御きやうのくりきにより、御覧ごとくつのもうろこもおちちりて、大じやのくげんまぬかれたり。今よりのちは天上にむまれ、やがてとくだうの忍んをなすべき也。此御きやうのふせもつに、これを參らせ候はん。これこそりうぐうじやうのだい一のたから、によいほうじゆにて候なり。此玉と申は、何事にても候へ、のぞみのかなふ玉也とて、さよ姫に奉り、扨又君のくに里をうけ給はりて候へば、おくりとゞけて參らせん。御心やすく覺しめせ。君いかに、と申ける。

さよ姫此よしきこしめし、なふ、こはまことにてさふらふかや。いつはりならば中〳〵に、二たびものな思はせそ。はや〳〵いのちをとり給へ。大じやいかにとのたまへば、げに御うたがひことはりなれども、鬼神きじんにわうだうなき物也。御心やすく覺しめよ姫きこしめし、さては嬉しき御事や。さらばやまとへおくりとゞけてたび給へ。しかづ、むかひのきしへつけてたべ。みづからをかい取しこんかの大夫に、いとまごひ申べしとのたまへば、うけたまはり候とて、いそぎくがにぞつけにける。さてさよ姫は、大夫のやかたにうつらるゝ。人〳〵此よしみまいらせ、これは夢かやうつゝかや。さてもふしぎの事共かな。ひとへに神か佛にてましませば、こは御いのちをたすけ給ふらんと、さもありがたくぞ思ひける。さよ姫はじめおはりの事どもを、大夫ふうふにかたらせ給へば、扨もたつとき姫君や。げにもさやうの事ならでは、いかでかなふじゆましますべきと、よろこび給ふかぎりなし。いかにもして此所にとゞめたく候が、いかゞ候はんと申されければ、姫君きこしめし、是にもとゞまりたくは候へども、大和の母の御事のおぼつかなく候へば、いまは御いとま申とて、たちいでさせ給へば、太夫ふうふも御をくりにいで給ふ。八がう八むらの人〳〵、われも〳〵とたちさる程にさよ姫、いけのみぎはにうちのぞみ、いかに大じや、いまはやくそく申せしごとく、をくりとゞけてたまはれや。いかに〳〵とよび給へば、やがて大じやはうかみいで、おくりとゞけて參らせん。これへわたらせ給へとて、姫君をかしらにいたゞき奉り、いけのそこへ入けるが、じんつうえたるものなれば、せつなのほどにやまとのくにならのみやこにきこえたる、

*俚諺 鬼神はよこしまなし。誓むべからず（徒然草「文段抄」二〇七段に）鬼あらじと云ひつるに、鬼神に橫道なきものを（謠曲、大江山）鬼神に橫道なしといふに（謠曲、鍾馗）

猿澤の池のいけのほとりにかづきあげ、今いまはこれまでなり。いとま申てさらばとて、白雲んにうちのり、天へとびゆきうせにけり。それより此池をさるさはとは申也。かの大じやはすなはち、本地大和壺坂の觀音おんなりとかや。

さるほどにさよ姫は、再放郷遷ふたたびふるさとにかとたゝずみたづねさせ給へども、母上はゝうへはましまさで、きつね・ふくろうのすみかとのみぞあれはてける。さよ姫御覧じて、あらなさけなのしだいやと、やかたのうちをうかれいで、所の人にたづね給へば、その御事にて候ぞや。君に御わかれのゝち、あまりにふかき御なげきゆへ、御心もきやうらんし、やかたのうちをも御いでであり、かなたこなたと御さまよひ候ひしが、あまつさへりやうがんをもなきつぶし、さもあさましき御有さまにて、まよひありかせ給ひしが、この程はならのみやこに御座有よし、うけ給候と申ければ、これは夢かやあさましやと、急いそぎならへ御出あり、かなたこなたとたづね給へば、おやと子のきえんにや、やがてたづねあひ給ふ。いたはしやはゝうへは、京わらんべのくちぐ〳〵に、まつら物ぐるひとなづけなづけて、こなたへきたれあなたへ參れとて、子どもになぶられおはします。姫君此よし御覧じて、する〳〵はしりより、これはいかにあさましや。はゝうへさま、さよ姫まいりて候はと、涙なみだとゝもにのたまへば、母は此よしきこしめし、やあ〳〵いかに子どもよ。やれ、みづからが、

古いにしへまつらだにゝありし時、さよ姫とてむすめ一人もちたるをば、人あき人にたばかられ、行ゑもしらずなりぬれば、扨こそみづからもかやうに物にはくるふなれ。さのみになぶり給ひそよ。もうもくにうたれて、後にこなたをうらむるなと、竹のつえををつ取て、あたりをはらはせ給ひける。さよ姫此よし御覧じて、こぼるゝなみだををしとゞめ、かの大じやのあたへつる、によいほうじゆをとり出し、はゝうへのりやうがんにをしあて給へば、たちまちにひらけつゝ、おや子のたいめんありけるは、ためしすくなきしだい也。おや子たがひにいだきつき、これは夢かやうつゝかと、りうていこがれてなき給ふ。うれしなきとはこれならん。

扨さよ姫は、なにをかさのみなげかんと、母うへとともなひて、松浦谷にたちかへり、かのほうじゆよりたからをふらせ、なさけありし人々や、又、にしへの下人けらいのものどもに、かずのたからをたまはりて、いにしへのふりにしあとにやかたをたて、ふたゝびちやうじやとさかへ給ふ。いにしへのけんぞく、一家一るいの人々も、まねかねどあつまりて、むかしにまさるふつきのありさま、申も中〳〵をろかなり。さてあふしうへつかひをたて、こんかの大夫が一門をめしのぼせ、かずのたからを下さるれば、よろこぶ事かぎりなし。そのゝちさよひめはやまとのこくしとさいあひして、御子あまたいでき給ふ。かくてさよ姫は、あふみのくにちくぶじまのべんざいてんによ

現とあらはれ給ふ。此島と申は、八方地離浮島故に、ちりほうさん（地離資山）と申なり。夜*間來島まに出きたるしまなれば、*明生島あけずがしまとも申なり。よのまに竹の三本をひ出たりしかば、竹生島とも申なり。此御島資意資珠第しまのたからは、如意宝珠第一にておはします。末世今までつせのいまにいたるまで、一度參詣の輩例賜を給る事、そのためしもおほかりけり。夢〳〵多編纂孝行疑はたがひ、ふしんじんあるべからず。されば此天女も、親志おやかう行深志ふかくまし〳〵けるにより、かゝるふしぎのたのめしもはべる事にこそ。ありがたし〳〵。侍不思議例

はもち中將

上

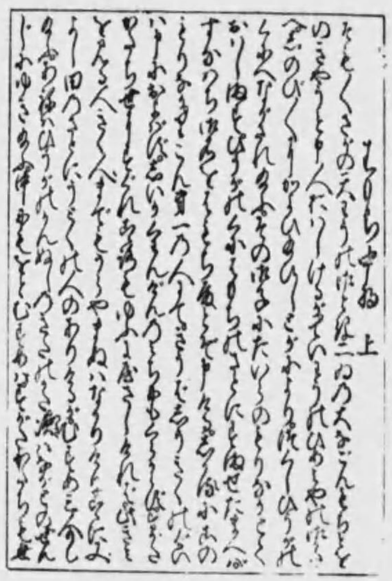
(一)むかしさがのてんわうの御宇に公卿一人ありけり。御名をば二位の……と申せしが（下略）（イ）

(二)佐渡國には羽茂（はもち）あり。本間の一族此に住して、羽埼（はもち）殿と稱す。恐らくは之を借れるか。黒（京大）本には、羽持と書ける箇處あり

うろこ（東北帝大圖書館藏）がたや版上巻

(一)そも〳〵嵯峨さがの天皇わうの御時、二位の大納言なごんもちとをのきやう（卿）と申人おはしけるが、帝王わうの姫宮みやの御方かたへ、しのび〳〵に忍通ひ給ふしとがにより、筑紫日向かよひ流給ひしとがにより、つくしひうがの國にへながされ給ふ。その御子にたいらのもりなかとておはします。ひうがのくに日向國には(二)もちのさとにすませたまへば、すなはち御名をはもち羽持殿とぞ申ける。しかるにこのもりなか、りこん利根第一の人にて、きうば弓馬藝きくのげいは申におよばず、しいか詩歌管鞠及

*景行天皇十年琵琶湖中に涌出すといひ（本朝神社考六）淺井岳の淺井比賣の頭江中に墮ちて島となる（帝王編年記一〇、元正天皇の條）等の傳說あり
竹生島緣起には涌出の年を孝靈天皇の廿五年とし、又行基菩薩竹杖を地に立てて誓ひしといふ一傳をも載す



(一)今の眞幸の一部の舊名を吉田と呼べるなるさすか

(二)あしもとけだかき人もがな〔イ〕

(三)よろづのたからもなにならすあしもとけだかき人もがな、むこにとらんとおもひしに〔イ〕

げんのみちにもくらからず、容說すがたかたち世にすぐれ、心優聞を見る人きく人までも、うらやまぬはなかりけり。

こゝに又よし田のさとにうとくの人のありけるが、娘むすめ三人もち給ふ。姉日向紳吉里有德主北方長門前司遠ぬしのきたのかた、次はながとのせんじにゆき給ふ。中にもをとむすめは、乙娘容說すがたかたちも世にすぐれ、なさけは天下にならびなし。未雙いまだいづかたともつまをさだめ給はず。かゝるゆふなるひめなれば、(二)氏うぢのよからん人もがな、むこにとらんとおもはれける。父羽持此由はもちこのよしきこしめし、あさましやちゝごの此世にましまさば、このひめをわれらむかへんものを。さりながらちゝのよし父吉田かたへふみをやりてみんとて、ねんごろにあそばし給ひて、耶等召らうどうをめしてもたせつかはし給ふ。御つかひよしだにまいりて、御文吉田參覽みをぞさゝげける。よし田御文み給ひて、(三)富貴榮纏ふうきゑいようはなにかせん。何系圖けいずよからん人も流なが末なれ共、大なごんの子なり。そのうへちゝ

ぎやうも八千町持もち給へば、望のぞむところとおぼしめし、召恐おそれながらもむこにとらんとの御返事をいたされける。御つかひ使喜羽持いそぎはもちにかへりて、此よしかくとぞ申ける。羽持はもちなのめにおぼしめし、いろ〳〵とりそろへて、御むかひをぞこされける。吉田殿よしだどのも姫君ひめぎみを、さま〴〵しやうぞくかざりたて、供數多副とも人あまたそへ給ひて、羽持悅はもちよろこび給ふことかぎりなし。さてひめを見給ふに、姫美容色類ようしよくたぐひなかりけり。かほどみめかたちのいつくしきひめも世にはありけるぞや。姿容すがたをいへばはるのはな、容說春花かたちをたとへばあきの月、優ゆふにやさしさかぎりなし。鶯鶯姿ふんわうのふすまのしたに、比翼連理ひよくれんりのかたらひをなし給ふ。姫君ひめぎみ十七さいにて、月障苦のさはりになり給ふ。九の月のくるしみ、あたる十月と申に御産平さんたいらかなり。取上見とりあげみ若君わかぎみにておはします。羽持喜はもちよろこび給ひて、御名をか亀鶴如給ふに、玉をのべたるごとくなるわかぎみを、上御前鶴めづるごぜんとつけ給ふ。かみから容說春かたちをいへばはるのはな、鶯鶯姿ふんわうのふすまのしたに、比翼連理ひよくれんりのかたらひをなし給ふ。ひめぎみ十七さいにて、月障苦のさはりになり給ふ。九の月のくるしみ、あたる十月と申に御産平さんたいらかなり。取上見とりあげみ若君わかぎみにておはします。羽持喜はもちよろこび給ひて、御名をか亀鶴如給ふに、玉をのべたるごとくなるわかぎみを、上御前鶴めづるごぜんとつけ給ふ。かみから〔マヽ〕成年若君出來給三ざいの御とし、又わかぎみいできたまへば、いよ〳〵よろこび給ひて、御名をわかづる御せん覽羽持はもち殿二人のわかぎみを御らんじて、それがし世にありて、みかどへ御みやづ公家邊多數多羽持はもちこそよき子をあまたもちたるとて、うらやまれん上都訴訟ものをあさましや。さりながらいま一たび、みやこにのぼりてそせうを申みんとて、心

樂たのしみおはします。ほどなく又わ若かぎみをばいやづる御せんとつけ給ひて、御てうあひはかぎりなし。

あるときみかどは、くぎやうあまたたち近はむなしくなるときく。その子には羽持ちがことをばゆるしをく。三とせの大ばんつとめさせよとのせんじなり。げつけいうんかくうけたまはり、やがてつくしへつかひをたて、此よしかくと申ける。羽持

あらありがたやとて、よろこび給ふことかぎりなし。ひめぎみもきこしめし、よそのきこへもうれしやな。かほどめでたきことはなし。いそぎのぼらせ給へとすゝめ給へば、羽持はもち殿はきこしめし、ひごろのねがひはかなひたれども、三とせのうち御身にはなれては、しよちもしよりやうもなにならず。いかなるのゝすへ山のをくまでも、三人のわかども、御身とそれがし、見えつみへられつ、つゆのいのちをおくるならば、なにかおもひのあるべきぞ。ちよくいはあ

りがたけれ共、いかゞせんとぞおほせける。ひめぎみきこしめし、おろかなる事をの給ふもの かな。みかどのせんじをそむき給ひては、あめが下にはすまるべきか。そのうへ三人のわかど もをば、みづからよきにそだて申べし。三とせのたつはゆめのまぞ。たゞ〳〵いそぎのぼらせ給へとの給へば、げに〳〵これはことはりなり。あいにおぼれて申たり。おなじくは御身をも

*諸國の武士を徴し交替にて宮城警固の任に當らしむ。任期三年。頼朝の時六ヶ月に改められ、後深草天皇の朝には三ヶ月となる

いかゞ〔イ〕

若わかどもをも、ぐしてのぼりたくおもへども、人のをもはんところもいかゞなり。さてもみやこにて、いかなる事も候て、もしもむなしくなるならば、ごせをばとひてたび給へと、なみだをながしの給ひて、一しゆはかうぞ詠いじ給ふ。

われならでにいまくらすなあけくれと みとせのほどはまちかぬるとも

とよみ給へば、ひめぎみきこしめし、いとうらみ給ひて、返歌にかくぞつらね給ふ。

まちわびてみとせのほどはすごすとも いまさらいかでにいまくらせん

とあそばして、たもとにとりつき給ふを、うらやまぬものはなかりけり。

とも人あまたうちつれのぼらせ給ふを、心づよくもひきはなし、御馬にゆらりとのり給ひて、さるほどにきたの御かたは、つまのきせいとて、よくねんのあきのころ、うさのみやへまいらせ給ふ。いそがせ給へばほどもなく、うさのみやにつかせ給へば、なむや八まん大ぼさつ、つまのはもちあんおんにまぼらせ給へと、ふかくきせいし給ひて、二夜三日ぞこもらせ給ふ。こゝに又ぶんごのくにのぢうにんに、うすきのさゑもんとておはせしが、此人うさのみやのだいくわんのむこなりしが、みな月のなごしのはらいに、あまたのともをひきぐして、うさのみやにさんろうし給ふが、はもちのひめぎみこもりしてましますを、さゑもん見るよりも、あらいつくしのにようばうや。いかさまこのひめはたゞ人ならず。とはばやとおもひて、御とものに

ようぼうたちのそでをひき、いかなる人ぞととひければ、女房此よしうけたまはり、さんざふらふ。此ひめは、はもち殿のきたの御かたにてさふらふが、はもち殿みとせのおうばんつとめにのぼらせ給へば、その御きたうのためにまいらせ給ふとこたへける。さてひめぎみはこしにめされて、御げかうましくける。さゑもん此よしきくよりも、さてはもちはよきにようばうをもたれたり。それがしもしより、にうばうをもちをとるこそ無念むねんなれ。さりながら、人のつまがわがつまにならばこそと思ひきりて、わがやどにかへりしが、みちすがらあんじけるは、はもちみやこにあるうちに、いかにもしてくどきて、一夜のちぎりをこめばやとぞおもひける。それがしがにうばうを、みればなかくはらもたつ。しよせんまづくさらばやとおもひて、いとまをふみにしたゝめて、おやのかたへぞをくりける。これがたとへかや、おとこのこゝろとかわのせは、一夜にかはるとは、いまこそおもひしられたり。さてかうばいのだんしに、いろくのことばをひきこめ、文こまくとかきしたゝめ、やまがたやうにをしたゝみ、まつかわむすびにひきむすびて、らうどうをちかづけ、はもちのきたのかたへぞつかはしける。つかひいそぎはもちのたちにまいり、あんなひこうてめのとをちかづけ、此よしかくとぞ申ける。めのと御文うけとりて、きたのかたへぞさゝげける。ひめぎみ此ふみ御らんじて、みやこにましますはもち殿をば、世になきものとおもふかや。よの中

*偃諺 夫の心と川の瀬は一夜に變る譬あり（あきみち）

*未詳 樋田（ひだ）か 大隅國には菱田（ひしだ）と呼ぶ地あり

にはよしなき人もありやとて、そのまゝふみをぞかへさるゝ。つかひめんぼくうしなひて、いそぎかへりて、此よしかくとぞ申ける。

さゑもん此よしきくよりも、尤もことはりとはおもへども、こゝろもそらにならしばの、見ばやとあんじわづらひたりしが、げにおもひいだしたり。ぶぜんのくにひしだのさとに、新太夫とてあり。かれが女ばうは、はもちのきたのかたへつねにたちいるとうけたまわる。ことに此女ばうは、いろごのみのものにて、名をばあんなふとぞ申ける。これをたのみて見ばやと思ひて、ひしだのさとにつかひをたて、新太夫をよびよせて、いかに太夫、御身をたのむべき事あり。たのまれ給はゞ申べし。たのみたきとぞおほせける。新太夫はうけたまはり、おゝきにおどろき、いかなる事にかとぞんじて、やすき御事と申て候へ共、此ことは

とにおゐては思ひもよらずと申ければ、左衛門さゑもん此よしきくよりも、大事を人にかたらせて、かなふまじとはきくわいなり。しよせんこひて死したるも、御身とさしちがへて死したるもおなじ事とて、すでにかたなをぬかんとす。太夫はせひにおよばずして、そのぎにて候はゞ、さらば御文あそばし候へ。かなはぬまでも申てみんと申ければ、さへもんなのめによろこびて、文こまぐ〳〵とかきしたゝめ、太ゆふにぞわたしける。

太夫御文うけとりて、わがやどにかへり、つまのあんなふに此よしかくとぞ申ける。あんなふ此よしきくよりも、御身の事をそむくにてはなけれども、つまをもちたる上らうの、何しになびき給ふべき。そのうへ此事はもちどのにもれきこへなば、みづからふうふはいたづらものとて、しざいにおこなはるべし。ひらに此事はむやうなりとぞ申ける。太夫此よしきゝてそかに此事申させ給へと申ければ、そのぎにてあるならば、かなはぬまでも申て見んとて、ひし田のさとを立いでゝ、みやまづたひのみちすがら、こゝろづくしのはてしなく、あけぬくれぬといそげばほどなく、十一日と申に、ひうがのくにゝきこへたる、はもちのさとにつきにける。めのとのじゞうをよびいだし、あんなふまいりて候と、まづあんなひをぞ申ける。じじう

御せんへまいりて、此よし申あげければ、何、あんなふと申か。留すはさながらつれ〴〵なるに、よくこそきたり給ひたれ。こなたへ御いりさふらへとて、御まへちかくめされける。あんなふもとより心かしこく、いろごのみのものなれば、いにしへいまのことのは、よも山のもがたりを二三日申つゝ、よき折ふしを見つくろひ、かの玉づさをとりいだし、かやうの事はにむすびし御返事、御なさけに給はれかしとぞ申ける。ひめぎみ此よしきこしめし、なさけなしとよあんなふは、思ひもよらぬつかひかな。みやこにましますはもちをば、世になきものとおもふかや。たとひはもち殿世になくて、ながきわかれの身なりとも、けんしんにつかへず、ていちよりやうふにまみへずと、こじんも申をかれたり。それはともあれみづからは、ふみの返事はかなはずとて、さらにとりあげもし給はず。あんなふ此よしうけたまはり、何とさのみに御心なたけかりそ。こひといふ事のあればこそ、ほうざうびくのいにしへ、やくしばとけいまだぼんぶにてましくけるとき、てんぢくのわうのひめみやを、風のたよりにきこしめし、三ねん三月にゆくみちを、たづねゆかんとおぼしめし、ちゝはゝをすて給ひて、かのくにへたどりゆき、ふしぎのゑんにまいりあひ、たまづさをかよわせ給ひて、つひにふうふとな

(一) 王蠋曰、忠臣不ㇾ事二二君一、貞女不ㇾ更二二夫一（史記八二、田單列傳第二二）王蠋は齊の人

(二) 阿彌陀佛が未だ佛となり給はざる以前の御名

(三) 今昔物語五、東城國皇子善生人通二阿就頭女一語第二二參照

なほ、本誌一〇頁（朝顏の露の宮）照合

らせ給へば、父帝のみかどきこしめし、人もかよはぬを奥く山へながされておはせしが、わりなさの御ちぎり御くわひにんと有しかば、いまの契懐妊里出みだぼとけはさとへいでゝ、じきを食求めまして、薬師のやくしをはごくみ給ひしが、故郷こきやうにすてを捨置くちゝはゝの父母、何とならせ給ふらん。見て歸かへらんとおぼしめし、東城國歸とうじやうこくへかへらせ給ふ。そのあとにてあしゆくぶにん御さん頭夫人産ならせ給ふ。そのなさけふかきゆへ、故深情いまの薬師如来のやくしによらいとはおがまれさせ給へ。其後そのゝち有様せんしやう太子はかへらせ給ひて、此ありさまを御らんじて、世にあはれとおぼしめし、賢覧心しんをおこし給ひて、阿彌陀現給あみだとげんじたまひて、四十八願ぐわんをちかひ給ふ也。その二人の御誓子は、くわんをん勢至菩薩摂くわんをん・せいしとならせ給ふとうけたまはる。かゝる大こくの帝王姫宮ていわうのひめみやさ戀放へこひゆへかやうに御身をすてさせ給ふ也。*我朝斎宮ろをつくしふうふとならせ給ひて、うたのみち道和承をもやはらげ給ふとうけたまはる。いわんや御夫婦臺臼杵左衛門身とうすきのさゑもん殿との御迷ましひ、何かくるしうさふらふべき。心つれなのひめぎみや君苦候流涙なみだをながしくどきければ、姫君口説と、なみだをながしくどきければ、ひめぎみ此よしきこしめし、かゝるこひぢにまよはず共、心一便こゝろひとつをたよりにて、なげはほとけに佛業平ならざらん。わがてうのなりひらは、大にちの化身齋宮犯科けしんなりしが、さいぐうをおかし給ひしとがにより、長悪道ながくあくどうにはおち給へ。みづか羽持餘騎らにおきては、千日千夜くどかせ給ふとも、はもち殿よりほかに、又よの人に見へん事、今こん

じやうにてはかなふまじ。御身のやうにくちきく人を、見るもなか〳〵恐おそろしや。罷まかりたちてとの給ひて、寵中入言葉れんちうにぞいり給ふ。ことばなくしてあんなふは、わがやどへかへりて、臼杵左衛門うすきのさゑもんに此よしかくとぞ申ける。左衛門聞さへもん此よしをきくよりも、あらはらだち腹立やせんつく〳〵とあんずるに、つま夫所詮さよ。しよせんつく〳〵とあんずるに、つま夫餘騎のつわものを、三百よきすぐつて、途兵みちにてまちうけ、みちにてまちうけ、女ばうをうばいとり、わがつまにせんとあんじすまして、寛妻案くわんぢ元ねん六月廿一日に、ぶんごのくにをたち、豊後國治年都みやこをさしてぞのぼりける。ほどなくびんごのくにに、備後國上都みやこにてさたはなかりつるかといひければ、あ下今くだりをいまやおそしとまちにけり。遅待

かゝるところへみやこより、あき人一人くだりし人、羽持商頃はもちといふ人は此ごろくだるよし、下都みやこにてさたはなかりつるかといひければ、あき人うけたまはり、さん候。羽持承はもち殿はらいねんのはるのころ、くだらせ給ふとうけたまはる。委來年春くわしき事はぞんせずとて、あき人はとをりけり。左衛門此よしきくよりも、さてははもちは存商通都聞下らいねんくだり給ふかや。これよりわがくにに羽持國詮下りてもせんなし。是よりすぐにみやこにのぼ帝羽持讃奏りて、みかどの御前にてはもちをざんそうして、世になきものとなすならば、やす〳〵と女房を